

—東九州自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(1)—

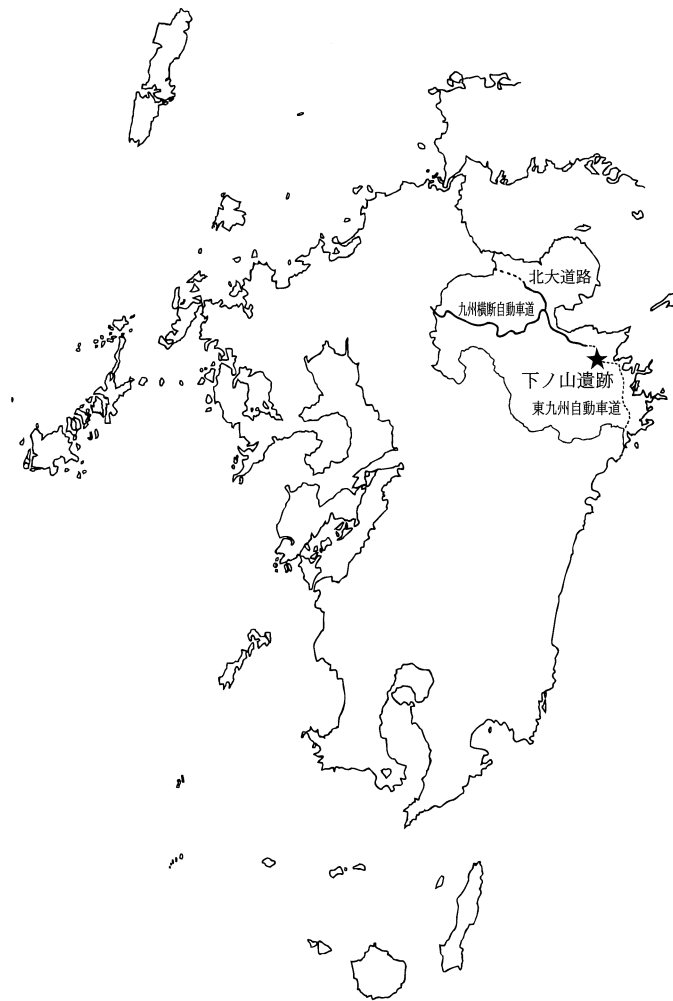
# 下ノ山遺跡

2001

大分県教育委員会

—東九州自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(1)—

# 下ノ山遺跡



2001

大分県教育委員会



下ノ山遺跡遠景(北西から南東を望む)



旧石器時代 楔形石器、彫器様石器、スクレイパー、石核



縄文時代早期 石鏃、尖頭状石器



縄文時代早期 削器、搔器、スクレイパーなど



縄文時代早期 石核

## 序 文

大分県教育委員会では、日本道路公団の委託を受けて、東九州自動車道の建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査を平成7年度から実施してまいりました。本書はこの調査の一つとして、平成10年7月から平成11年2月にかけて発掘調査を行った白杵市大字吉小野字下ノ山に所在する下ノ山遺跡についての報告書です。

遺跡からは、大分県南部地域では数少ない縄文時代早期を主体とする特色ある遺構・遺物が発見されました。これらは当地域の歴史を知るうえで貴重な資料となるものです。今後、本報告書が埋蔵文化財の保護・啓発ならびに学術研究のために役に立てば幸いです。

おわりに、この発掘調査に御協力をいただきました関係者の方々、地元の皆様に対し、深く敬意を表すとともに厚くお礼を申し上げます。

平成13年3月

大分県教育委員会  
教育長 田 中 恒 治

## 例 言

1. 本書は東九州自動車道の建設に伴い日本道路公団の委託を受けて、大分県教育委員会が平成10年度に実施した下ノ山遺跡の発掘調査報告書である。
2. 遺構の実測・写真撮影は各調査員がそれぞれ行った。
3. 遺物の整理は大分県教育庁文化課文化財資料室で調査員・整理補佐員がおこない、遺物の実測・図版等のトレースは大分県教育庁文化課職員及び整理補佐員の多くの方々の協力を得た。遺物の写真撮影は主に野崎哲司が行った。
4. 石材の鑑定は、大分県地質学会会長の野田雅之氏にご教示を賜った。
5. 出土遺物ならびに実測図・写真等の資料は、大分県教育庁文化課文化財資料室で保管している。
6. 本書の執筆と編集は清水宗昭、栗田勝弘の指導のもと、野崎哲司が行った。

## 凡 例

1. 図版の遺物番号は遺物写真に記載されたものと同じであるとともに遺物の一覧表と同じ番号となっている。また、遺物の説明のために便宜上、各ページ毎に通し番号をつけた。なお、石器以外の遺物番号は現場で「土器・その他」として取り上げた番号である。観察表は実測した遺物のみでその他は略した。
2. 発掘区画のC2はC列の2列目という意味である。
3. 報告書内に使用した座標は、昭和43年建設省告示第3059号の規定による第Ⅱ座標系である。図郭に表示してある座標値はキロメートル単位である。
4. 挿図の縮尺は挿図中にスケールを入れている。
5. 挿図の方位は、第3図のみ真北で、その他は磁北である。
6. 当遺跡では、一部攪乱で混在している遺物を旧石器・縄文早期のそれぞれの文化層に帰属させるために個体識別を行った。識別は石材の色調・石質など肉眼観察で行った。P64の第13表は全個体の一覧表である。  
1～9までは旧石器時代、10～35までは縄文早期である。その他は単体の個体として考え、番号は付さなかった。
7. 攪乱層石器器種組成表は、12層、17層、表土層一括、不明一括を含んでいる。

# 本文目次

序文

例言・凡例

第1章 調査の概要	1
(1) 調査に至る経過	1
(2) 調査組織	1
(3) 調査の経過	1
第2章 地理的歴史的環境	2
(1) 地理・地質的環境	2
(2) 歴史的環境	2
第3章 遺跡の概要	5
第1節 遺跡の立地	5
(1) 遺跡の立地	5
第2節 層序・文化層	5
(1) 基本土層	5
(2) 文化層	6
第4章 調査の成果	17
第1節 旧石器時代	17
(1) 遺構の分布	17
(2) 石器組成と石材組成、個体別資料及びその分布	17
(3) 石器	18
(4) 剥片剥離技術	27
第2節 縄文時代	33
(1) 遺構の分布	33
(2) 土器	33
(3) 石器組成と石材組成、個体別資料及びその分布	39
(4) 石器	40
第3節 攪乱層出土石器	51
(1) 遺物	51
(2) 縄文時代早期の剥片剥離法	55
第4節 中世・近世の遺構と遺物	56
(1) 遺構	56
(2) 遺物	56
第5章 まとめ	58
(1) 旧石器時代	58
(2) 縄文時代早期	60
(3) 遺跡の性格	62
○下ノ山遺跡石器観察表について	65



## 挿 図 目 次

第 1 図 白杵市地形図	3
第 2 図 白杵市内地質図	3
第 3 図 白杵市内遺跡分布図	4
第 4 図 下ノ山遺跡路線内位置図	5
第 5 図 下ノ山遺跡遺構分布図	7
第 6 図 下ノ山遺跡攪乱層分布図	8
第 7 図 下ノ山遺跡土層図	9~10
第 8 図 下ノ山遺跡垂直数量分布図	11
第 9 図 土層投影図	12
第10図 下ノ山遺跡石器垂直分布図 1	13~14
第11図 下ノ山遺跡石器垂直分布図 2	15~16
第12図 1号集石炉実測図	17
第13図 旧石器時代石器分布図	19~20
第14図 旧石器時代石器個別分布図	21~22
第15図 旧石器時代石器実測図 1	23
第16図 旧石器時代石器実測図 2	24
第17図 旧石器時代石器実測図 3	25
第18図 旧石器時代石器実測図 4	26
第19図 石器計測の一例図	28
第20図 旧石器時代流紋岩剥片類剥片長幅比分布図	28
第21図 旧石器時代流紋岩打面長幅比分布図	28
第22図 旧石器時代剥片類剥片剥離角	29
第23図 旧石器時代剥片石器実測図	30
第24図 2号集石炉実測図	33
第25図 3号集石炉実測図	33
第26図 縄文時代早期土器分布図 1	34
第27図 縄文時代早期土器分布図 2	35
第28図 縄文時代早期土器分布図 3	36
第29図 縄文時代早期土器実測図 1	37
第30図 縄文時代早期~後期土器実測図 2	38
第31図 縄文時代早期土器百分率	39
第32図 縄文時代早期石器分布図	41~42
第33図 縄文時代早期石器個別分布図	43~44
第34図 縄文時代早期石器実測図 1	46
第35図 縄文時代早期石器実測図 2	47
第36図 縄文時代早期石器実測図 3	48
第37図 縄文時代早期石器実測図 4	49

第38図	縄文時代早期石器実測図 5	50
第39図	攪乱層出土石器実測図 1	53
第40図	攪乱層出土石器実測図 2	54
第41図	1号土坑実測図	56
第42図	1号土坑出土遺物実測図	56
第43図	中世・近世出土遺物実測図	57
第44図	1号集石炉石材分布図	58
第45図	旧石器時代器種別百分率	58
第46図	旧石器時代石材重量別百分率	59
第47図	旧石器時代石材別分布図	59
第48図	縄文時代早期器種別百分率	60
第49図	縄文時代早期石材重量別百分率	60
第50図	縄文時代早期石材別分布図	61
第51図	被熱石器分布図	61
第52図	縄文時代早期県南遺跡分布図	62
第53図	参考資料・東台遺跡剥片実測図（未報告）	63
第54図	座標設定図	65

## 表目次

第1表	第4層以下石器器種組成表	18
第2表	打面の大きさと打面形態の相関関係表	29
第3表	打面形態と打面調整の相関関係表	29
第4表	剥離角と打面形態の相関関係表	29
第5表	剥離角と剥片形態の相関関係表	29
第6表	背面構成と打面形態の相関関係表	29
第7表	打面形態と剥片形態の相関関係表	29
第8表	背面構成と剥片形態の相関関係表	29
第9表	旧石器時代打面計測一覧表	32
第10表	縄文時代土器観察表	39
第11表	第2層石器器種組成表	40
第12表	攪乱層石器器種組成表	52
第13表	全個体別一覧表	64
第14表	石器観察表（1）	66
第15表	石器観察表（2）	67
第16表	石器観察表（3）	68
第17表	石器観察表（4）	69
第18表	石器観察表（5）	70
第19表	石器観察表（6）	71
第20表	石器観察表（7）	72
第21表	石器観察表（8）	73
第22表	石器観察表（9）	74
第23表	接合資料石器観察表	74

## 図版目次

- 図版1 下ノ山遺跡遠景  
下ノ山遺跡全景
- 図版2 作業風景  
1号集石炉検出状況  
1号集石炉完掘状況
- 図版3 2号集石炉検出状況  
3号集石炉検出状況  
3号集石炉断面状況
- 図版4 1号土坑検出状況  
1号土坑完掘状況  
基本土層
- 図版5 旧石器時代 彫器様石器、楔形石器、UF、RF、スクレイパー、石核、剥片
- 図版6 旧石器時代 UF、スクレイパー、剥片
- 図版7 旧石器時代 剥片、石核、敲石
- 図版8 縄文時代早期 押型文土器
- 図版9 縄文時代早期 条痕文土器、無文土器  
縄文時代早期 石鏃、尖頭状石器
- 図版10 縄文時代早期 搔器、削器
- 図版11 縄文時代早期 スクレイパー、RF
- 図版12 縄文時代早期 UF、RF
- 図版13 縄文時代早期 石核、チャップパー  
中・近世 キセル、簪、韃羽口

## 第1章 調査の概要

### (1) 調査に至る経過

東九州自動車道は北九州から宮崎県北郷までの全長約436kmの高速自動車道である。このうち平成3年12月に大分県大分市から津久見市間（約27km）の整備計画が決定され、平成5年11月に大分～津久見間の施工命令がだされた。

一方、大分県教育委員会では日本道路公団の委託事業として大分～津久見間の道路建設予定地の分布調査を実施した。この結果をもとに、臼杵市内の川野遺跡、久木小野遺跡、下ノ山遺跡、荒田遺跡、清太郎遺跡、野田遺跡で用地買収の終了した地区から本調査を実施した。

今回報告する下ノ山遺跡は平成10年7月から平成11年2月にかけて本調査を実施した遺跡である。

### (2) 調査組織

発掘調査は以下の組織で行った。

調査主体 大分県教育委員会

田中恒治（教育長）

調査総括 後藤一郎（大分県教育庁 文化課長）

田原基之（同 参事兼課長補佐）

調査員 清水宗昭（同 課長補佐兼埋蔵文化財第2係長）

栗田勝弘（同 主幹・調査主任）

永井 実（同 主任・調査担当）

豊田徹士（同 嘱託）

上角智希（同 嘱託）

野崎哲司（同 嘱託・調査担当）

### (3) 調査の経過

平成10年6月に分布調査を行い、その結果縄文時代早期の土器片を確認した。本調査は平成10年7月に表土を重機で剥ぎ、調査区全体に南から北にA～D、西から東に1～3で、10×8mのグリットを設定。人力で掘り下げて行った。

調査区の中央部分は緩やかな丘陵部分となっており、この部分を掘り下げて行った結果、茶褐色土の縄文時代早期の包含層（2層）より被熱し赤く変色した2基の集石炉を検出することができた。そして、同一文化層から縄文時代早期の451点におよぶ押型文土器、無文土器、総数183点の石器、剥片が出土した。また、約2万2千年前のAT層（3層）の下の黒色帯（4、5層）から被熱した1基の集石炉と、109点の石器、剥片を検出することができた。旧石器の集石炉が出土したC2グリットに限り九重火山灰層（Kjp1）の下まで掘り下げて見たが、遺物の確認はできなかった。

その他に、攪乱層から中世の貨幣や輸入陶磁器、近世の土坑や時期不明の柱穴を確認した。調査は平成11年2月に終了した。

## 第2章 地理的歴史的環境

### (1) 地理・地質的環境

遺跡が所在する白杵市は豊予海峡に面する大分県東部に位置し、海岸部の東側を除く、北・西・南を縦ノ木山地や鎮南山山地などに囲まれている。その間を白杵川、末広川等の中小の河川が山地と台地を侵食し、複雑な地形を形成している。北部の縦ノ木山地は佐賀関半島の背稜をなすもので、九州島を斜断する中央構造線の北東端部にあたる。約7万年前に噴出した阿蘇火砕流（熔結凝灰岩）は、大野川流域から白杵川に流れ込み、谷部を埋めて台地や丘陵を形成し、河川の浸食をうけていくつかのブロックに分けられる。このような台地付近には湧水が認められ、生活の場としては良好な条件を満たしている（第1図）。

白杵地方の地質については、北部の縦ノ木山地が、古生代三波川層結晶片岩類を基盤とするもので、石英岩、蛇紋岩を産出する。さらに南部の津久見島等にはシルル紀のチャート層群がみられる。中世代では二疊紀の石灰岩、千枚岩、粘板岩等が市の東南域の基盤をなし、白亜紀の砂岩、頁岩等の堆積岩が諏訪山、水ヶ城等の中央域の山地を形成している（第2図）。

### (2) 歴史的環境

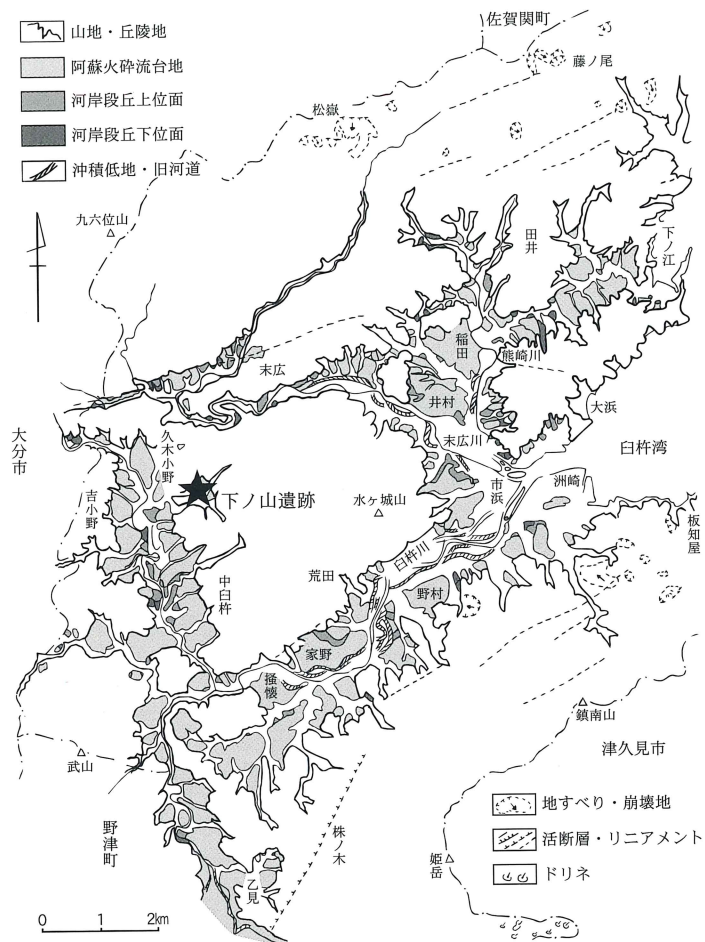
白杵市内で最も古い人間の生活の跡が発見されたのは、1973年に発掘調査され後期旧石器時代の無斑晶流紋岩製のナイフ形石器、石核、削器が出土した東台遺跡である。周辺の阿蘇溶結凝灰岩の台地上にはこの時期から縄文時代にかけて多くの遺跡が分布している。

縄文時代早期では1952年に発掘調査された小六洞穴をはじめ、戸室台遺跡、田篠台遺跡、家野遺跡、井ノ上遺跡、板川野遺跡、東台遺跡等があり、東九州自動車道建設に伴い調査した荒田遺跡でも早期の押型文土器が出土している。縄文時代前期・中期の遺跡は白杵市内では現在のところみられないが、後期では、東台遺跡の住居跡状遺構の中から三万田期の土器に共伴して、扁平打製石斧、石包丁状石器等の石器類が出土している。このほか後期の遺跡では同じく東九州自動車道建設に伴って調査した清太郎遺跡、荒田遺跡がある。晩期は、久木小野神社遺跡、戸室台遺跡から浅鉢の黒色磨研土器、尾首遺跡から刻目突帯文を持つ深鉢が出土している。

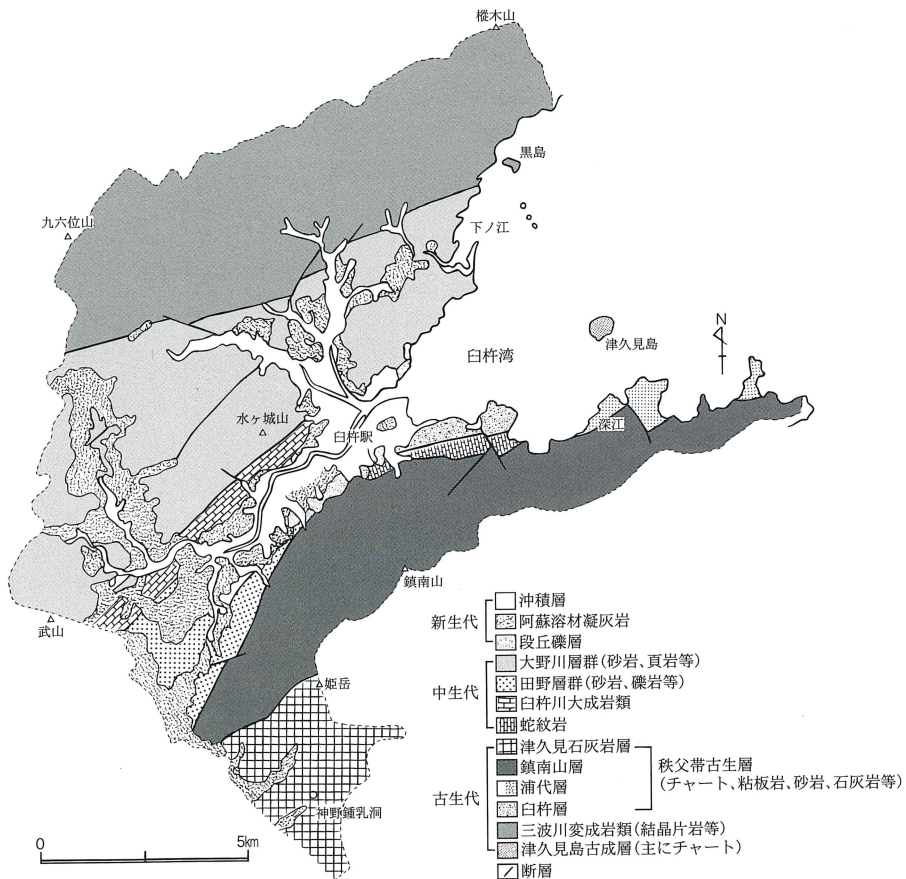
弥生時代では河川流域の台地上に集落遺跡が点在する。末広川右岸の田篠台遺跡では弥生終末～古墳時代前期初頭の円形・方形竪穴住居跡が15軒検出され、白杵川中流左岸の荒田遺跡でも弥生時代後期の大型竪穴住居跡が、また対岸の野村台遺跡では同期の環濠が検出されている。また、同時代の祭祀関係の遺物として、坊主山遺跡から7口の広形銅銚、仲山遺跡から中細銅戈一口が出土している。

古墳時代前期では白杵川右岸の観音寺古墳が白杵地方最古の古墳として調査された。この時期は佐賀関半島に産する緑泥片岩の箱式石棺が使用され、諏訪山遺跡や荒田遺跡等でも発見されている。5世紀代の中期になるとこの地方では、一挙に大型の前方後円墳が築造される。熊崎川右岸の台地上に全長85mの白塚古墳、左岸の丘陵尾根上に全長65mの下山古墳が前後して造られる。いずれも短甲形石人を附設するもので、前者は2基の舟形石棺、後者は組合せの長持形（家形）石棺を内部主体とする。注目される副葬品としては、白塚古墳では「位至三公」の銘をもつ、銅鏡、下山古墳では県下唯一の鉄鋌が出土している。また、同じ流域にある大型円墳の神下山古墳も5世紀代である。このことから、白杵地方は海部の中でも古墳中期に有力な首長層を輩出した枢要な地域としてとらえることができる。後期には各地に横穴墓が見られ、清太郎遺跡では6世紀代の竈をもつ竪穴住居跡が検出されている。

古代は平安時代半ばまでの遺跡は、ほとんど発見されていないが、白杵石仏周辺の調査で平安末



第1図 白杵市地形図(白杵市史より再トレース一部改編)



第2図 白杵市内地質図(白杵市史よりトレース一部改編)

から室町時代の工房跡等の遺構群が確認されている。また、白杵川流域の清太郎遺跡や野村台遺跡では、11世紀末から12世紀にかけての輸入陶磁器類が出土している。さらに荒田遺跡では、12世紀から15世紀の墓地、地下式墳が発見されている。このほか中世の遺構として野村台遺跡では、中世居館の堀とみられる断面逆台形の大型の溝が見つまっている。なお豊後大友氏は14世紀～16世紀にかけて本拠地を府内から白杵に移しているが、その時期の遺物が出土した戸室台遺跡では、武士の大型居館と思われる遺構が確認されている（第3図）。

参考文献 白杵市『白杵市史』上巻 1990

清水宗昭ほか『東台遺跡』白杵市教育委員会 1974

菊田 徹編『白杵石仏群地域遺跡』Ⅰ～Ⅴ白杵市教育委員会 1976～1980

菊田 徹編『白杵石仏群地域遺跡』白杵市教育委員会 1982

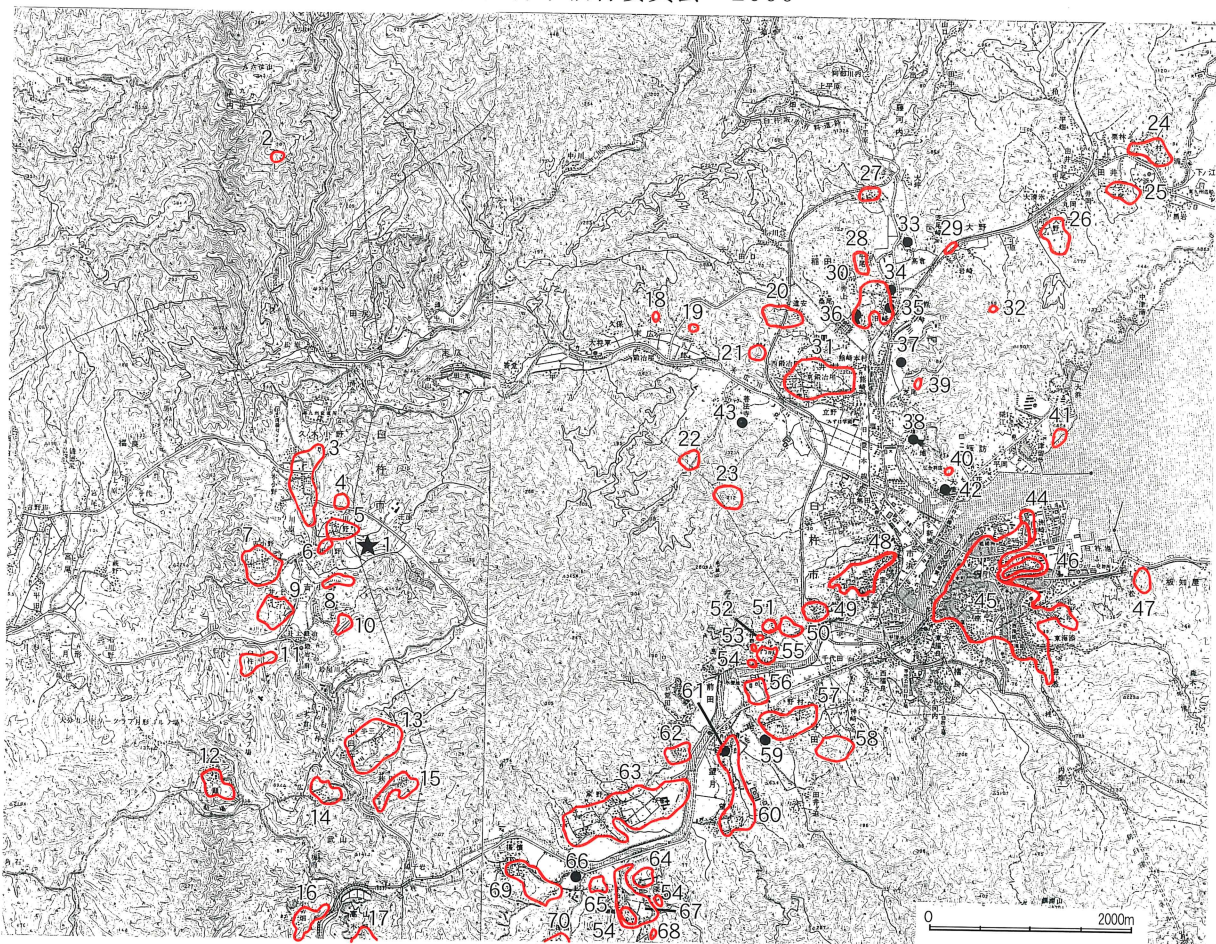
菊田 徹編『末広焼』白杵市教育委員会 1982

神田高士編『野村台遺跡』発掘調査現地説明会資料 白杵市教育委員会 1995

神田高士編『田篠台遺跡Ⅱ』白杵市教育委員会 1996

神田高士編『下中尾遺跡』白杵市教育委員会 1996

小倉 卓編『家野遺跡』白杵市教育委員会 2000



第3図 白杵市内遺跡分布図(国土院二万五千分の一地形図「白杵」「戸次本町」より転載、一部訂正)

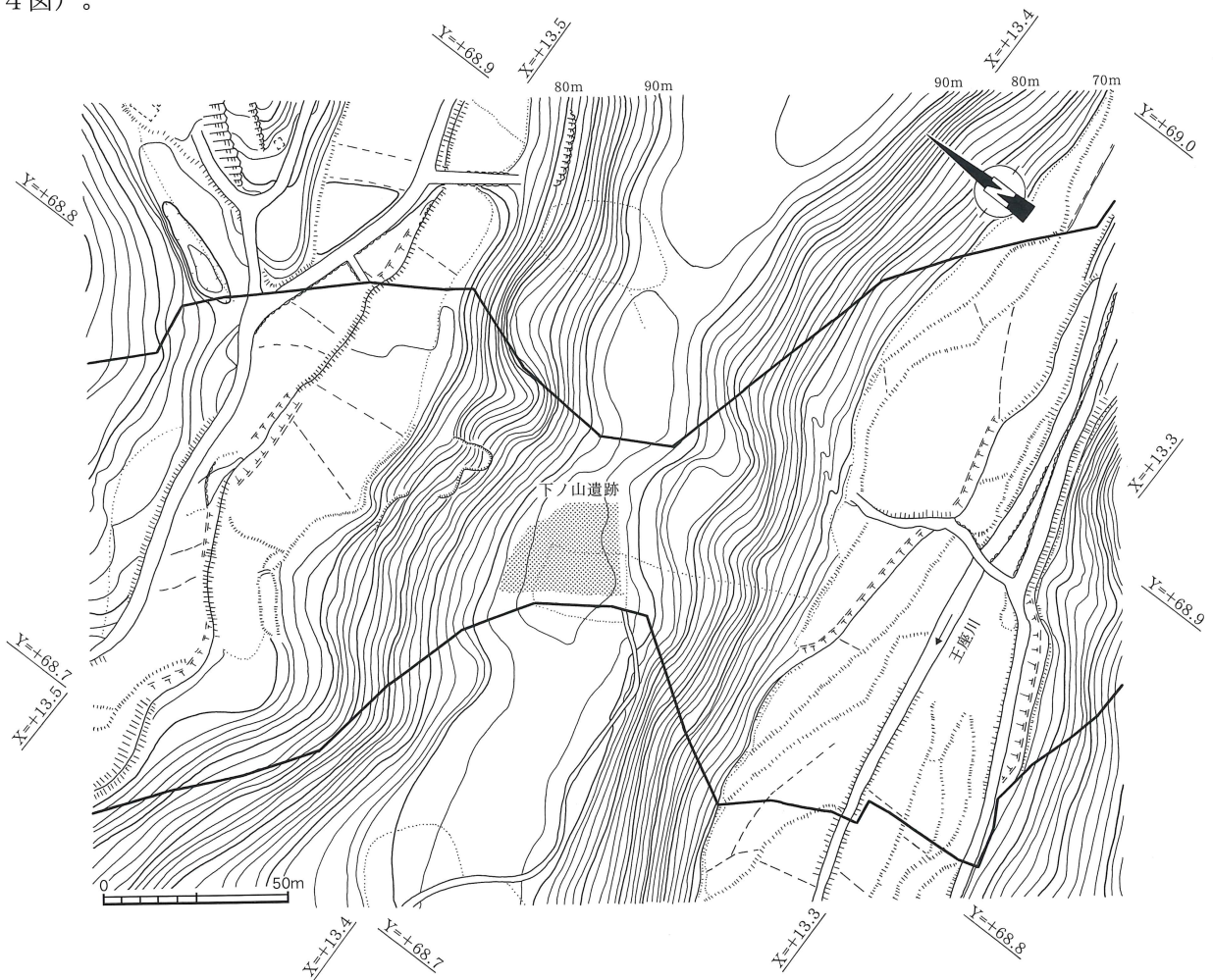
- 1.下ノ山遺跡 2.八大龍王塔 3.久木小野遺跡 4.川野近世墓地群 5.川野遺跡 6.川野石塔群 7.吉小野遺跡 8.板川野遺跡 9.井ノ上遺跡
- 10.久保遺跡 11.東台遺跡 12.正願遺跡 13.半三遺跡 14.広原遺跡 15.狭岡遺跡 16.小切畑遺跡 17.木ヶ畑遺跡 18.小六洞穴遺跡
- 19.長小野塚 20.道安遺跡 21.坊主山遺跡 22.末広焼窯跡 23.水ヶ城跡 24.中村遺跡 25.平尾遺跡 26.大野遺跡 27.徳尾遺跡
- 28.栗山城跡 29.芝尾崎横穴 30.三重野遺跡 31.井村遺跡 32.竜王山遺跡 33.高倉古墳 34.鏡塚古墳 35.田崎古墳 36.白塚古墳
- 37.神下山古墳 38.下山古墳 39.仲山遺跡 40.諏訪山遺跡 41.の場山台遺跡 42.諏訪横穴 43.末広横穴 44.将棋台塚跡 45.白杵城下町
- 46.白杵城跡 47.琵琶ヶ鼻台場跡 48.戸室台遺跡 49.本田館跡 50.小中尾遺跡 51.海蔵寺跡 52.門前地下式横穴A 53.門前地下式横穴B
- 54.白杵磨崖仏 55.円福寺遺跡 56.持田遺跡 57.野村台遺跡 58.野田遺跡 59.野村台横穴墓 60.望月遺跡 61.清太郎遺跡 62.荒田台遺跡
- 63.家野遺跡 64.後楽遺跡 65.下中尾遺跡 66.観音寺古墳 67.白杵石仏群地域遺跡 68.深田地下式横穴 69.搔懐遺跡 70.後原田遺跡

## 第3章 遺跡の概要

### 第1節 遺跡の立地

#### (1) 遺跡の立地

下ノ山遺跡は大分県白杵市大字吉小野字下ノ山に位置する。遺跡は阿蘇熔結凝灰岩を基盤とする侵食をうけた尾根状の標高90.5～91.6m前後の台地上に立地する。北側に縦ノ木山地の九六位山を望むことができ、遺跡の立地するやや平坦な地形は東西に25m、南北に35mの範囲で、遺跡の北と南は谷地形になっており、その比高差は20～30mである。谷部は現在、田地として使用されている。南側には白杵川の支流である王座川が、北側には同じく支流の中白杵川が流れている（第4図）。



第4図 下ノ山遺跡路線内位置図(1/2000)

### 第2節 層序・文化層

#### (1) 基本土層

下ノ山遺跡における地層は表土を含め、11層まで確認した。層位は南北方向に2本と東西方向に1本の土層断面により確認した。以下、調査区の表土下の基本土層について説明する。

- 1層：黄褐色土層、約6,300年前に、南九州の鬼界カルデラを噴出源とするアカホヤ火山灰層である。
- 2層：茶褐色土。粘質の土である。縄文早期の包含層である。
- 3層：A T（始良・丹沢降下火山灰）層。色調は、淡黄褐色土である。A Tは、南九州の鹿児島



湾北部の始良カルデラを噴出源とし、九州から、東北地方にかけて広域に分布している。その噴出年代は、上下の堆積物の放射性炭素年代測定から、2.1～2.2万年と推定されている（町田、新井 1976、1983）。近年の放射性炭素年代測定の中で、液体シンチレーション法により $24,720 \pm 290$  yrs B P（松本他 1987）、タンデトロン加速器質量分析法により $24,330 \pm 225$  yrs B P（村山他 1993）という放射性炭素年代値が得られている。これらのデータから、A Tの噴出年代が従来値よりやや古くなる可能性がある。

4層：黒色帯層。茶褐色土。いわゆるA T下位の層で、旧石器時代の石器を含む。

5層：黒色帯下層。茶褐色土。よく締まった、灰褐色土をブロックで含む。旧石器時代の石器が少し検出される。

6層：黄褐色砂岩質土。5層との漸移の部分が見られる。

7層：九重山火山灰層（Kjp 1）・黄白色土層、30,000～35,000年前の通称マメンコ層である。無遺物層。

8層：赤茶褐色弱粘質土。無遺物層。

9層：明茶褐色土。無遺物層。

10層：灰赤褐色粘質土。粒子が細かく、白色土粒、硫化鉄を含む。無遺物層。

その他、第6図は当遺跡における攪乱の範囲を表した分布図である。

#### 参考文献

町田洋・新井房夫 『火山灰アトラスー日本列島とその周辺ー』 東京大学出版会 1992

## （2）文化層

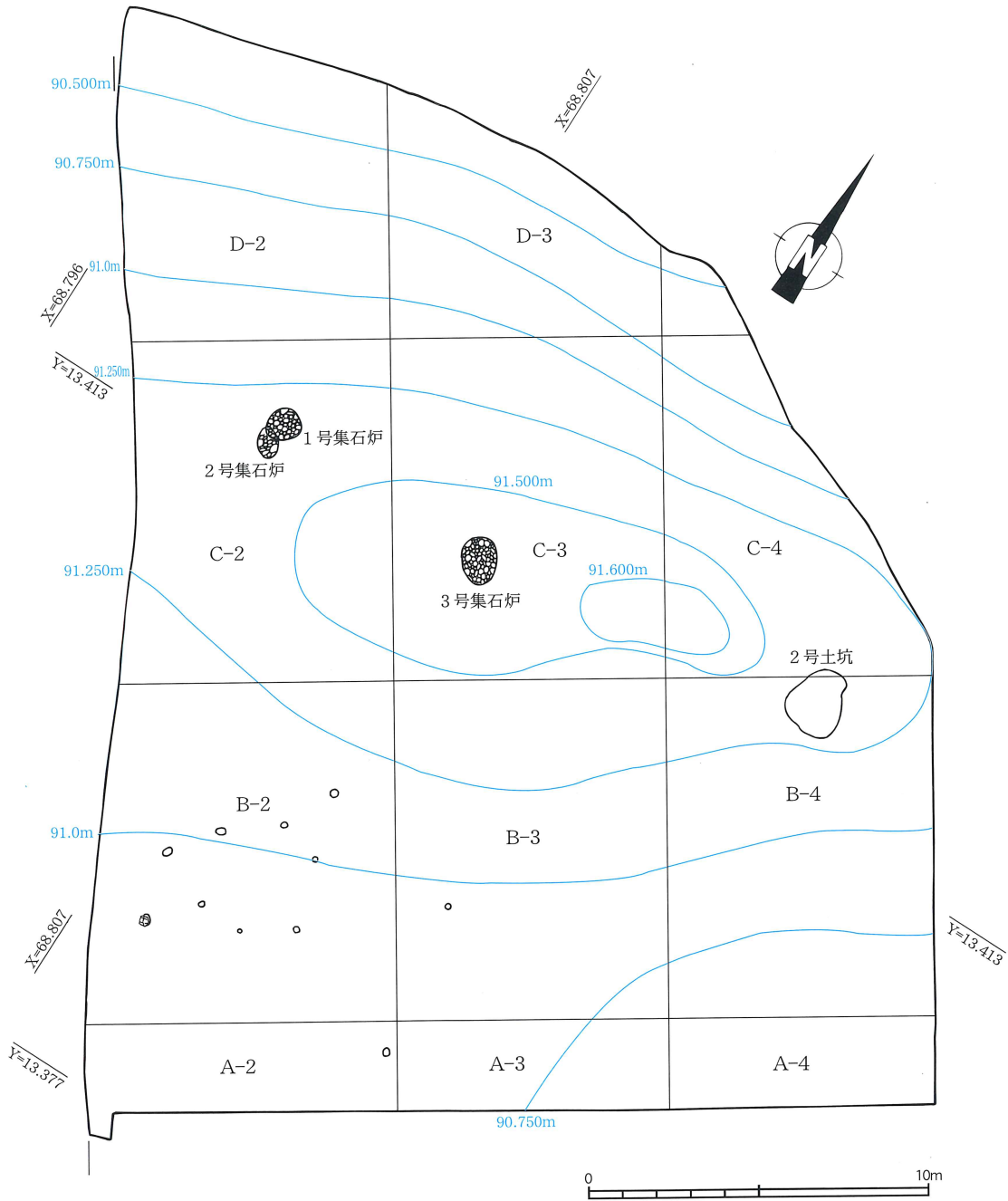
2層から5層は一部攪乱や削平を受け、包含している遺物の混在がみられる。2層から5層で出土した石器群を石材の色調・石質で観察し、個体識別を行い各時代別に帰属させた後、垂直及び水平分布状況を確認した。

第8図は、標高を10cm幅に区切り、それぞれの幅でどれだけの個数が含まれているかを各時代別に棒グラフで示したものである。グラフより旧石器時代ではⅡ区の90.7～91.0m、Ⅲ区の90.4m、縄文時代早期ではⅢ区の91.1～91.2m、Ⅳ区の90.6～90.9mでピークを示している。また遺物はⅢ区を中心に出土し、出土量は遺跡の地形に沿って北西方向Ⅵ区に行くごとに減少する傾向がみられる。

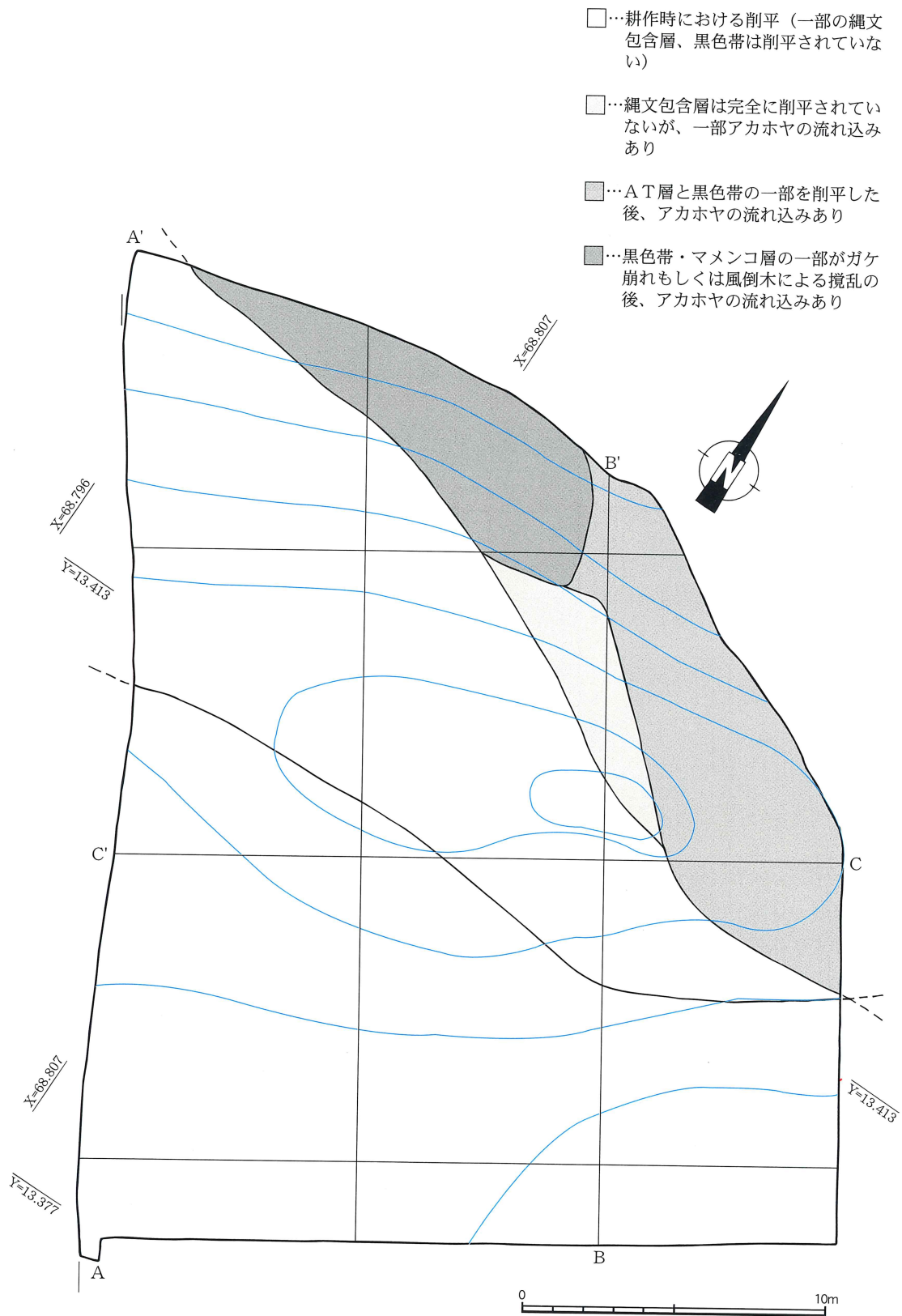
第9図は、土層B-B'から西方向を見通し、遺物及び集石炉を検出した標高を土層A-A'に投影した図である。旧石器時代（右図）の遺物は黒色帯（4層）と、黒色帯下層（5層）を中心に出土し、1号集石炉を中心に分布している。層の厚さは4層と5層を合わせて60～70cmを測る。縄文時代早期（左図）の遺物は粘質の茶褐色土である2層を中心に出土し、2号集石炉、3号集石炉を中心に分布している。層の厚さは50～60cmを測る。

第10・11図は時代・層位に関係なくドットを落とした垂直分布図である。旧石器時代、縄文時代早期とも遺物が遺跡中央のC区に集中しているのがわかる。また、接合率は遺物の出土量の割には全体的に高いとは言えない。

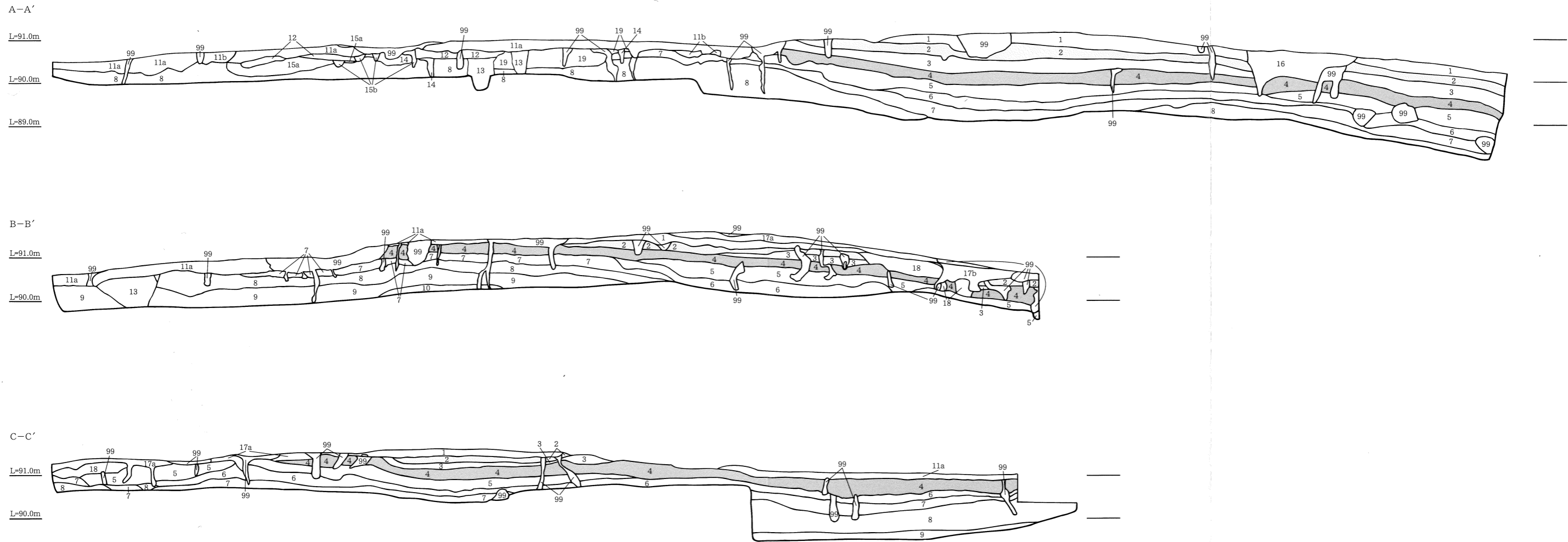
各遺物の時代区分に関しては2層から5層で確実に出土したもののみ、個体識別を行った。攪乱層は別途行った。遺物の実数は接合後の数をそれぞれ示している。剥片剥離技術に関しては、個体識別を行った後、遺物1点づつデータをとった為、実数は少し多くなっている。また、それぞれの時代に帰属させた石器重量別百分率は、第5章のまとめに付している。



第5图 下ノ山遺跡遺構分布图(1/200)



第6図 下ノ山遺跡攪乱層分布図(1/200)



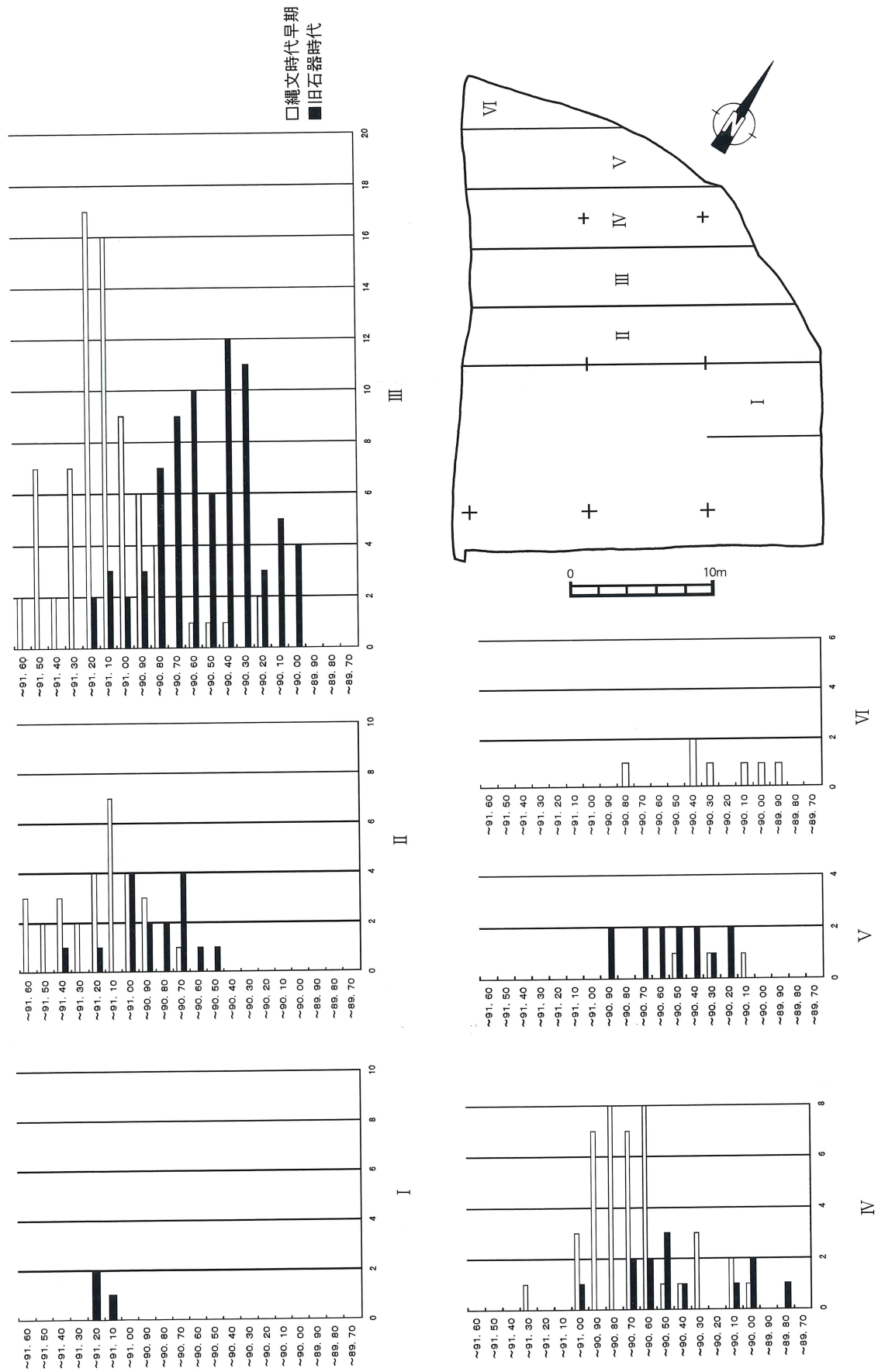
- 1.黄褐色土(アカホヤ)
- 2.縄文包含層(茶褐色粘質土)
- 3.A T層
- 4.黒色帯層(Black band)
- 5.黒色帯下層(茶褐色土、よくしまる、灰褐色土をブロックで含む)
- 6.黄褐色砂岩質土
- 7.九重火山灰層(マメンコ)
- 8.赤茶褐色弱粘質土
- 9.明茶褐色土
- 10.灰赤褐色粘質土(粒子細かい、白色土粒、硫化鉄を含む。)

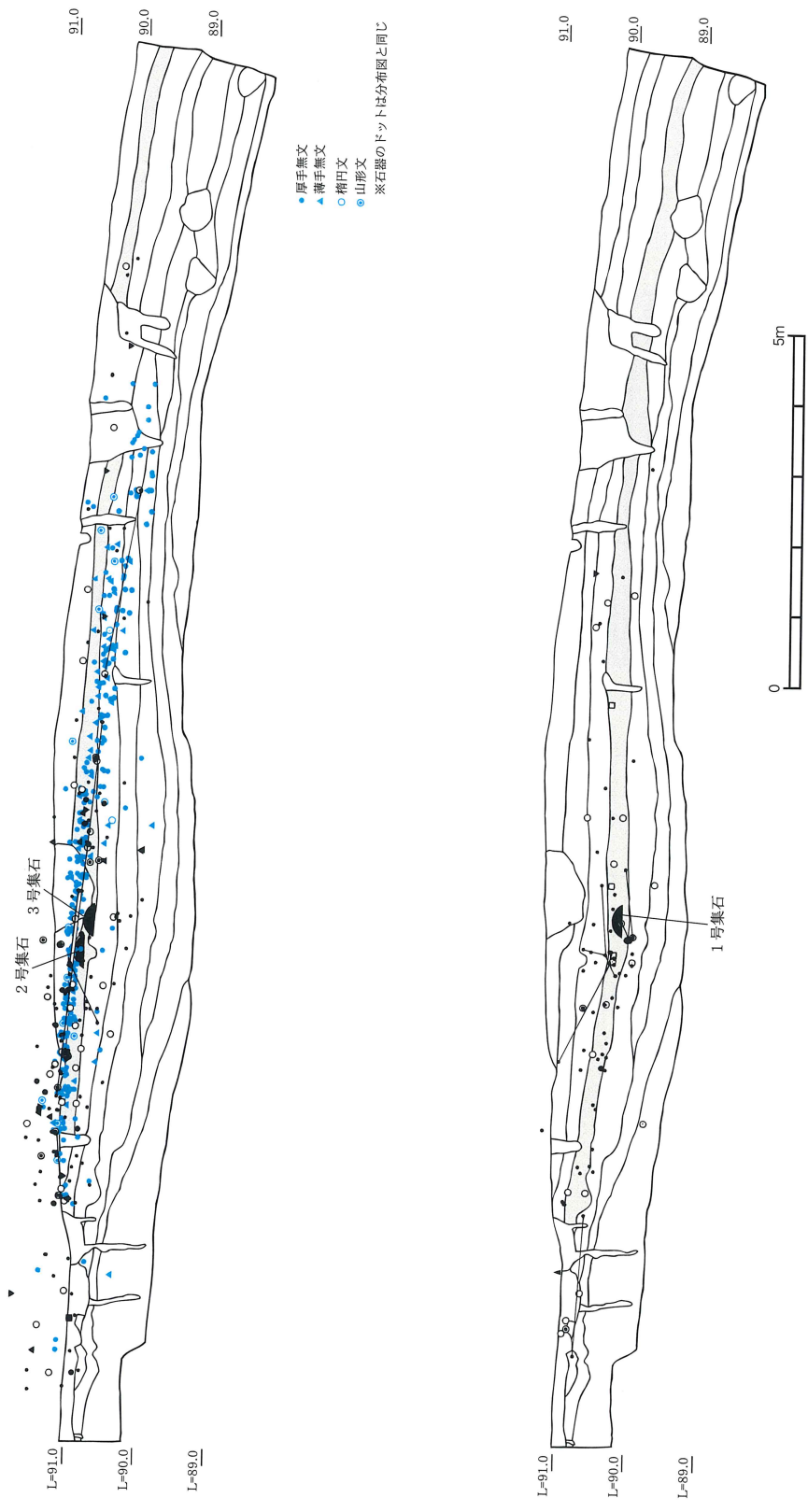
- 11a.淡茶褐色土(炭を含む、耕作土)
- 11b.淡茶褐色弱硬質土(炭を含む、耕作土)
- 12.淡灰褐色弱硬質土(攪乱)
- 13.暗灰茶褐色土(攪乱)
- 14.淡赤茶褐色硬質土(攪乱)
- 15a.灰褐色土(攪乱)
- 15b.灰褐色弱粘質土(攪乱)
- 16.黄褐色土(炭を多く含む、攪乱)
- 17a.淡黄褐色土(よくしまる、流れ込み、攪乱)
- 17b.淡黄褐色土(よくしまる、炭を多く含む、流れ込み、攪乱)
- 18.茶褐色土粒混黄褐色土(アカホヤの流れ込み)

- 19.明黄茶褐色土粒混明茶褐色土(攪乱層、マメンコの攪乱)
- 99.根の攪乱

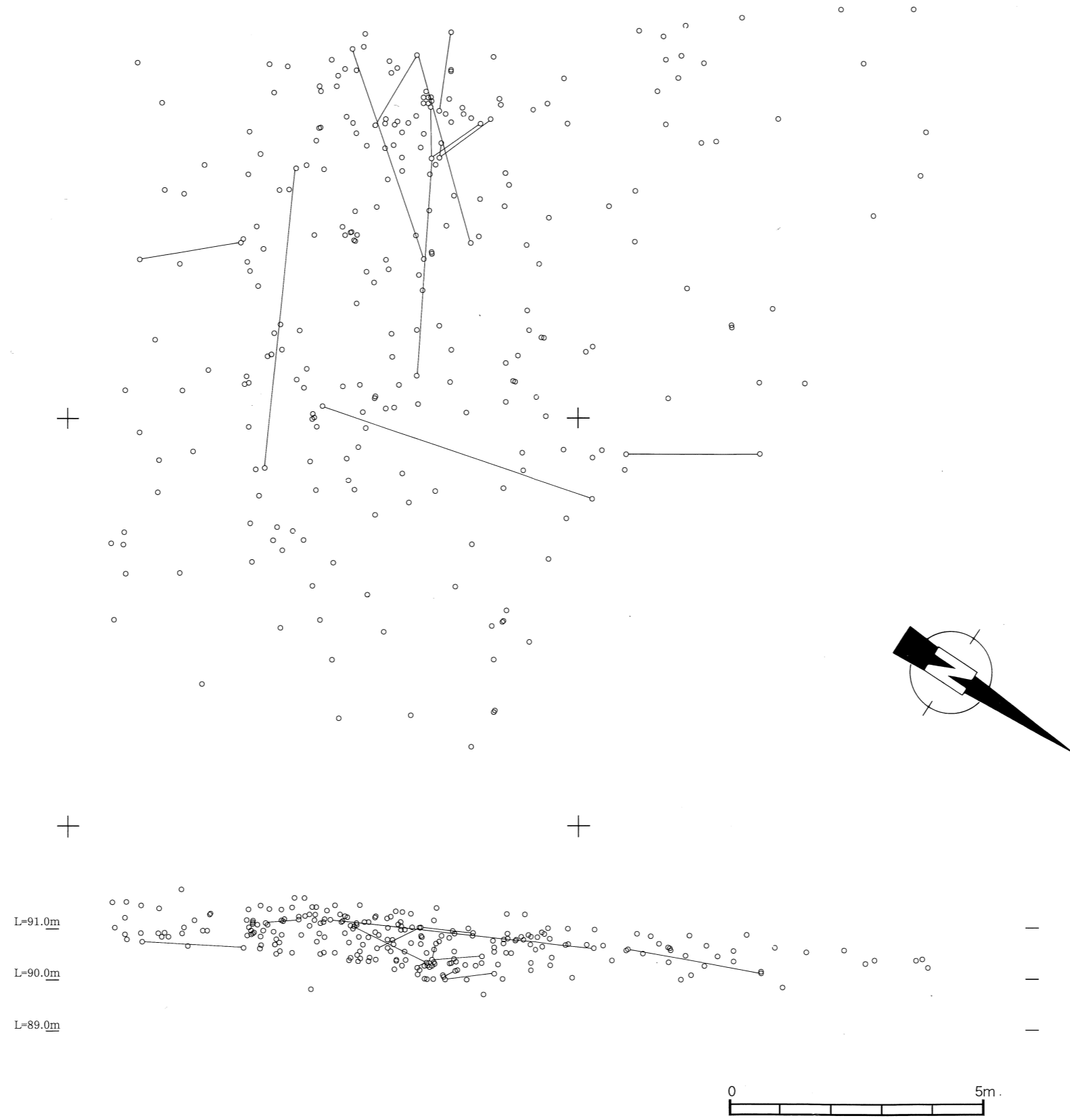


第7図 下ノ山遺跡土層図

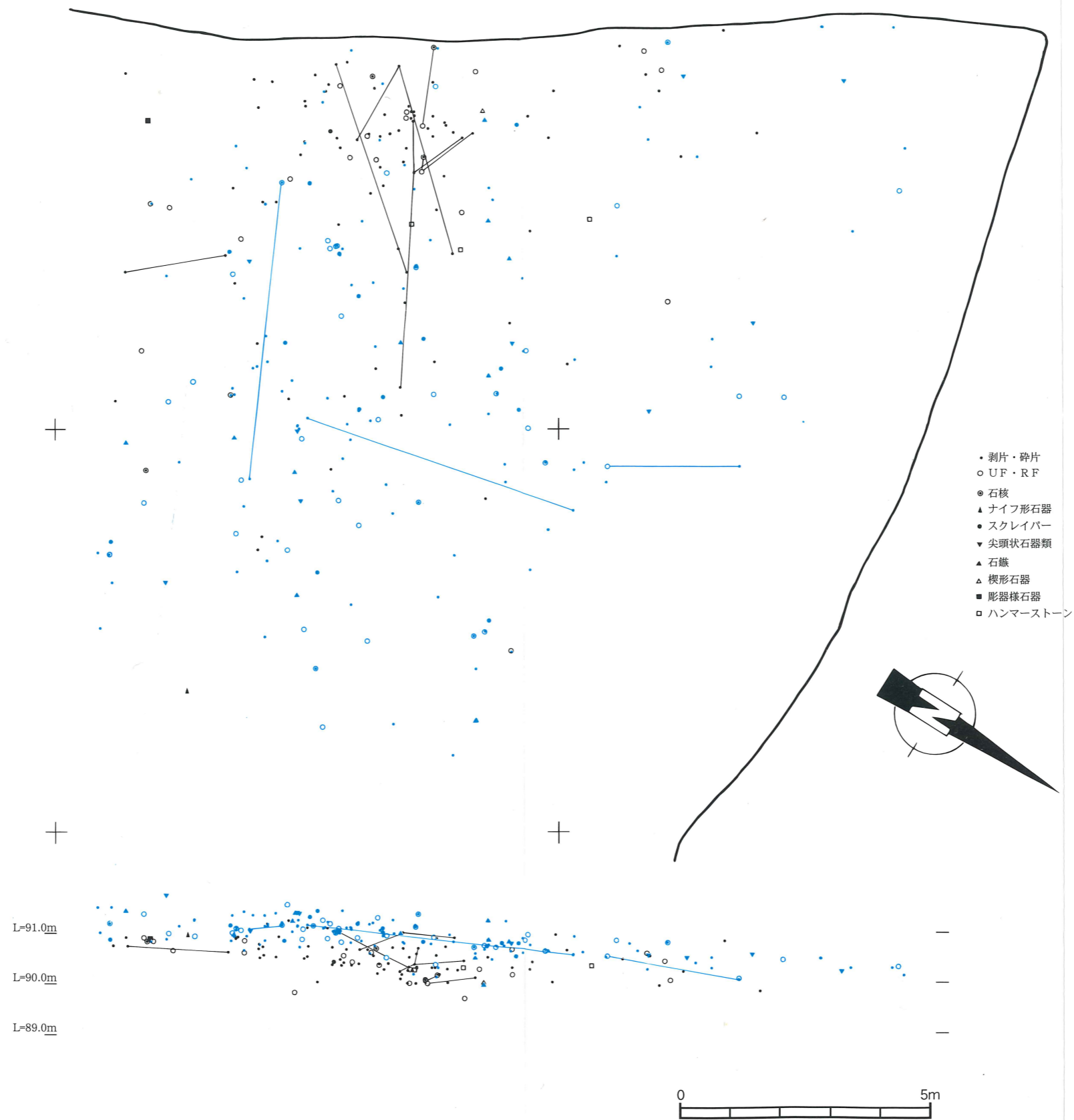




第9図 土層投影図(左は縄文早期、右は旧石器時代)



第10図 下ノ山遺跡石器垂直分布図 1



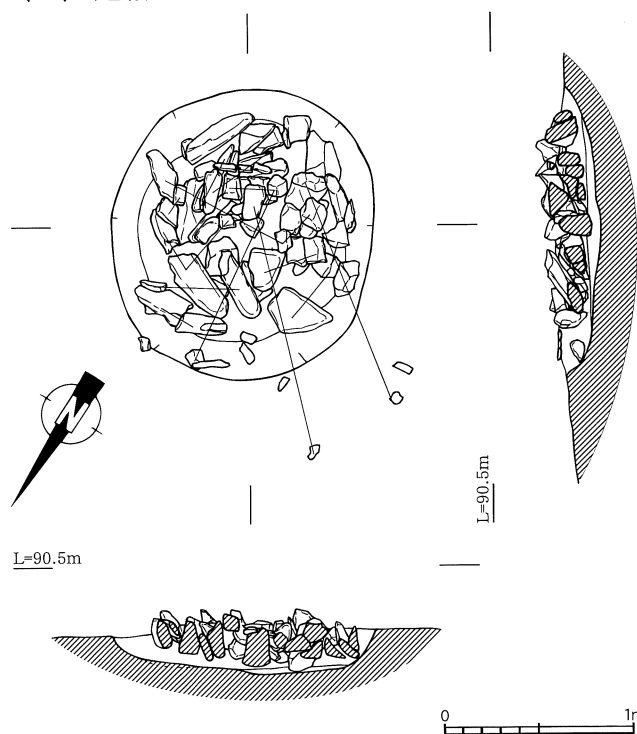
第11図 下ノ山遺跡石器垂直分布図 2 青は縄文時代早期



## 第4章 調査の成果

### 第1節 旧石器時代

#### (1) 遺構の分布



第12図 1号集石炉実測図(1/20)

1号集石炉は、調査区の西側C2区のAT層より10cmほど掘り下げたところから検出された。遺構の大きさは、直径ほぼ1.25mで、深さは20~25cmである。拳大から長径20~30cm大の結晶片岩や千枚岩、砂岩を利用している。原状をよく残している。約50個近くの石は、ほとんど被熱している。炭化物は少しあったが、底面は被熱がなく、焼土等は見られなかった。炉の掘り込みが確認できた(第12図)。

#### (2) 石器組成と石材組成、個体別資料及びその分布

出土した遺物は半数近くは礫である。それを除くと石器関係の資料総数は、109点である(第1表)。その内訳は、ナイフ型石器1点、尖頭状石器1点、サイドスクレイパー1点、スクレイパー1点、彫器様石器1点、楔形石器1点、2次加工ある剥片(RF)10点、

使用痕ある剥片(UF)7点、剥片・チップは81点、敲石(ハンマーストーン)2点、石核3点である。石材ではチャート72点(475.9g)、黒色黒曜石2点(17.9g)、流紋岩31点(758.7g)、ホルンフェルス1点(8.1g)、泥岩1点(66.3g)、結晶片岩2点(389.6g)である。

旧石器時代の石器の個体識別は9種類に分類できる。それぞれについて説明していきたい。

1. チャート：青みがかった黒灰色で、黒もしくは茶色の節理が入っている。礫面は茶色で、その割れ口には灰緑色の縞模様をもつ。
2. チャート：全体的な色調は1と変わらないが、黒色の節理が入っている。石材の透明度が1と比べて高い。
3. 流紋岩：縞模様、斑点ともに見られない。
4. 流紋岩：縞模様ははっきり見られる。白い斑点あり。
5. 流紋岩：縞模様ははっきり見られるが、全体的に黒っぽい。
6. 流紋岩：縞模様は細いがよく見える。白い斑点あり。
7. 流紋岩：6ほどはっきりしていないが、縞模様がうっすらと見られる。
8. 流紋岩：6と縞模様の太さ、濃さともに同じだが、表面の色調は褐色。
9. 流紋岩：縞模様がうっすらと見える。白い斑点がはっきり見える。

ここでの流紋岩は大分県の一般的な見解として祖母・傾山系のホルンフェルス化したものをいう。

基本的に、色調的には8を除き灰色もしくは黒灰色でほぼ同じである。

第13、14図の分布図を見ても分かるように、集石炉の周辺を中心にチャートが分布し、その周辺を囲むように、流紋岩が分布している。チャートの数が多いが、剥片が中心で、接合も折断されたものがほとんどである。

第1表 第4層以下石器器種組成表

	チャート	黒色黒曜石	流紋岩	ホルンフェルス	泥岩	結晶片岩	計
総点数	72	2	31	1	1	2	109
総重量(g)	475.9	17.9	758.7	8.1	66.3	389.6	1716.5
ナイフ	0 (0)	0 (0)	1 (0.1)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (0.1)
尖頭状石器	1 (1.2)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (1.2)
彫器様石器	1 (34.2)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (34.2)
楔形石器	1 (22)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (22)
エンドスクレイパー	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
サイドスクレイパー	0 (0)	0 (0)	1 (83.2)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (83.2)
スクレイパー	1 (4.2)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (4.2)
RF	7 (48.0)	1 (2.1)	1 (10.1)	1 (8.1)	0 (0)	0 (0)	10 (68.3)
UF	2 (21.0)	0 (0)	5 (93.8)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	7 (114.8)
剥片類	59 (345.3)	0 (0)	22 (490.1)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	81 (835.4)
ハンマーストーン	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	2 (389.6)	2 (389.6)
石核	0 (0)	1 (15.8)	1 (81.4)	0 (0)	1 (66.3)	0 (0)	3 (163.5)

### (3) 石器

#### ナイフ形石器 (第15図1)

1は流紋岩製で、ナイフ形石器の先端部分である。左側面に細かいブランディング加工がある。

#### 削器 (サイドスクレイパー) (第15図12)

12は9と11の接合資料である。流紋岩製で、割れたものである。縦長剥片を素材とし、刃部をつくる前に打面調整を上部で行っている。表面左上と左下に、また裏面の右側縁中央部に調整加工を行い、刃部をつくり抉入部を形成している。使用中に折れた可能性がある。酸化鉄が付着している部分がある。

#### スクレイパー (第15図4)

4はチャート製で、縦長剥片を素材として、右上に加工が見られる。自然面がかなり残っている。

#### 彫器様石器 (第15図5)

5はチャート製で、厚手の剥片を素材とし、表の上側縁に2回程、大まかな調整加工を行った後、裏から、彫刀面打撃を行っている。

#### 楔形石器 (第15図6)

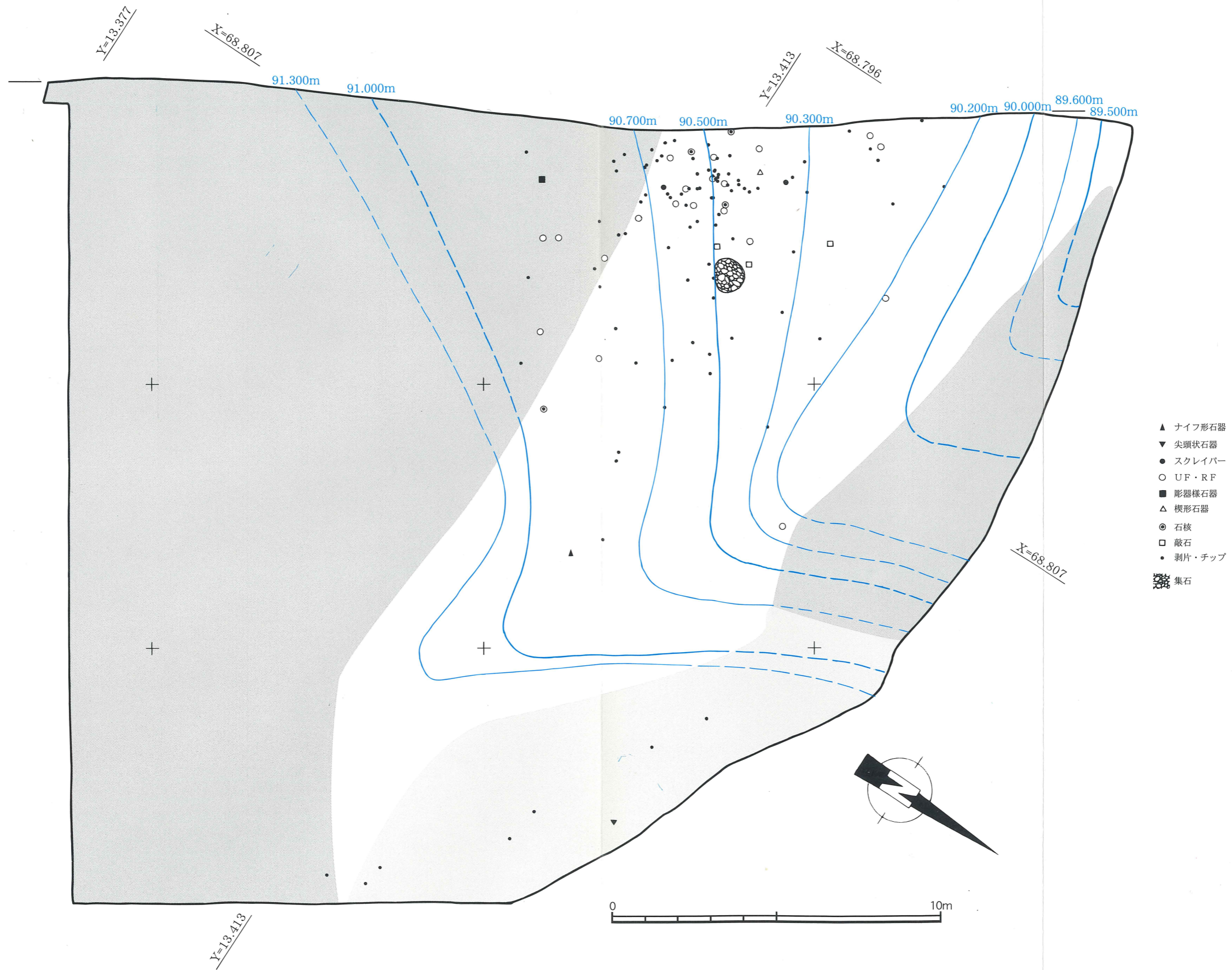
6はチャート製で、被熱を受けている。横長剥片を素材とし、左側面をとったあと、先端を何度も交互にうったと見られる。

#### 二次加工ある剥片 (第15図2、3、7～10)

2はチャート製で、縦長剥片で上側に調整が見られる。3は黒色黒曜石製で、剥片は打面調整を行った後、礫面が一部残っているが、小剥片をとっている。7はチャート製で、縦長剥片を素材とし、先端部に打面調整をおこなったあと、右側に加工が見られる。8は流紋岩製で縦長剥片を素材とし、表面の上部と裏面の上部に加工が見られる。10はチャート製で、上部に細かい加工が見られる。

#### 使用痕ある剥片 (第16図1～6)

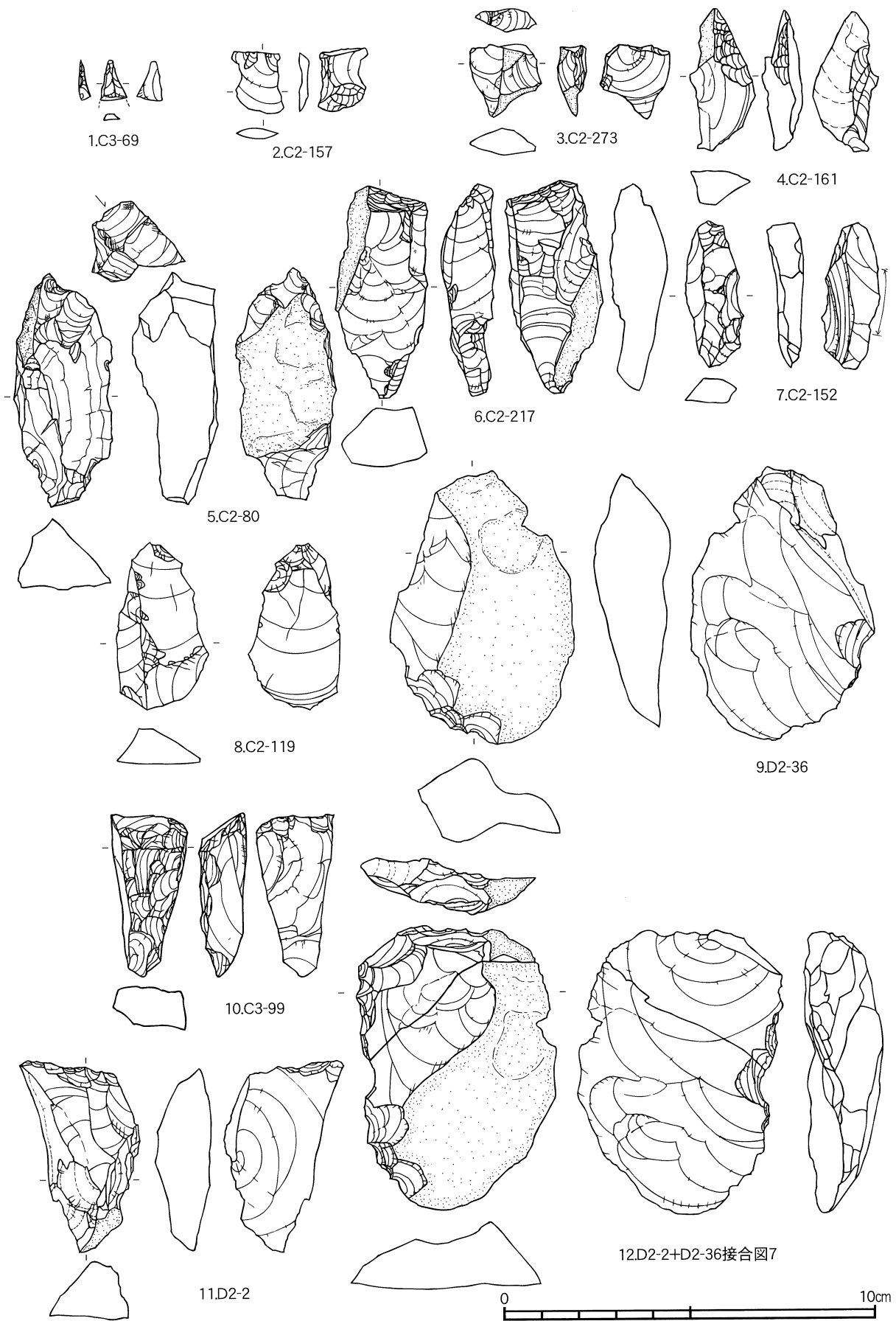
1は流紋岩製で、縦長剥片で左側縁に使用痕が見られる。自然面は表面に多い。2は流紋岩製で、



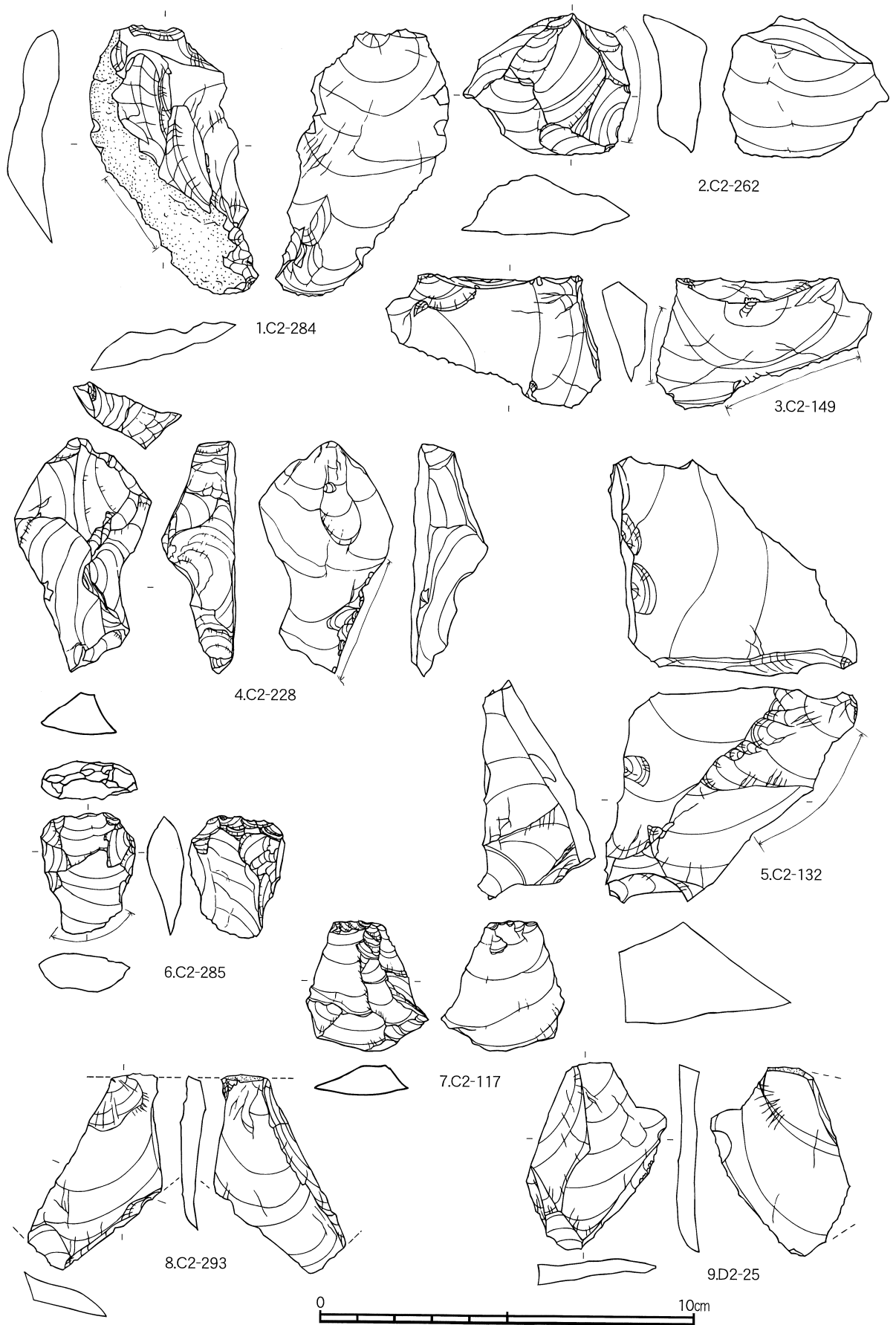
第13図 旧石器時代石器分布図(1/125) 等高線は黒色帯層の上部



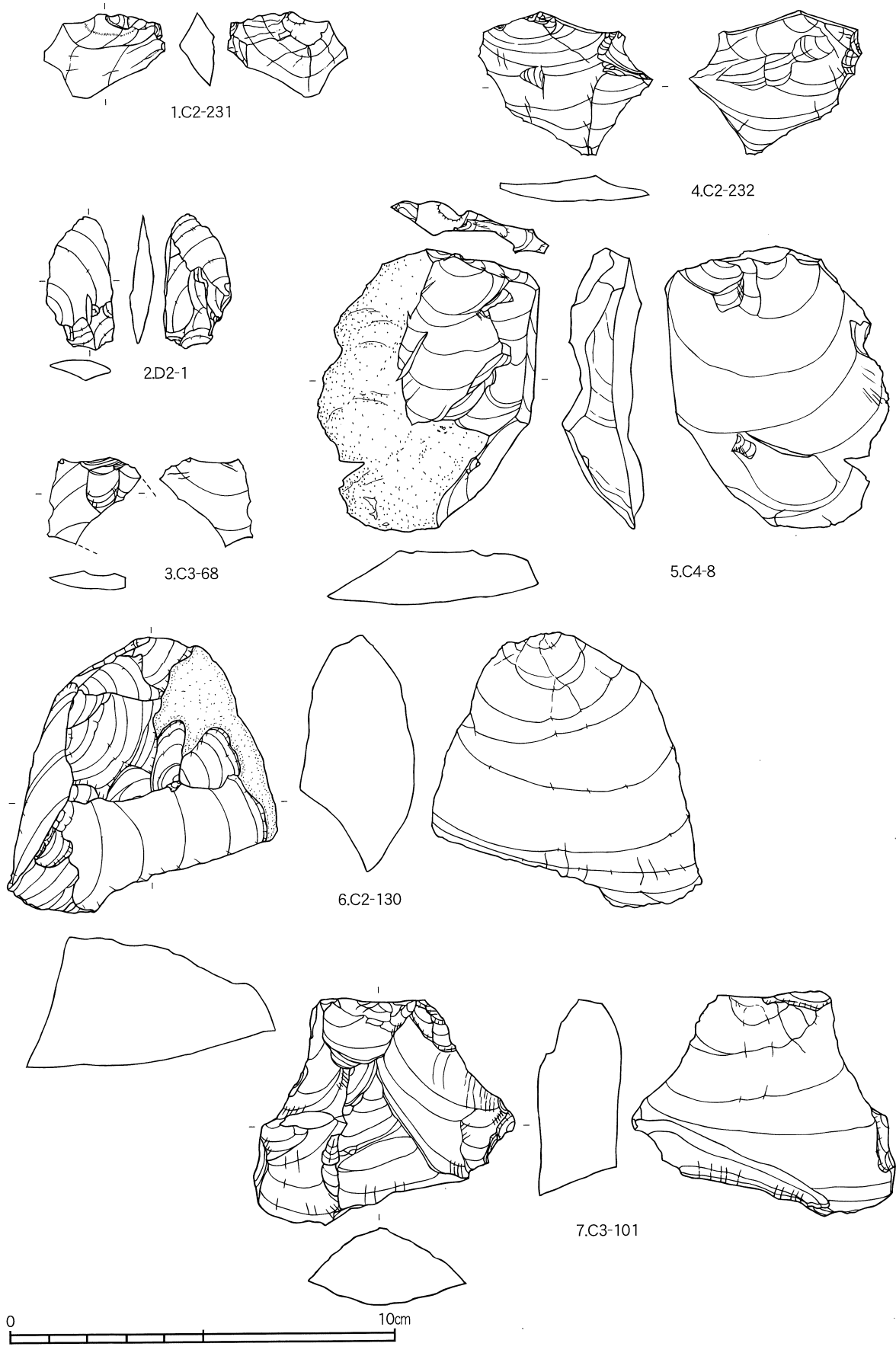
第14図 旧石器時代石器個体別分布図(1/125) 等高線は黒色帯層の上部(個体8は攪乱層の為欠番)



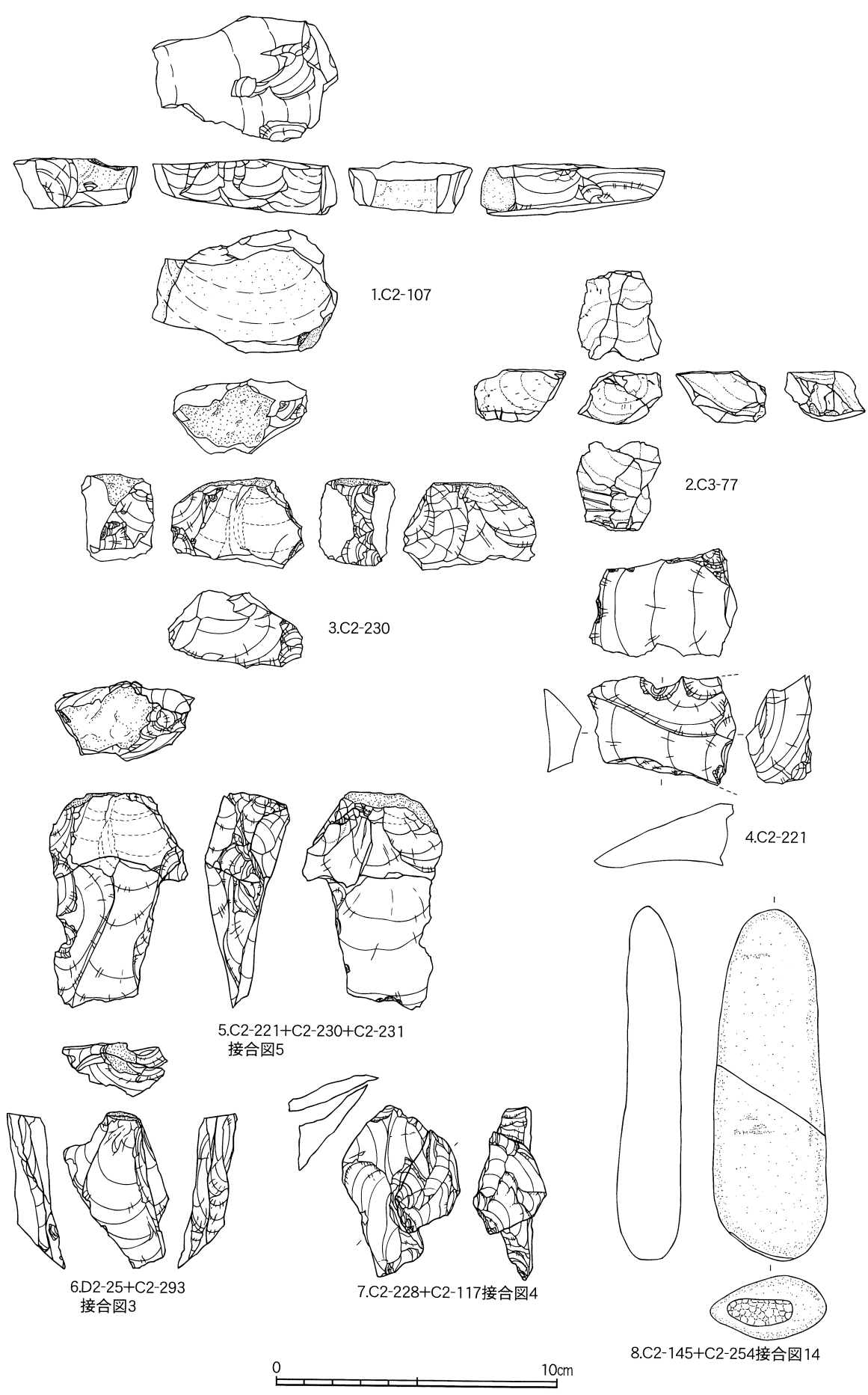
第15图 旧石器时代石器实测图 1 (Fig15参照)



第16図 旧石器時代石器実測図 2 (Fig16参照)



第17图 旧石器时代石器实测图 3 (Fig17参照)



第18图 旧石器时代石器实测图 4 (Fig18参照)



横長剥片で右側縁に使用痕が見られる。3は流紋岩製で、横長剥片で左側縁と下側に使用痕が見られる。4は流紋岩製で、縦長剥片で右側縁に使用痕が見られる。5は流紋岩製で、縦長剥片で右側縁に使用痕が見られる。6はホルンフェルス製で、縦長剥片を素材としているが、上部は楔の様に裏表を交互に調整している。下部のみ使用している。

剥片（第16図7～9、第17図1～7）

7、8、9は、いずれも流紋岩製で、7は幅広、8、9は縦長剥片である。第17図1～7は、いずれも流紋岩製で、5を除き幅広剥片である。5、6、7は打面再生剥片である。

石核（第18図1～4）

1は珪化泥岩製で、被熱を受けている。両サイドで剥片を剥離している。2は黒色黒曜石で、風化面は錆色で厚く、リングは観察しにくい。特に打面調整は行わず、その平坦面より分割、剥片剥離を行っている。全体にサイコロ形になっている。調査時に二分割して破損している。

ハンマーストーン（第18図8）

8は千枚岩製で、下部に敲打痕が見られる。使用している際に割れたのではないと思われる。

接合資料（第18図5、6、7）

5は流紋岩製で、第18図3、4の石核と、第17図1の剥片の接合例。初めに大きな石核から剥片をとった後、打面再生により大きく割った。この大型の剥片素材を用いて、横長から幅広の剥片を剥離する。第17図1をとる際には、打面調整を行った後に剥片をとっている。その際に3と4は割れたのではないと思われる。6は流紋岩製で、第16図8、9の縦長剥片の接合例。縦長剥片を連続的に剥離する。打面、作業面を固定して、打点がほぼまっすぐに後退している。7は流紋岩製で、第17図4の縦長剥片を素材とした使用痕剥片と、同図7の縦長剥片の接合例。元は礫素材で、礫の一端に打面を設け、幅広の剥片を剥離する。同図4は打面を再生しており、同じところではほぼ後退する。

#### （4）剥片剥離技術

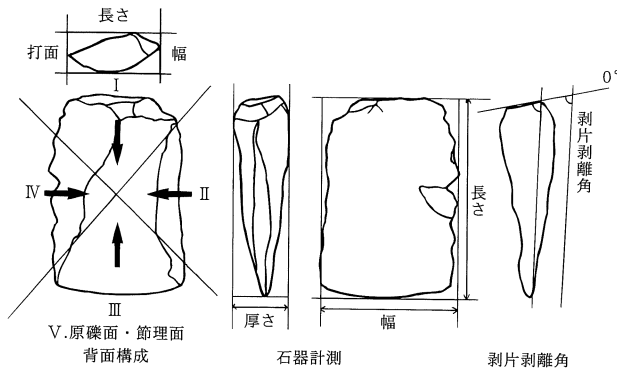
当遺跡の黒色帯上部を中心として出土した旧石器時代文化層遺物で、まず主要石材の中から、祖母・傾山系流紋岩類（ここで分類した流紋岩39点と1点のホルンフェルスを併せて呼称しておく）と黒色黒曜石製の剥片石器について、それぞれ若干の分析を試みる。なお、剥片類に関して、背面剥離構成と自然面が見られるときはその自然面占有率、打面を観察し、打面・打点が存在し可能なものについては剥片剥離角を計測した。長さ・幅・厚みの計測法は右記の図上の位置を計測した。個々の計測値に関しては第9表を参照されたい。チャート製の剥片石器については全体に節理の入った石材を生かして分割が多く認められ、剥片剥離技術の概要が判る接合資料が存在しない。またほとんど計測不可能なものがほとんどであったため、個別の代表的なものを実測し計測は省略した。石器の組成については既に触れたのでここでは省略する。

##### α. 流紋岩類

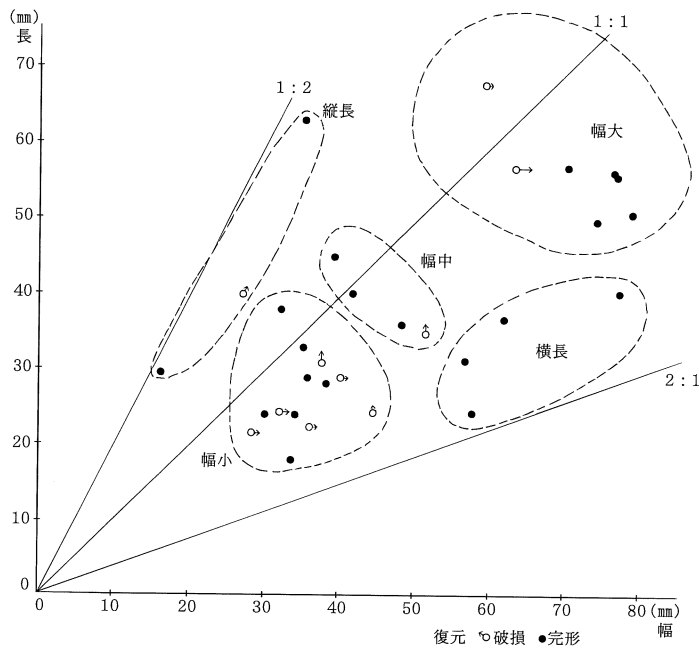
###### 【剥片分類】

剥片類をその法量（長幅）から分類する。長幅分布図を参照（第20図）。長幅比1:2に近い剥片を横長、1:1周辺のを幅広、2:1に近いものを縦長剥片とする。幅広剥片はさらに小・中・大に分けた。ただし、縦長剥片でも長幅比を2:1を越えるものは少なく、石刃と呼べるものは無い。

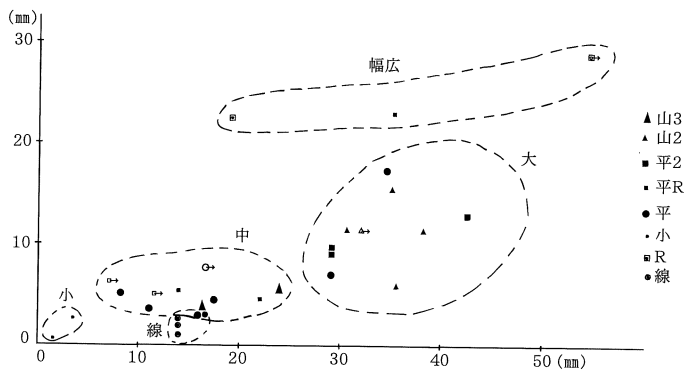
縦長・横長剥片は幅広剥片に、ほぼ対応する細分の可能性はあるが、数量が少ないためここでは行わなかった。



第19図 石器計測の一例図



第20図 旧石器時代流紋岩剥片類長幅比分布図



第21図 旧石器時代流紋岩打面長幅比分布図(白抜きは欠損、矢印は復元)

【剥片剥離角】

- a 80°未満
- b 90°前後
- c 100-120°
- d 120°以上

【打面の形態】

- 破損などにより打面が無いもの。
- 小 小打面 (点状打面を含む)。
- 平 平坦な打面で単剥離面のもの。
- 平2 平坦な打面で2枚剥離面のもの。
- 山2 山形の打面で2枚剥離面のもの。  
ほとんどは山形頂部を加撃する。
- 山3 山形の打面で3枚剥離面のもの。  
ほとんどは山形頂部を加撃する。
- 平R 平坦な打面で礫面を含むもの。
- R 丸みを持った礫面のもの

【打面の大きさ (第21図打面の長幅比より)】

- 小 小打面 (点状打面を含む)。
- 線 線状打面
- 中 中打面
- 大 大打面
- 幅 幅が広く大きな打面

小打面、線状打面、平坦打面、平坦な剥離痕のある平坦打面、2枚からなる山形打面、3枚からなる山形打面、礫面を含む平坦打面 (中型、幅広型)、丸みを持った礫面打面に分類できる。打面の形態と打面の大きさの相関関係から、平は中打面、山2は大打面にそれぞれ相関性がみられる (第2表)。

【調整】

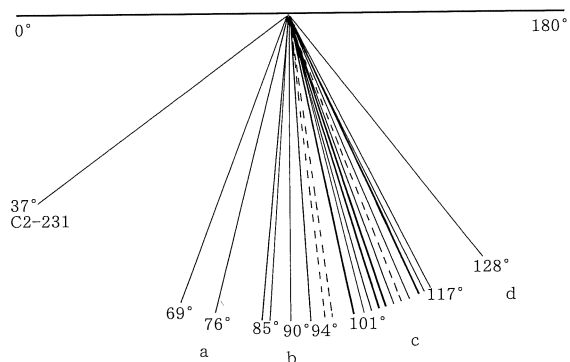
打面調整と打面縁調整 (頭部調整) はそれぞれあるものを○とし、そのうち程度が激しいものを◎とした。打面調整は山形の打面を持つものがほとんどみられるが全体として顕著ではない。その中には平坦な礫面に薄い調整を行い、平坦ではあるがその調整剥離面と礫面とで構成される打面を持つ遺物が存在する。また打面縁調整は半数近くみられる。特に線状打面に関してはそれぞれ丁寧に行われたため、打面幅が規制されているものが多い。平坦打面との相関性が高い (第3表)。

第2表 打面の大きさと打面形態の相関関係表

	小	線	平	平2	山2	山3	平R	R
小	2	0	0	0	0	0	0	0
平	0	5	0	0	0	0	0	0
中	0	0	7	1	0	1	2	0
大	0	0	2	2	6	1	0	0
幅	0	0	0	0	0	0	2	2

第3表 打面形態と打面調整の相関関係表

	線	平	山2	山3	平R	R
打面調整	0	0	2	2	2	1
打面縁調整	5	7	0	1	3	0



第22図 旧石器時代剥片類剥片剥離角

第7表 打面形態と剥片形態の相関関係表

	縦長	幅小	幅中	幅大	横長
小	0	2	0	0	0
線	1	3	1	0	0
平	1	3	3	1	2
平2	1	0	0	0	1
山2	1	0	2	2	0
山3	0	1	0	0	1
平R	1	3	0	0	0
R	0	0	0	2	0

に分類した(第22図)。ただし、C2-231の37°は、目的剥片が剥離されたとは思えないイレギュラーな剥離のために分類からは除外した。小打点や線状打面のものは計測不可能なものが多い。それを除くと、最も多いのはcで、ついでbである。礫面を含む平坦打面では、中型がcで、幅広型がbで使い分けされている可能性がある。また丸みを持った礫面打面は1点のみだがaであり、幅広の大きな打面のものは剥離角が小さな傾向がある(第4・5表)。

【背面構成】

背面に見られる剥離方向は、大きく1、2、3、4の4方向の組み合わせで見ると、

- ア 主要剥離と同方向(1)のみ
- イ 主要剥離と同方向(1)と逆方向(3)からなるもの

第4表 剥離角と打面形態の相関関係表

	小	線	平	平2	山2	山3	平R	R
a	0	0	1	0	0	0	0	1
b	0	0	0	0	2	0	2	0
C	0	1	7	2	1	2	3	0
d	0	0	0	0	1	0	0	0

第5表 剥離角と剥片形態の相関関係表

	縦長	幅小	幅中	幅大	横長
a	0	1	1	1	0
b	1	3	3	0	0
C	3	5	5	2	4
d	0	0	0	1	0

第6表 背面構成と打面形態の相関関係表

	小	線	平	平2	山2	山3	平R	R
ア	0	3	3	1	0	0	3	0
アR	1	1	2	1	1	0	0	0
イ	0	0	0	1	1	0	0	0
イR	0	0	0	1	1	0	1	0
ウ	1	1	3	0	0	2	1	0
エ	0	0	0	0	0	0	0	1
オR	0	0	1	0	2	0	0	1

第8表 背面構成と剥片形態の相関関係表

	縦長	幅小	幅中	幅大	横長
ア	2	5	1	0	2
アR	2	2	2	0	0
イ	0	0	1	0	0
イR	0	1	0	1	0
ウ	0	3	2	1	1
ウR	0	2	0	0	0
エ	1	0	0	1	0
エR	0	0	0	0	0
オ	0	0	0	0	0
オR	1	1	0	2	0

- ウ 主要剥離と同方向（1）と直行方向（2、4）からなるもの
- エ 主要剥離と同方向（1）、逆方向（3）と直行方向（2、4）からなるもの
- オ 主要剥離と直行方向（2、4）のみ

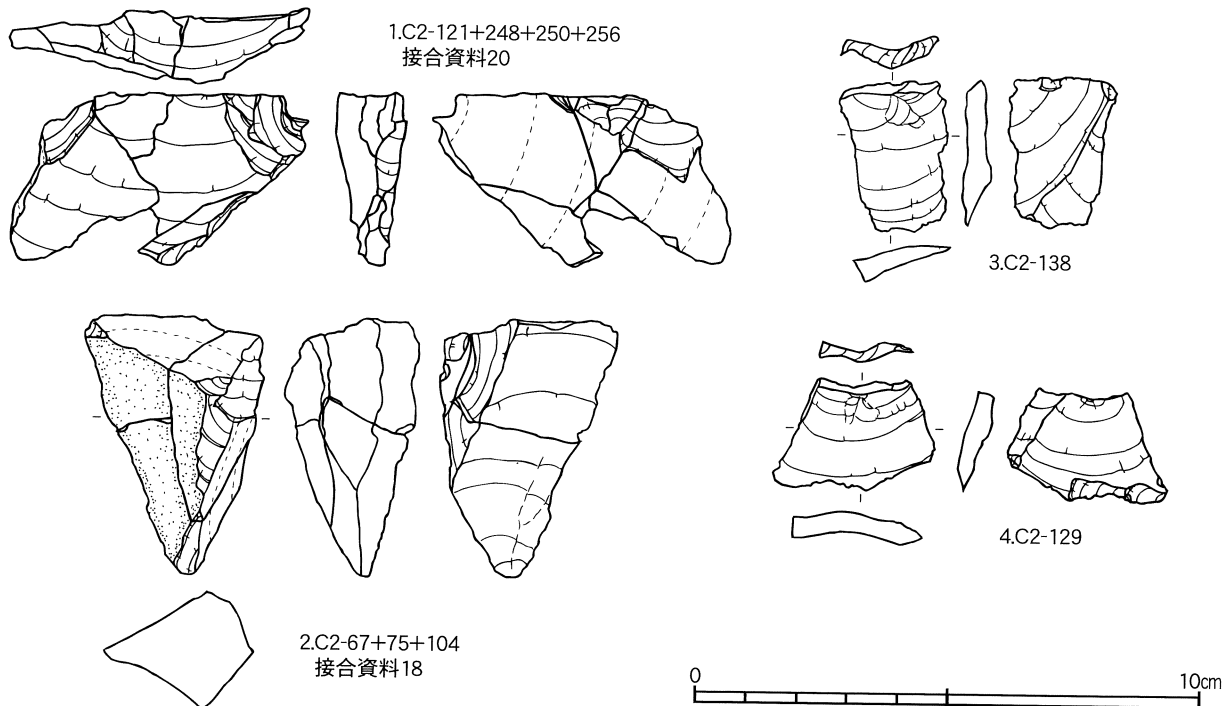
がみられ、それに礫面（自然面）を含むものはRを付した。

本遺跡で最も多いのは主要剥離と同方向のみのアで、アRを含めると約半数を占める。次いで主要剥離と同方向と直行方向からなるウである。なお主要剥離と直行方向のみのオはすべて礫面を含むオRである。これらから以下のように大きく分類できる。

- ①打面を固定し剥片剥離作業を行うもの。
- ②作業面を固定し、打面を180°転移させて剥片剥離作業を行うもの。
- ③打面転移を行い剥片剥離作業を行うもの。

打面との強い相関は認められないが（第6表）、線状打面はアの傾向がある。礫面を持つ遺物は、背面及び打面に礫面を含むものが約半数でかなり高い割合を占める。しかし原材料としての自然礫そのものや、背面及び打面がすべて礫面で、礫面の除去や礫の分割を目的とした初期段階の剥片はここでは認められない（勿論、石器組成がすべて復元されているわけではないが）。ある程度礫面を除去した分割礫や、礫面は残すが初期段階の調整を行った石核の形態で持ち込まれた可能性がある。

剥片形態と打面形態との相関関係はあまり顕著ではないが（第7表）、礫打面のものはすべて幅広大型のものである。また、大型の幅広剥片は剥片剥離角の変異が大きい。剥片形態と背面構成との相関関係はあまり顕著ではないが（第8表）、縦長剥片とア：主要剥離と同方向（1）のみ（礫面付きを含む）がやや強い。縦長剥片剥離技術は顕著ではなく、しかも縦長剥片のみを目的とし連続的に剥離したものは見られない。狭義の石器には、ナイフ形石器とスクレイパーがある。ナイフ形石器は小さな先端のみの破損品のため十分な観察が行えないが、背面に見られる剥離痕は同方向のみである。同時期と思われる他遺跡出土のものから想定すると、縦長剥片を素材とした柳葉形二側縁加工のものである可能性が高い。



第23図 旧石器時代剥片石器実測図 (Fig23参照)

## β. 黒曜石

C3-77は阿蘇外輪山産(サビ)黒色黒曜石の石核で90°の打面転移を繰り返し、残核形状がサイコロに近い直方体になっている。先立つ平坦な剥離面から幅広の小型の剥片を剥離する。石核に残されている剥離痕から打角は55°と60°である。B2-30は西北九州淀姫産もしくは阿蘇系産黒曜石の石核で、剥片が分割礫を素材とし、小打面から打角85°と91°で剥離した後、打面・作業面転移を行い、平坦面から68°で小型の幅広剥片を剥離している。残核はやや偏平で平面長方形の形状をしている。C2-273は、西北九州腰岳産とみられる黒曜石の角礫である。

## γ. チャート(第23図1~4)

1は平坦な剥離面打面からの幅広で厚手の節理面除去剥片である。剥離時に衝撃よりはじめて、分割されたと思われる。この他に厚手の剥片と思われるものは第15図の5、6、C2-94である。2は角礫の節理面を打面とし、分厚い幅広の剥片を剥離した後、3個体に剥離・分割したと思われる。3は平坦な剥離面打面から幅広剥片を剥離している。剥離方向はアである。この他に見られるものはC2-105である。4は平坦な剥離面打面から幅広剥片を剥離している。剥離方向はウである。この他に見られるものはC2-103である。

この他にも角礫の平坦な礫面を打面とし、サイコロ状に分割した接合資料4がある。これらの個別の類型によって推定すると、

①残核と石核素材からは、角礫を素材とするものがほとんどで、その平坦な礫面や節理面からの分割や剥離を行い、直方体(サイコロ)状を呈するものが多い。

②①から生産される剥片は、背面に大きく礫面や節理面を残し、礫面除去を意図したものが一定量認められ、幅広がほとんどである。

③分厚い剥片又は分割礫素材の石核が存在する。

④分厚い剥片には平坦な礫面や節理面を打面から剥離され、背面剥離方向にはウが認められることから、①石核から90°に近い打面転移を行うことがうかがわれる。

⑤薄手の目的剥片と推定されるものは、幅の狭いやや小さめの平坦な打面から剥離された縦長剥片があり、背面剥離方向にはアやウが認められることから、④に近い剥離技術のほかに縦長剥離技術も存在する(C2-80、C2-94)。

以上のことから大型の剥片は分厚い幅広剥片・分割素材が多く、最も多いのは1:1前後の厚めの剥片であり、薄手の縦長剥片を連続的に生産したと思われるものはほとんど無い。

第9表 旧石器時代打面計測一覽表

地区	番号	打面形	打大	打長	打幅	剥角	角2	打調	打縁	背構成	背面	樂面	分類	器種	長	幅	厚	重	土層	完欠	欠損	復元	被熱	個	別	接合	備考
A-4	3	線	線	1.4	0.2	-	-		◎	1,4,1	了		縦	Fl	5.75	2.45	1.31	9.7	12層	×	右側縁一部		×	8		A4表土一括3	
B-2	98	山2	大	(3.2)	1.16	128	d			R,3,3	了R	2/3	幅広大	Rcf	(6.3)	5.7	3.18	97.5	12層	×	末端		×	3			
B-4	19	山3	中	2.4	0.55	106	c	○	○	4,1,1	了		幅広小	Fl	3.8	2.85	0.54	4.9	4層	○			×	4			
C-2	53	小	小	0.15	0.05				◎	R,1	了R	1/2	幅広小	Fl	3.75	(3.1)	0.9	5.9	4層	×	左側縁一部		×	7			
C-2	117	線	線	1.4	0.25	105	c		◎	1,1,1,了R	了R	1/20	幅広小	Fl	3.5	3.3	0.82	8.2	4層	×			×	4			
C-2	119	小	小	0.35	0.25	(90)	b			1,1,2	了		幅広小	RF	4.45	(2.55)	0.96	10.1	4層	×	右側縁		×	5			
C-2	123	平	中	0.82	0.49	76	a		◎	1,2	了		幅広小	Fl	(2.1)	(1.75)	0.51	1.3	4層	×	左右側縁	不	×	7			
C-2	124	平	中	(1.65)	0.74	107	c			1	了		横長	Fl	2.15	(2.75)	0.74	4.7	4層	×		不	×	7			
C-2	125	平	大	2.9	0.7	113	c	○		1,1	了		横長	Fl	(2.8)	(5.5)	0.98	11.3	4層	×	中折	不	×	7			
C-2	130	R	幅	1.9	2.23	69	a			4,4,R	才R	1/5	幅広大	CrF	7.2	7.1	3.45	141.3	4層	○			×	7			
C-2	132	R?	幅	(5.5)	2.9			○		1,4,3,2	工		幅広大	Fl	7	5.7	2.85	73.2	4層	×	打面一部		×	4			
C-2	149	平2	大	4.23	1.3	108	c			1,1	了		横長	UF	3.55	5.85	1.13	15.7	4層	○			×	7			
C-2	221																										
C-2	228	山2	大	3.05	1.16	85	b			R,2,2,4	才R	1/5	縦長	UF	5.2	3.8	2.4	33.6	4層	×			×	9			
C-2	230																										
C-2	231																										
C-2	232	山2	大	3.55	0.6	86	b	○		1,1,3	了		幅広小	Fl	3	2.4	0.9	4.3	4層	×			×	9			
C-2	262	平	大	3.44	1.75	115	c			1,1,1,2	了		幅広中	Fl	4.15	4	0.71	10	4層	○			○	7			
C-2	284	平	中	1.75	0.45	117	c		◎	R,1	了R	2/3	縦長	UF	7.7	4.05	0.77	22.8	4層	×			×	6			
C-2	285	-								1	了		幅広小	RF	(3.25)	(2.55)	1.01	8	4層	×	右側縁一部		×	7			
C-2	289	平R	中	2.2	0.48	94	b	○	○	1,R,1,3	了R	1/8	幅広小	Fl	3.45	2.4	0.78	1.3	4層	○		不	×	Hf		ホルンフェルス	
C-2	293	平R	中	1.4	0.57	107	c		○	1,1,1	了		縦長	Fl	5.65	(3.15)	0.54	9.2	4層	×	左側縁		×	6			
C-3	68	-								1,1,1	了		幅広	Fl	(2.3)	(2.6)	0.5	2.4	4層	×	頭部末端	不	×	7			
C-3	69									1,1	了			Kn	(1.1)	0.8	0.2	0.1	4層	×			×	7			
C-3	72	-								2,1,3	工		縦長	Fl	(4.5)	3.6	0.98	13.6	4層	×	頭部	不	×	5			
C-3	74	線	線	1.66	0.3				○	1,2	了		幅広中	Fl	(2.7)	(4)	0.5	4.5	4層	×	左側縁一部,末端		×	7			
C-3	101	平	中	2.9	0.95	115	c		○	4,1,1,2	了		幅広大	Fl	(5.9)	6.8	1.99	74.9	4層	×	末端		×	6			
C-4	1	平	中	1.1	0.35	105	c		○	R,1,R,1	了R	1/5	幅広中	Fl	(4)	2.9	0.85	7.1	4層	×	末端		×	3			
C-4	8	平2	大	2.9	0.98	112	c			R,1,1	了R	1/2	縦長	Fl	7.6	5.65	1.84	74.8	4層	○			×	6			
C-4	11	-								R,1,2	了R	2/5	幅広小	Fl	(3.6)	2.25	1.12	7.2	4層	×	末端		×	7			
D-2	1	線	線	1.4	0.1				◎	1,1	了		幅広小	Fl	3.35	1.8	0.54	2.6	4層	×	端部一部		×	7			
D-2	2													RF	5	2.6	1.5	20.4	4層	×			×	7			
D-2	25	平R	中	(7)	0.62	104	c			1,1	了		幅広中	Fl	5.15	(3.5)	0.64	11	4層	×			×	7			
D-2	28	山2	大	3.5	1.56	116	c			1,R	了R	1/2	幅広中	Fl	4.85	3.65	1.3	12.9	4層	○	左側縁		×	6			
D-2	34	線?	線						○	1	了		幅広小?	Fl	(2.6)	(1.5)	0.72	2.2	4層	×	左側縁,末端	不	×	6			
D-2	36													RF	7.4	5	2.1	62.8	4層	×			×	7			
D-2	57	平R	中	1.14	0.5	101	c	○	○	1,1	了		幅広小	UF	3.55	2.9	0.61	4.6	4層	×	末端一部		×	5			
D-2	63	平	中	1.6	0.3	102	c		○	1,1,1	了		幅広小	Fl	(3.4)	2.45	0.51	3.8	5層	×	末端		×	7			
D-2	72	山3	中	1.64	0.38	110	c	○		4,1,2	了		横長	Fl	1.6	2.95	0.53	1.8	4層	○			×	5			
表土	11	平	中	1.65	0.75	102	c		○	4,2,R	才R	1/10	幅広小	Fl	(2.8)	2.15	7.3	2.8		×	末端		×	8			
接合	5	平R	幅	3.5	2.3	89	b			4,R,1	了R	1/3	幅広小	Cr	7.8	5.1	2.52	81.5					×				
接合	7	山2	大	3.8	1.16	108	c	○		4,R	才R	2/3	幅広大	SS	7.65	5.6	2.01	83.5									

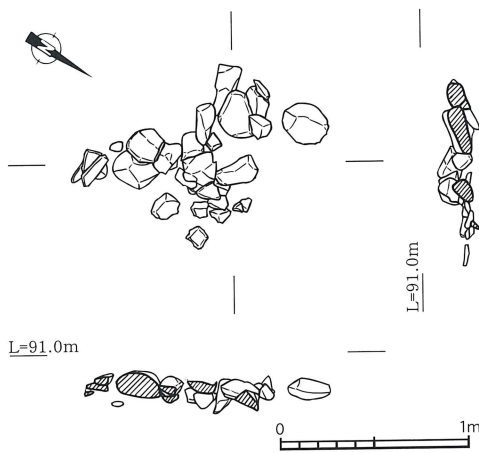
B-2	30	平坦								1,R,2			幅広小	Cr	2.3	2.1	3	5.1	12層	○			×	淀姫?阿蘇系?		剥片素材
C-2	273	平坦		1.75	0.7	84	b				1/4		幅広小	RF	1.55	2	0.74	2.1	7層	○			×	腰岳?角礫		台形に似る
C-3	77	平坦											幅広小	Cr	1.9	3	3	15.8	4層	○			×			角礫素材?

## 第2節 縄文時代

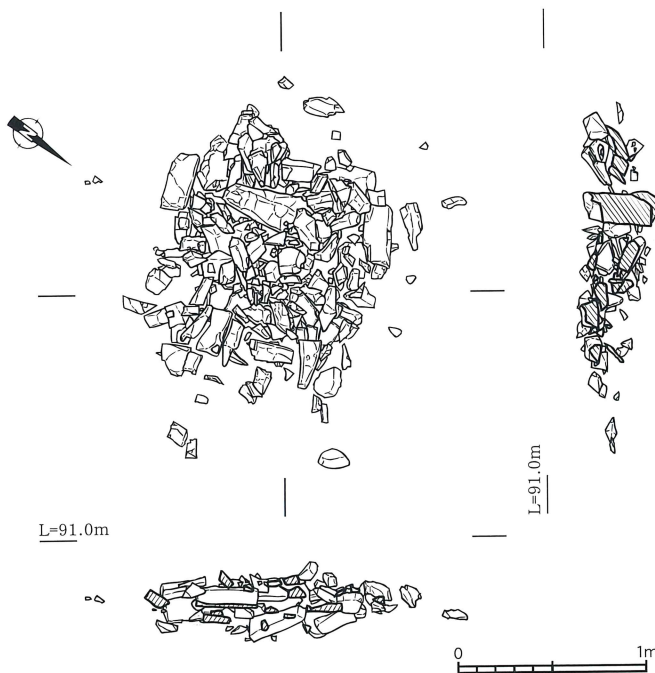
### (1) 遺構の分布

遺構は集石炉が2基検出された。検出面は2層である。土器等は確認できなかったため、細かな時期決定については周辺の遺物分布の状態と合わせて検討する必要がある。2号集石炉(第24図)は、1号集石炉とほぼ重なるようにC2区に位置している。遺構の大きさは1.4×0.8mである。石材は砂岩で、主に拳大のものから、それより一回り大きいものを利用している。27個の石はほとんど被熱しており、僅かではあるが、炭化物がみられた。炉の掘りこみ・焼土は確認できなかった。

3号集石炉(第25図)はC3区のほぼ中央の西側よりに位置する。遺構の大きさは直径2mの範囲にほぼ収まる。石材は珪質岩で、小指大のものから、人頭大のものを利用している。総数にして、100個近くある石は、ほとんど被熱しており、炭化物が石の間や石に付着していた。炉の掘り込み・焼土は調査の時点では確認できなかった。



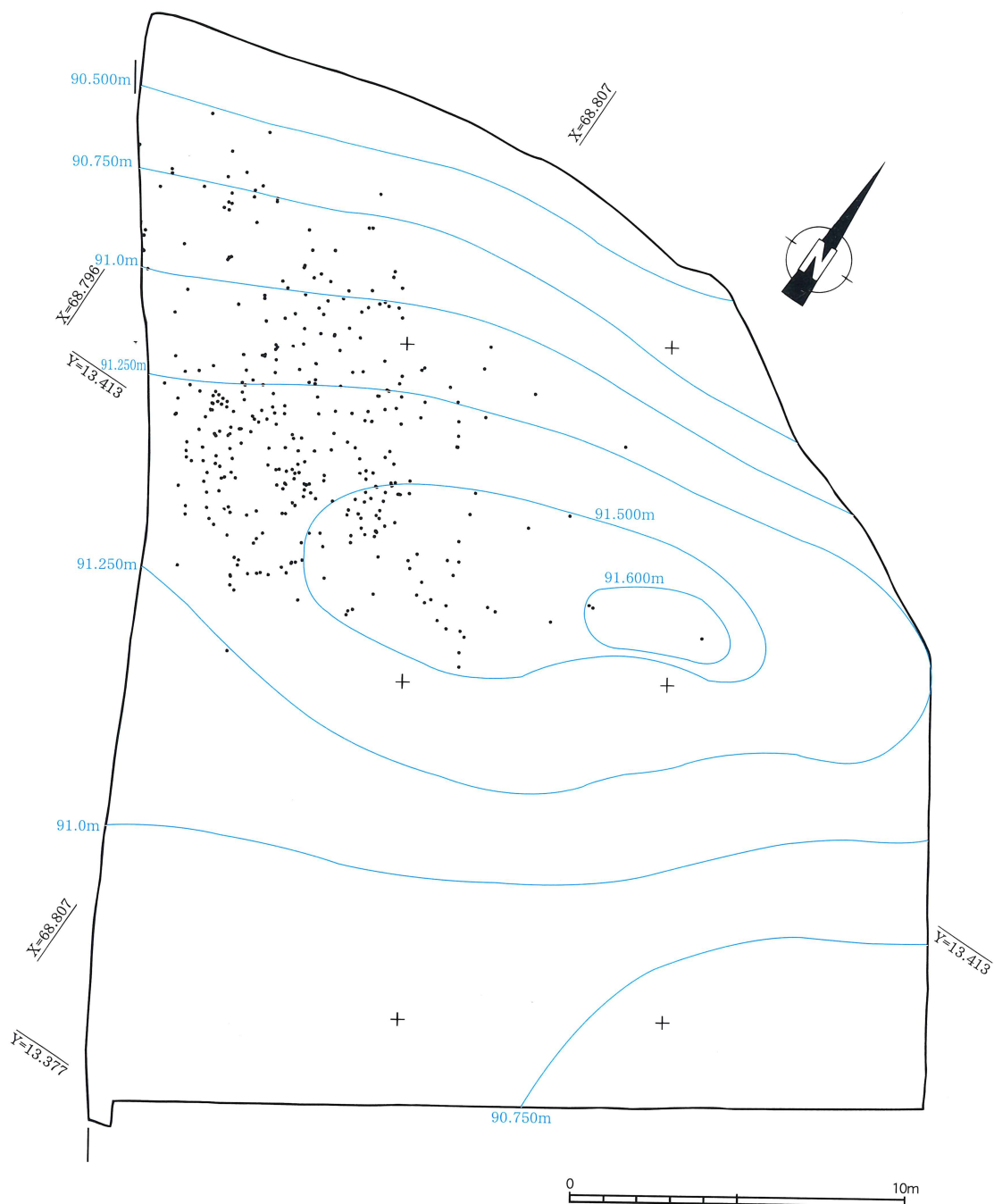
第24図 2号集石炉実測図(1/20)



第25図 3号集石炉実測図(1/20)

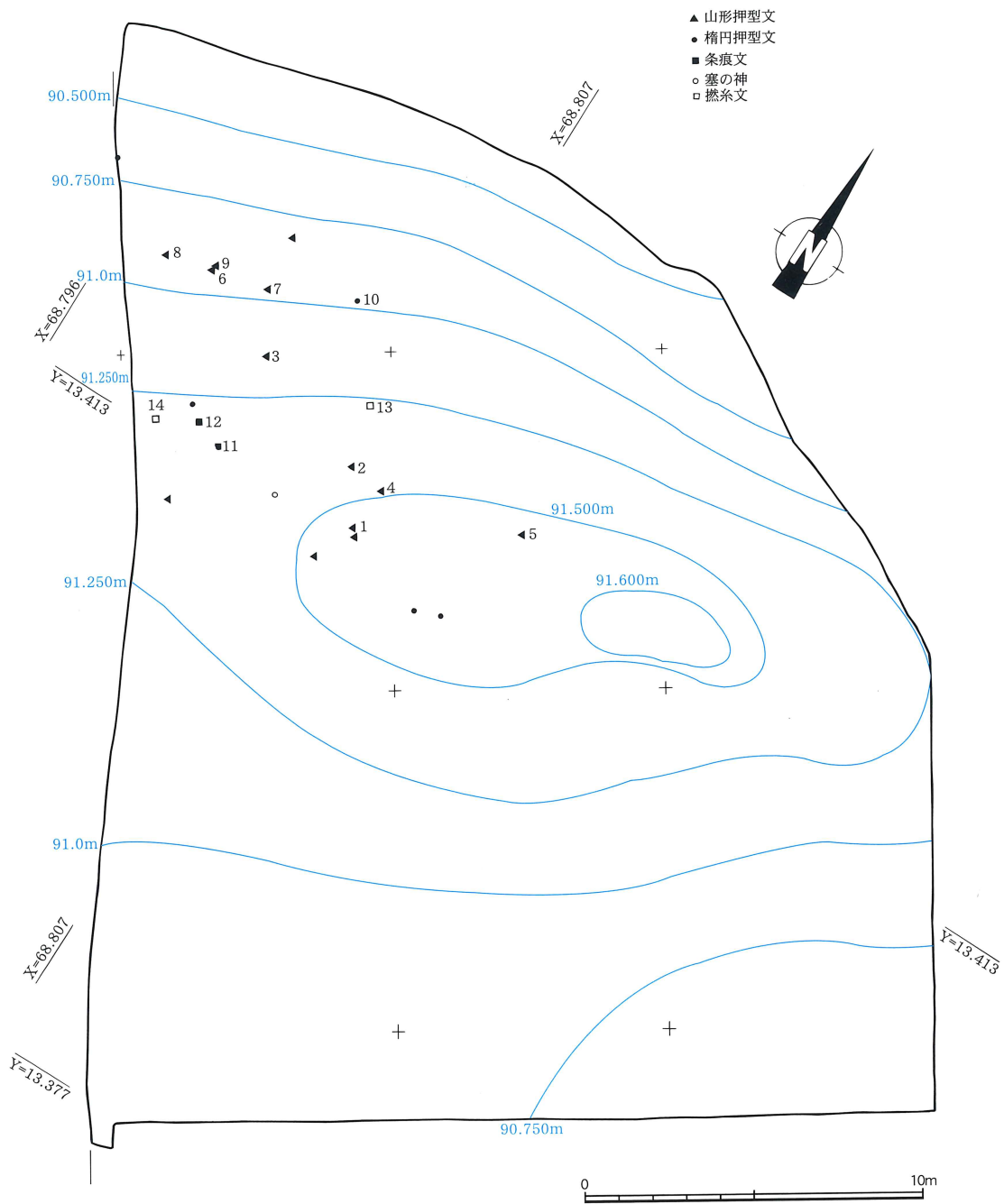
### (2) 土器

出土した縄文時代早期の土器は451点である。この内、攪乱層から出土した遺物は101点である。当遺跡の土器は胎土によるせいか、表面の損耗が著しく確実に分別できるものは、あまりなかった。その種類は、押型文式土器(山形文、楕円文)21(3)点[4.7%]、条痕文土器2(1)点[0.4%]、撚糸文土器2点[0.4%]、塞ノ神式土器2(1)点[0.4%]、厚手無文土器336(74)点[74.5%]、薄手無文60(15)点[13.3%]、不明土器28(7)点[6.2%]である。( )は攪乱層の数(第31図)。土器の分布はC2区の2号集石炉を中心に北西の方向に広がりを見せる。攪乱層の部分は載せていない(第26、27、28図)。1~9、19、20はいずれも胴部の山形押型文土器である(8は攪乱)。10は胴部、22は口縁部、23は胴部の楕円押型文土器である。11、12は胴部の条痕文土器である。13、14は撚糸文土器である。15~17、24は口縁部、18は底部の無文土器である。16は復原口径21.6cmで、風化が激しく土器の表面が一部剥離している。23は口縁屈曲部に貝殻刺突している塞ノ神式土器である。25は縄文時代後期の磨消縄文で表面に縄文が施されている。

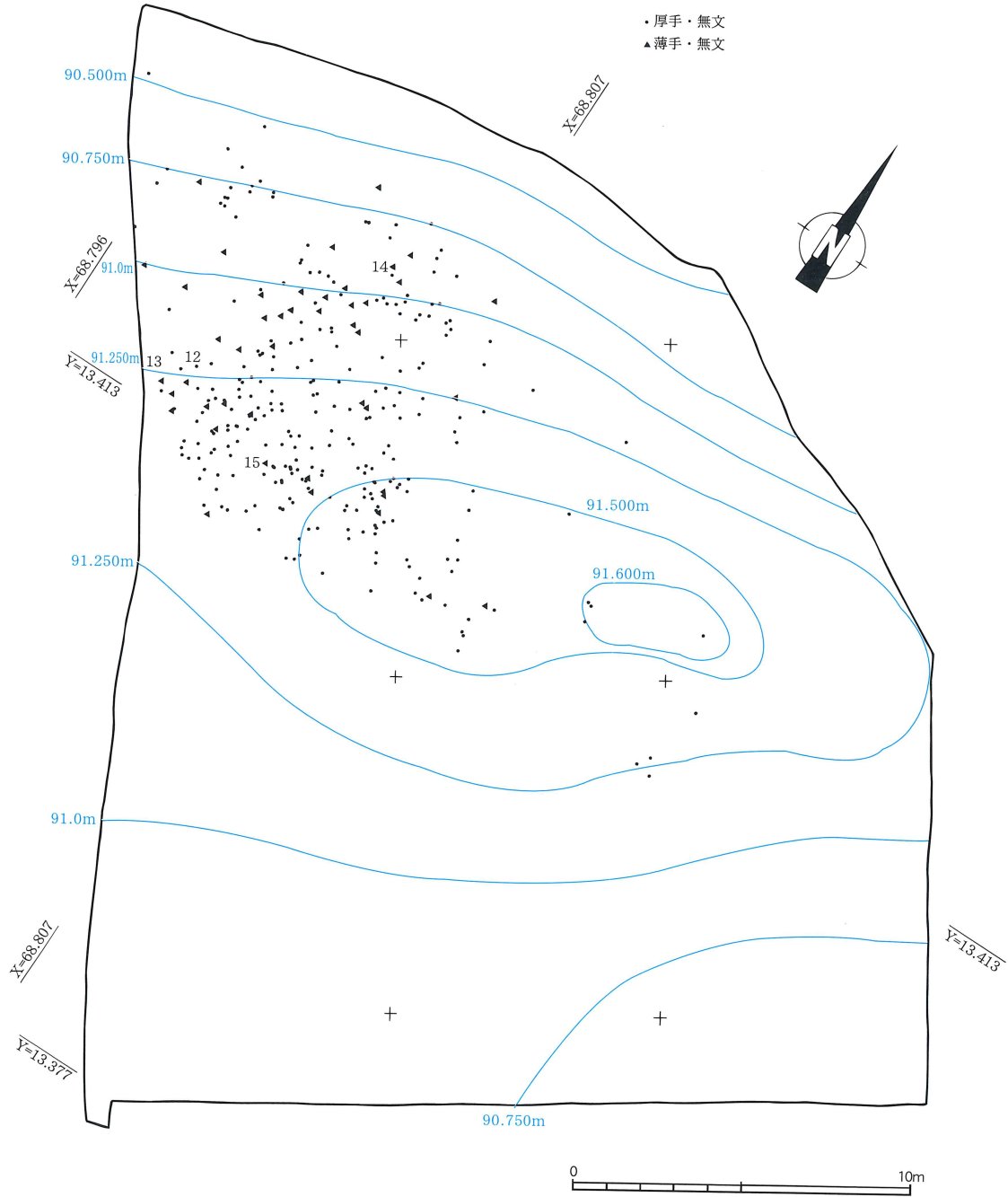


第26図 縄文時代早期土器分布図 1 (1/200)

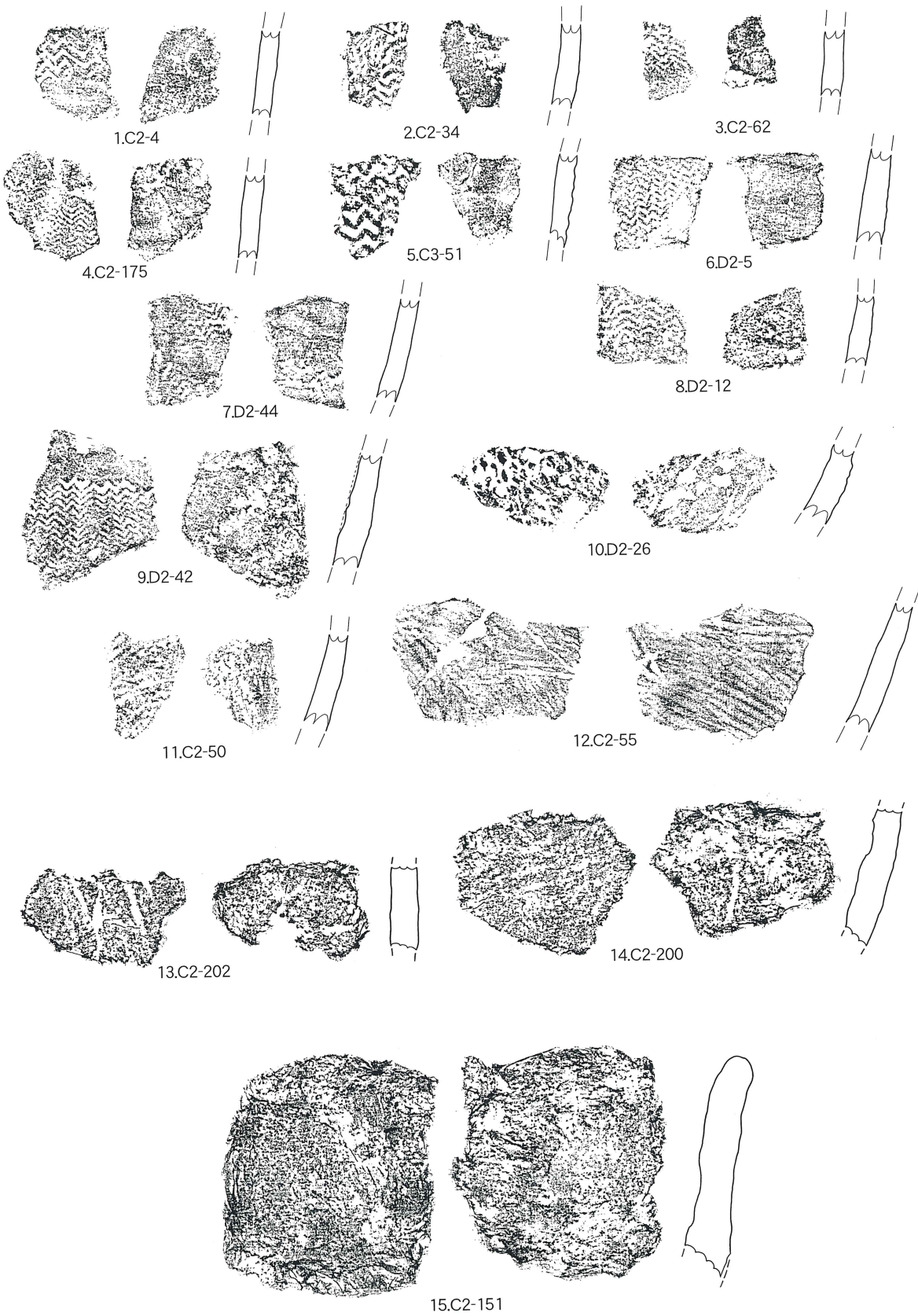




第27図 縄文時代早期土器分布図 2 (1/200)

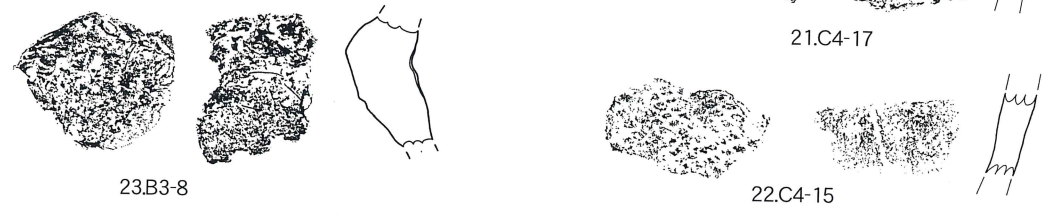
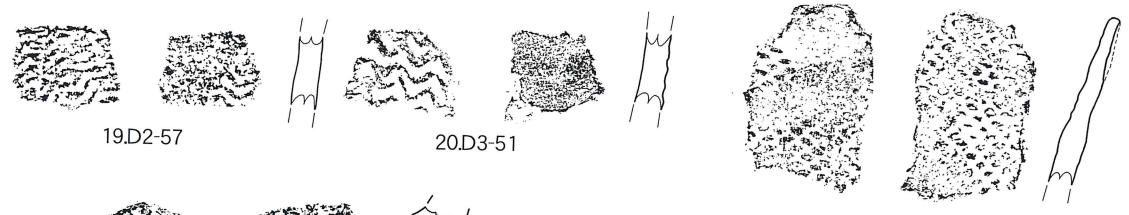
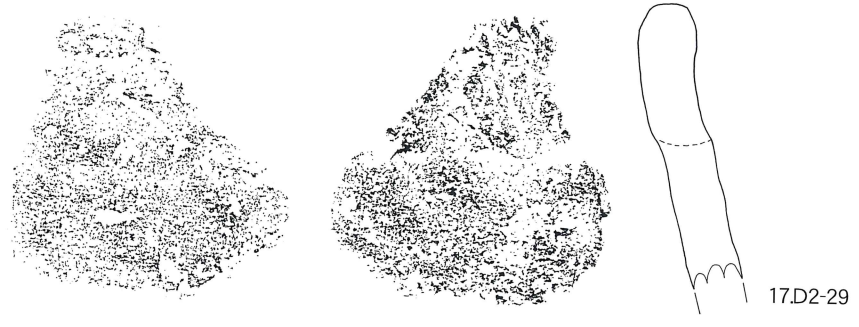
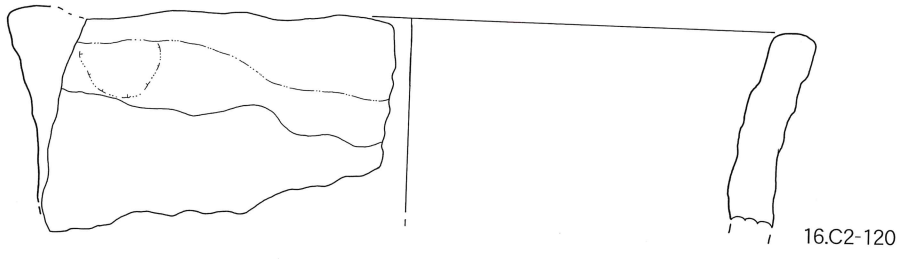


第28図 縄文時代早期土器分布図 3 (1/200)



0 10cm

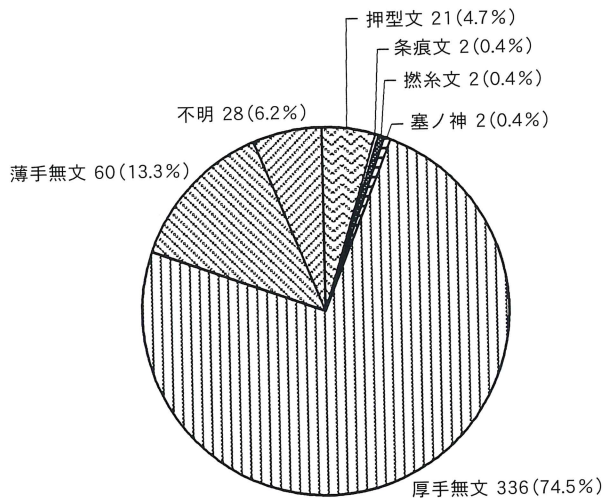
第29図 縄文時代早期土器実測 1



第30図 縄文時代早期～後期土器実測図 2 19から25は攪乱層出土

第10表 縄文時代土器観察表

図版No.	遺物No.	器種	色調外面	色調内面	胎土	調整外面	調整内面	焼成
1	C2-4	深鉢型土器	鈍い赤褐色(Hue5YR5/4)	鈍い赤褐色(Hue5YR5/4)	角閃石	山形押型文	ナデ	良好
2	C2-34	深鉢型土器	鈍い黄褐色(Hue10YR7/4)	鈍い黄褐色(Hue10YR7/4)	角閃石	山形押型文	ナデ	通有
3	C2-62	深鉢型土器	橙色(Hue2.5YR6/6)	橙色(Hue2.5YR6/6)	角閃石	山形押型文	ナデ	通有
4	C2-175	深鉢型土器	橙色(Hue2.5YR7/8)	橙色(Hue2.5YR7/8)	石英 長石	山形押型文	ナデ	不良
5	C3-51	深鉢型土器	橙色(Hue2.5YR7/8)	橙色(Hue2.5YR7/8)	角閃石 石英	山形押型文	ナデ	良好
6	D2-5	深鉢型土器	鈍い黄褐色(Hue10YR7/4)	鈍い黄褐色(Hue10YR7/4)	角閃石 斜長石	山形押型文	ナデ	良好
7	D2-44	深鉢型土器	橙色(Hue5YR6/8)	橙色(Hue10YR7/4)	角閃石	山形押型文	ナデ	通有
8	D2-12	深鉢型土器	橙色(Hue5YR7/6)	浅い黄褐色(Hue10YR8/4)	角閃石	山形押型文	ナデ	通有
9	D2-42	深鉢型土器	橙色(Hue5YR6/8)	黄褐色(Hue2.5YR8/8)	角閃石	山形押型文	ナデ	通有
10	D2-26	深鉢型土器	鈍い黄褐色(Hue10YR7/4)	鈍い黄褐色(Hue10YR7/4)	角閃石	楕円押型文	ナデ	通有
11	C2-50	深鉢型土器	赤色(Hue7.5YR4/6)	赤色(Hue7.5YR4/6)		楕円押型文	ナデ	通有
12	C2-55	深鉢型土器	赤色(Hue10YR4/6)	赤色(Hue7.5YR4/6)	石英	条痕文	条痕文	良好
13	C2-202	深鉢型土器	鈍い黄褐色(Hue5YR6/4)	鈍い黄褐色(Hue10YR6/4)	黒雲母 長石	縄文	ナデ	良好
14	C2-200	深鉢型土器	鈍い赤褐色(Hue5YR5/4)	橙色(Hue7.5YR6/6)	角閃石 石英 斜長石	縄文	ナデ	良好
15	C2-151	深鉢型土器	橙色(Hue5YR6/6)	鈍い橙色(Hue7.5YR6/4)	角閃石 石英 斜長石	ナデ	ナデ	良好
16	C2-120	深鉢型土器	赤褐色(Hue5YR4/6)	明赤褐色(5YR5/6)	角閃石 黒雲母 斜長石	ナデ	詳細不明	良好
17	D2-29	深鉢型土器	橙色(Hue2.5YR7/8)	橙色(Hue2.5YR7/8)	角閃石 石英 斜長石	ナデ	ナデ	不良
18	C2-142	深鉢型土器	鈍い褐色(Hue7.5YR6/3)	鈍い褐色(Hue7.5YR5/4)	角閃石 石英 長石 雲母	ナデ	ナデ	良好
19	D2-57	深鉢型土器	黄褐色(10YR8/6)	黄褐色(10YR8/6)	角閃石	山形押型文	ナデ	不良
20	D3-51	深鉢型土器	暗赤褐色(2.5YR3/4)	暗赤褐色(2.5YR3/4)	角閃石 石英	山形押型文	ナデ、部分的山型文	通有
21	C4-17	深鉢型土器	赤色(Hue10YR4/6)	赤色(Hue10YR4/6)	角閃石 石英	楕円押型文	楕円押型文	良好
22	C4-15	深鉢型土器	赤色(Hue7.5YR4/6)	赤色(Hue7.5YR4/6)	角閃石	楕円押型文	ナデ	良好
23	B3-8	深鉢型土器	鈍い黄褐色(Hue10YR5/3)	鈍い黄褐色(Hue10YR6/4)	角閃石 雲母	ナデ	ナデ	良好
24	D3-6	深鉢型土器	暗赤褐色(2.5YR3/4)	暗赤褐色(2.5YR3/4)	角閃石 斜長石	ナデ	詳細不明	不良
25	B3-15	深鉢型土器	鈍い黄褐色(Hue10YR6/4)	鈍い黄褐色(Hue10YR5/4)	石英 長石	縄文 磨消縄文	ナデ	良好



第31図 縄文時代早期土器百分率

かに分別できるものは削器（サイドスクレイパー）、搔器（エンドスクレイパー）としたが、その他はスクレイパーとした。

縄文時代早期の石器の個体識別は10～35の26種類に分類できる。すべてチャートである。それぞれについて説明していきたい。

10. 淡灰白褐色で黒い粒子と褐色の節理をもつ。
11. 10とほぼ同じ色調だが、粒子は含まず褐色の節理が入っている。
12. 淡灰白色で黒い細かい粒子は見られるが、あまり節理は見られない。純度が高く、火打ち石と言われるもの。
13. 淡灰色で粒子は見られない。褐色の節理がはいっている。
14. 淡灰白色で白・黒の粒子を含む。褐色の節理をもつ。
15. 淡黒褐色で黒色の節理をもつ。透明度が高い。
16. 淡灰白色でわずかに青みをおびている。淡黒色の縞模様と粒子をもつが純度は高く、節理もあまりない。
17. 淡灰色で黒い粒子が見られる。淡緑色の大きな節理と褐色の細かい節理が見られる。

### (3) 石器組成と石材組成、個体別資料及びその分布

出土した石器は総数で183点である。石鏃10点、尖頭状石器6点、尖頭状石器未成品5点、エンドスクレイパー5点、サイドスクレイパー7点、スクレイパー6点、2次加工ある剥片15点、使用痕ある剥片22点、剥片・チップ101点、石核は6点である。石材別では、チャート156点（1105.2g）、姫島産黒曜石11点（9.4g）、ガラス質安山岩12点（19.5g）石英1点（4.6g）黒色黒曜石1点（1.3g）ホルンフェルス2点（24.5g）である（第11表）。スクレイパー類で明らか

第11表 第2層石器器種組成表

	チャート	姫島産黒曜石	ガラス質安山岩	石英	黒色黒曜石	ホルンフェルス	計
総点数	156	11	12	1	1	2	183
総重量(g)	1105.2	9.4	19.5	4.6	1.3	24.5	1164.5
石鏃	5 (24.9)	2 (1.3)	2 (2.5)	1 (4.6)	0 (0)	0 (0)	10 (33.3)
尖頭状石器	6 (42.2)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	6 (42.2)
尖頭状石器未成品	5 (53.2)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	5 (53.2)
エンドスクレイパー	5 (84.2)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	5 (84.2)
サイドスクレイパー	6 (49.5)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (12.3)	7 (61.8)
スクレイパー	5 (52.9)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (12.2)	6 (65.1)
RF	14 (143.4)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (1.3)	0 (0)	15 (144.7)
UF	22 (159.8)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	22 (159.8)
剥片類	82 (351.1)	9 (8.1)	10 (17.0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	101 (376.2)
石核	6 (144.0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	6 (144.0)

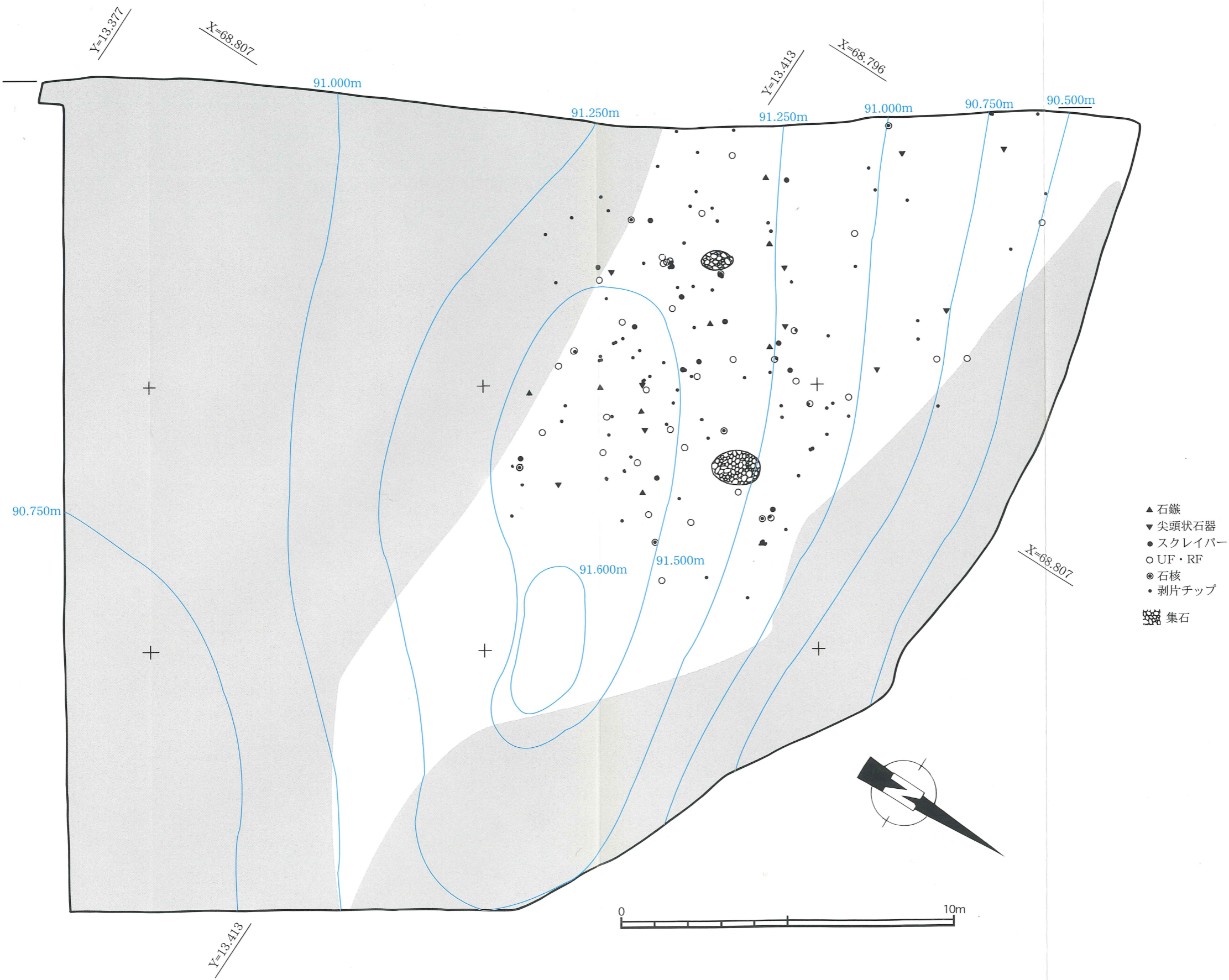
18. 淡黒色の縞模様をもち透明度が高く、白もしくは褐色の節理をもつ。
19. 淡灰褐色で透明度が高い。白い節理をもつ。
20. 淡灰白色と淡黒灰色で透明度が高く、赤茶褐色と褐色の節理をもつ。
21. 淡灰白色と淡黒灰色で透明度が高く、赤茶褐色の節理をもつ。
22. 淡黒灰色で黒い縞模様と褐色の節理をもつ。
23. 淡灰色で黒い粒子がまだらに見られる。純度は高い方ではあるが、褐色の節理をもつ。
24. 23と同じく、黒い粒子がまだらに見られるが、23よりも節理・ヒビがはいっている。
25. 淡灰褐色で黒い粒子を含む。19よりも青みが強い。白い節理をもつ。
26. 淡白色で黒と茶色の節理がかなり多くはいっている。
27. 18と同じだが、18に比べ透明度は高い。
28. 淡灰白色で白い節理をもつ。
29. 色調は11と同じだが、褐色・茶色の節理を多くもつ。
30. 淡灰褐色で茶色と灰色の節理をもつ。
31. 白褐色と灰色で茶色・褐色の節理をもつ。
32. 淡白褐色で褐色の節理をもつ。
33. 淡灰白色で黒と褐色の節理をもつ。
34. 色調・質共に16と同じだが、褐色の節理をもつ。
35. 淡灰褐色で透明度が高い。黒い節理が見られるが、12ほどではなく、純度も高い。

石器の分布は主に、集石炉を中心に広がりが見られる（第32図）。個体毎に固まりが見られるが特に個々のユニットを形成するようなものではなく、大きなユニットの中の一つ一つとして見た方が良いと思われる（第33図）。

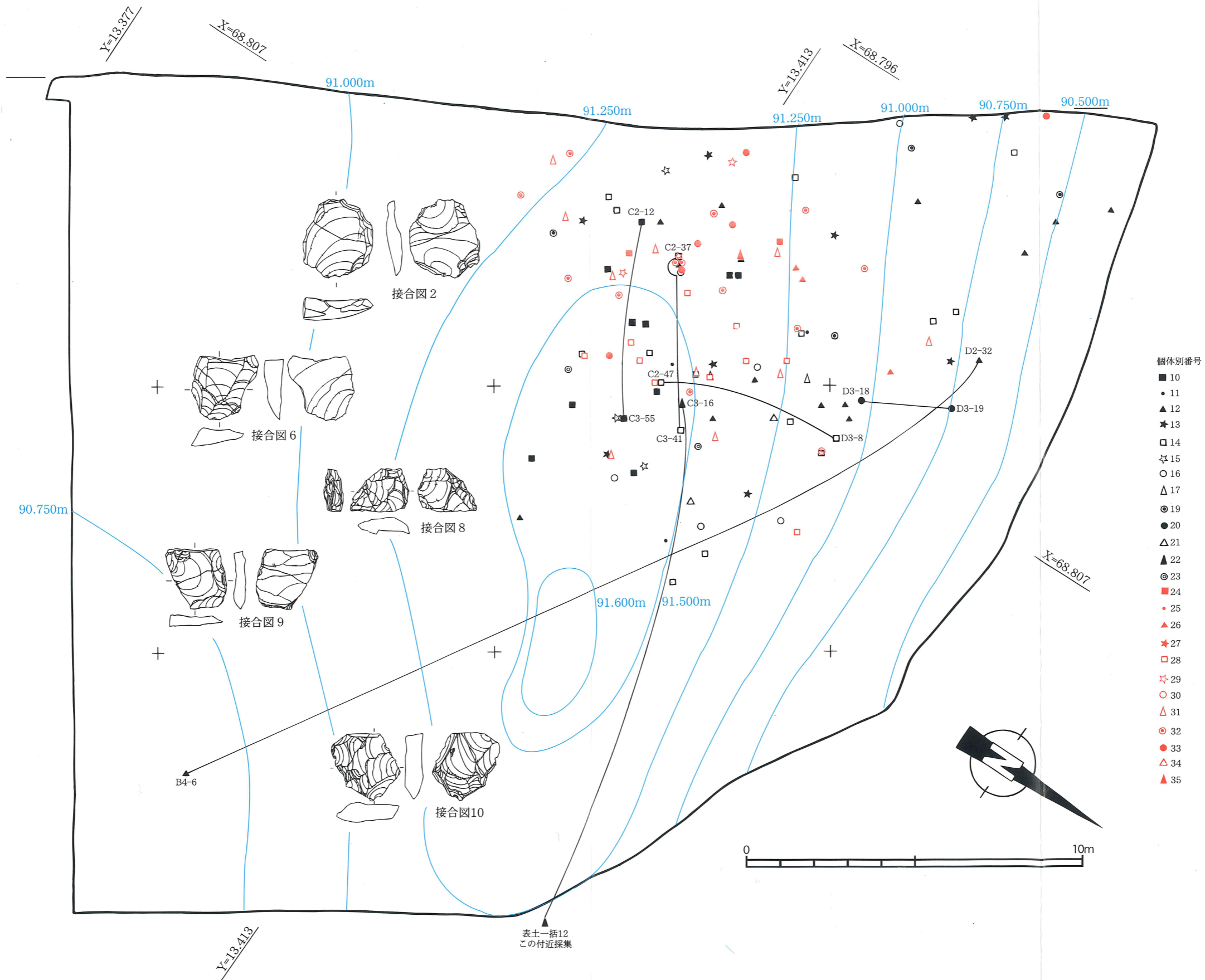
#### （4）石器

##### 石鏃（第34図1～10）

石鏃は二等辺三角形のもの（A類）と、正三角形に近いもの（B類）に大別できる。そのほとんどが基部にV字の挟りがある。



第32図 縄文時代早期石器分布図(1/125)



第33図 縄文時代早期石器個体別分布図(1/125) (個体18は攪乱層の為欠番)



#### A類 (第34図1、2、5、7~10)

1は姫島産黒曜石製、2はガラス質安山岩製で共に使用の際によると思われる衝撃等で先端部が欠損している。5はチャート製で、脚部と先端部が欠損している。7はガラス質安山岩製で、脚部が欠損している。8はチャート製で、全体の形としては側辺部の左右が少し抉れており、逆Y字をなしている。脚部が欠損している。9は石英製で、脚部が欠損している。10はチャート製で、脚部が欠損している。

#### B類 (第34図3、4、6)

3、4はチャート製。6は姫島産黒曜石製で先端部と脚部が欠損している。

#### 尖頭状石器 (第34図12~14、16~19)

12はチャート製で、縦長剥片を素材とし、表の左右の縁辺からほぼ全面的に調整加工を行っているが、裏の調整はほとんど無い。下部が欠損している。13はチャート製で、先端部が一部、欠損している。縁辺からの細かい加工が見られる。14はチャート製で、表は大まかな加工が見られるが、裏は左右の縁辺に調整加工が見られる。上部が欠損している。16はチャート製で、梨形をしている。左右対称をなし、縁辺からの調整加工が見られる。17はチャート製で、全体的に細かい加工が見られるが、不定形をなしている。左右上側、右側の側面に使用痕が見られる。18はチャート製で、表裏ともに細かい加工が見られる。先端部が欠損している。19はチャート製で、縁辺からの調整加工により、左右対称に作り出されている。石の節理により細かく割れている。

#### 尖頭状石器未成品 (第34図11、15、20、21)

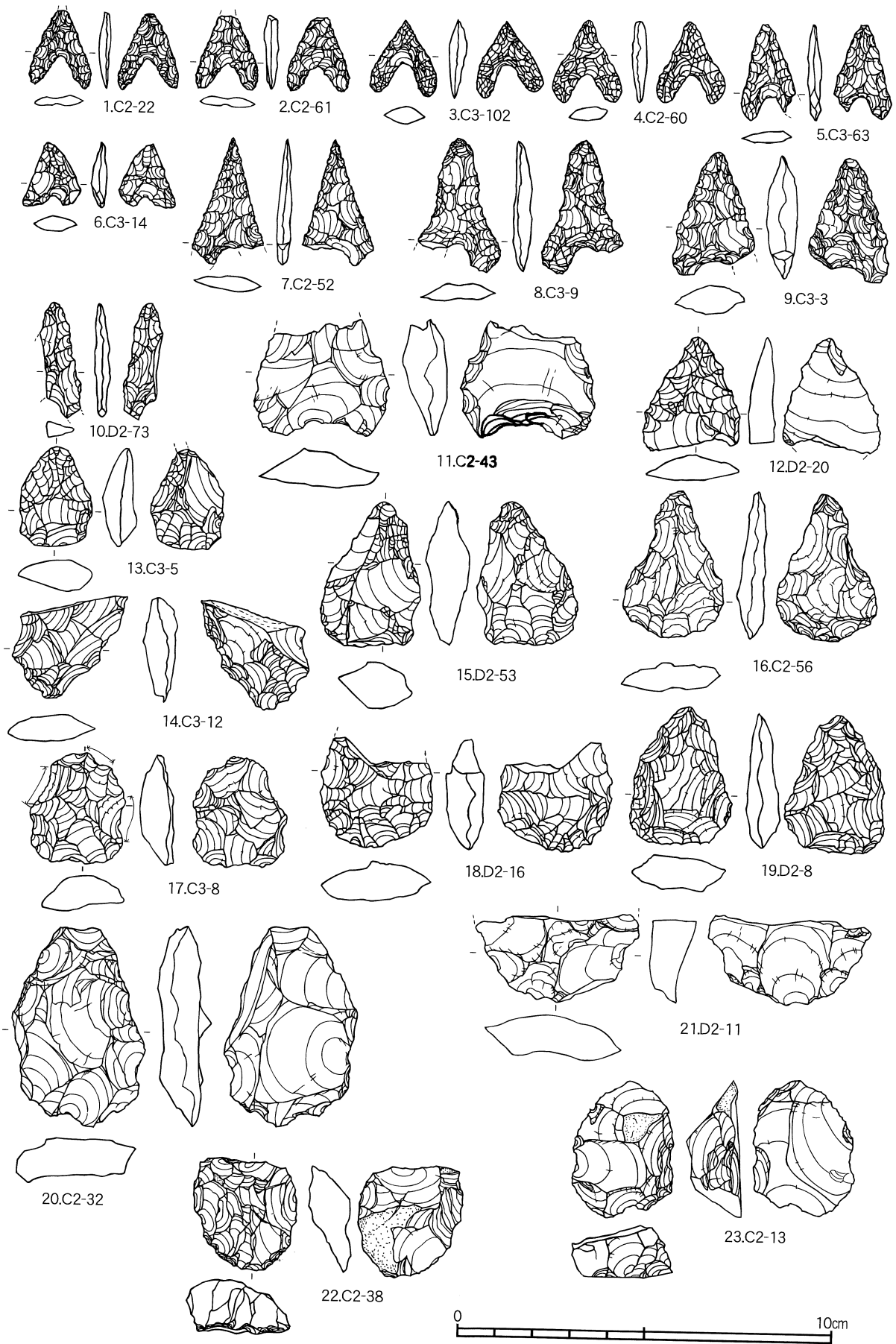
11はチャート製で、表の加工は粗く裏は縁辺を加工しただけにとどまっている。中央部は厚く残る。下部は緩やかではあるが、U字状の抉りがある。上半分が欠損している。15はチャート製で、表の右上や裏の下部の縁辺に細かい調整加工が見られる他は加工は粗雑である。20はチャート製で、粗い加工が全体的に見られるが、表の左上と右側に細かい加工が見られる。21はチャート製で、全体として加工が粗い。上部が欠損している。

#### 搔器 (エンドスクレイパー) (第34図22、23、第35図1~3)

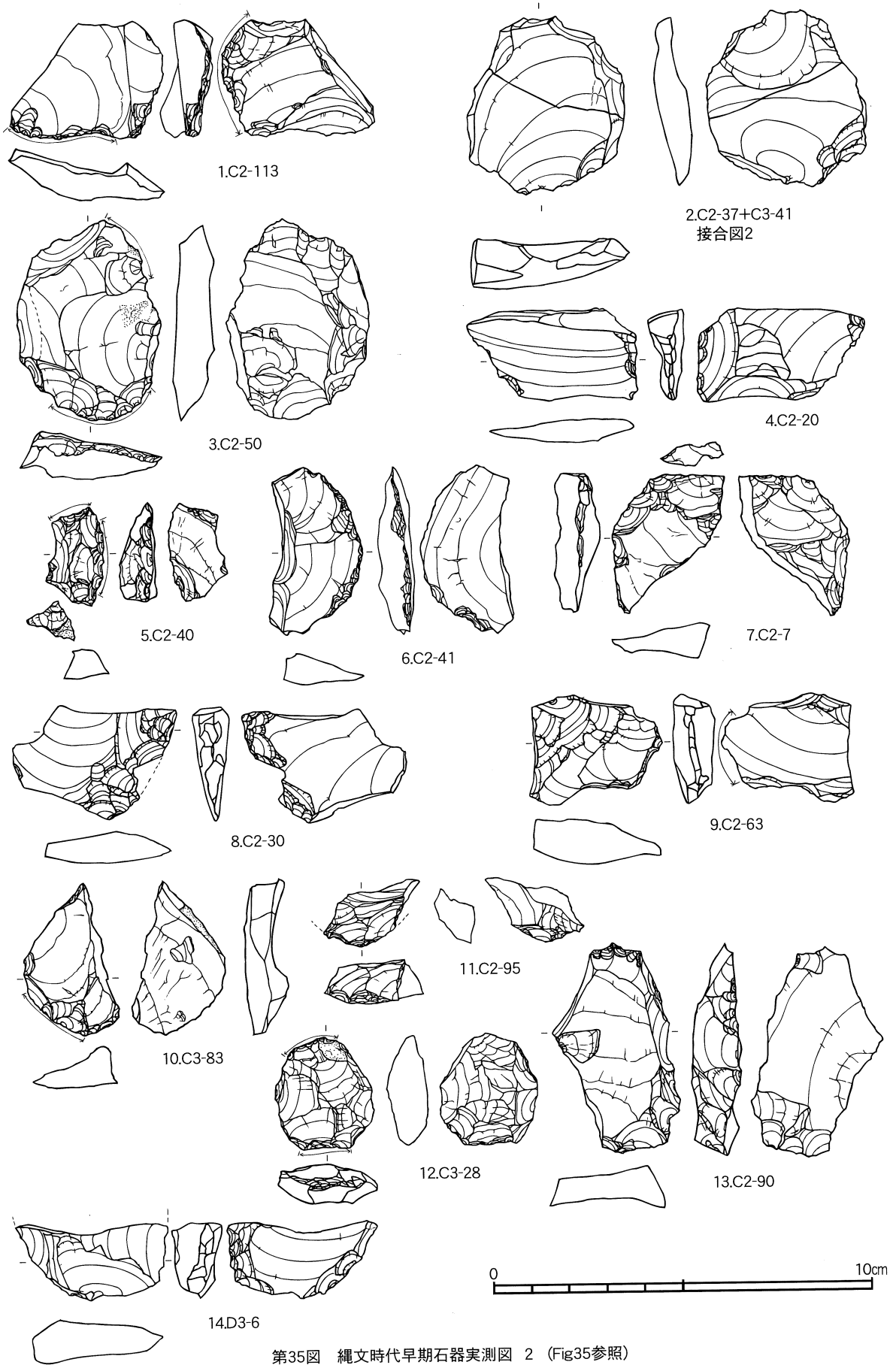
22はチャート製で、下縁に細かい調整加工を施し刃部としている。裏面は表に比べ加工は粗い。23はチャート製、表には上部に自然面を一部残している。刃部は表面の大まかな調整加工により作り出されている。裏側は特に目立った細かい調整加工は施されていない。第35図1はチャート製で、縦長剥片を素材とし、表の下側縁と裏の左側縁に細かい調整加工を施し、それぞれ刃部を作り出している。また、刃部には使用痕も見られる。2は接合資料で、幅広の剥片を素材としたチャート製である。使用痕が右縁に認められる。石核を幅一杯に使い、打面と作業面をほぼ固定し、ほぼ同じ位置で2つの剥片を連続剥離した翼状打面を刃部としている。調整加工は裏側の上部縁と、右下部縁にある。3はチャート製で、使用痕が右上部縁と下部縁に認められる。下部縁に調整加工を施し、刃部を作り出している。自然面が右下部縁に残っている。

#### 削器 (サイドスクレイパー) (第35図4~10)

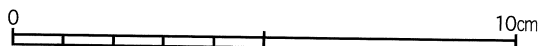
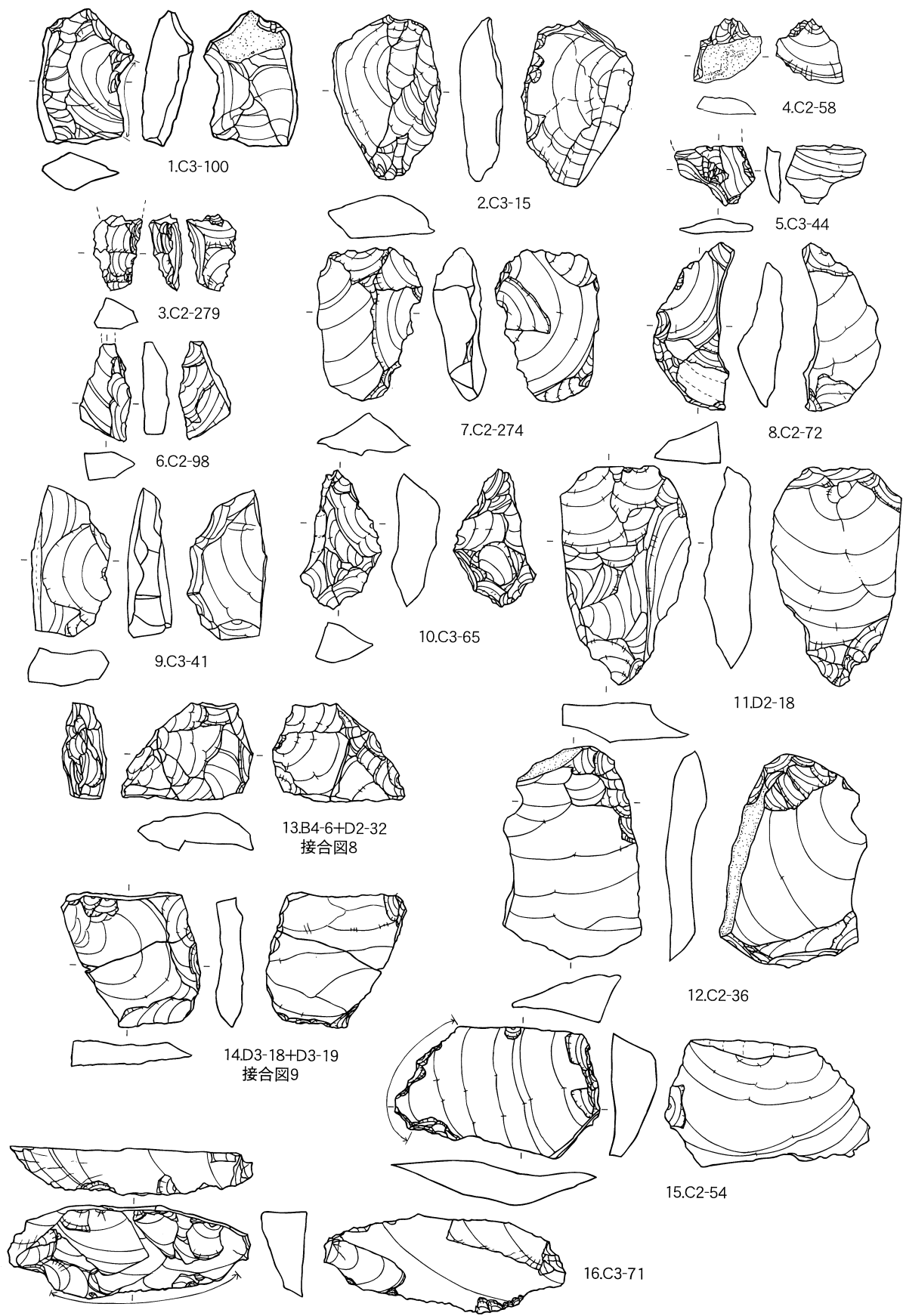
4はチャート製で、横長剥片を素材とし、右側縁に細かな調整加工を施し、刃部を作り出している。5はチャート製で、表は大まかな加工の後に細かい調整加工を施し、右側縁に刃部を作り出している。裏側は2つほどの調整加工の他は何もなされていない。上側縁と右側縁に使用痕が見られる。6はチャート製で、横長剥片を素材とし、表の右側縁に細かい調整加工を施し、刃部を作り出している。7はチャート製で、縦長剥片を素材とし、大まかな加工の後、左側縁に細かい調整加工を施し、刃部を作り出している。8はチャート製で、横長剥片を素材とし、右側縁に細かい調整加工を施し、刃部を作り出している。右側縁は一部欠損している。9はチャート製で、横長剥片を素材とし、大まかな加工の後、右側縁に細かい調整加工を施している。使用痕が右側縁に認められる。10はチャート製で、左側縁に、調整加工を施し、細かい刃部を作り出している。



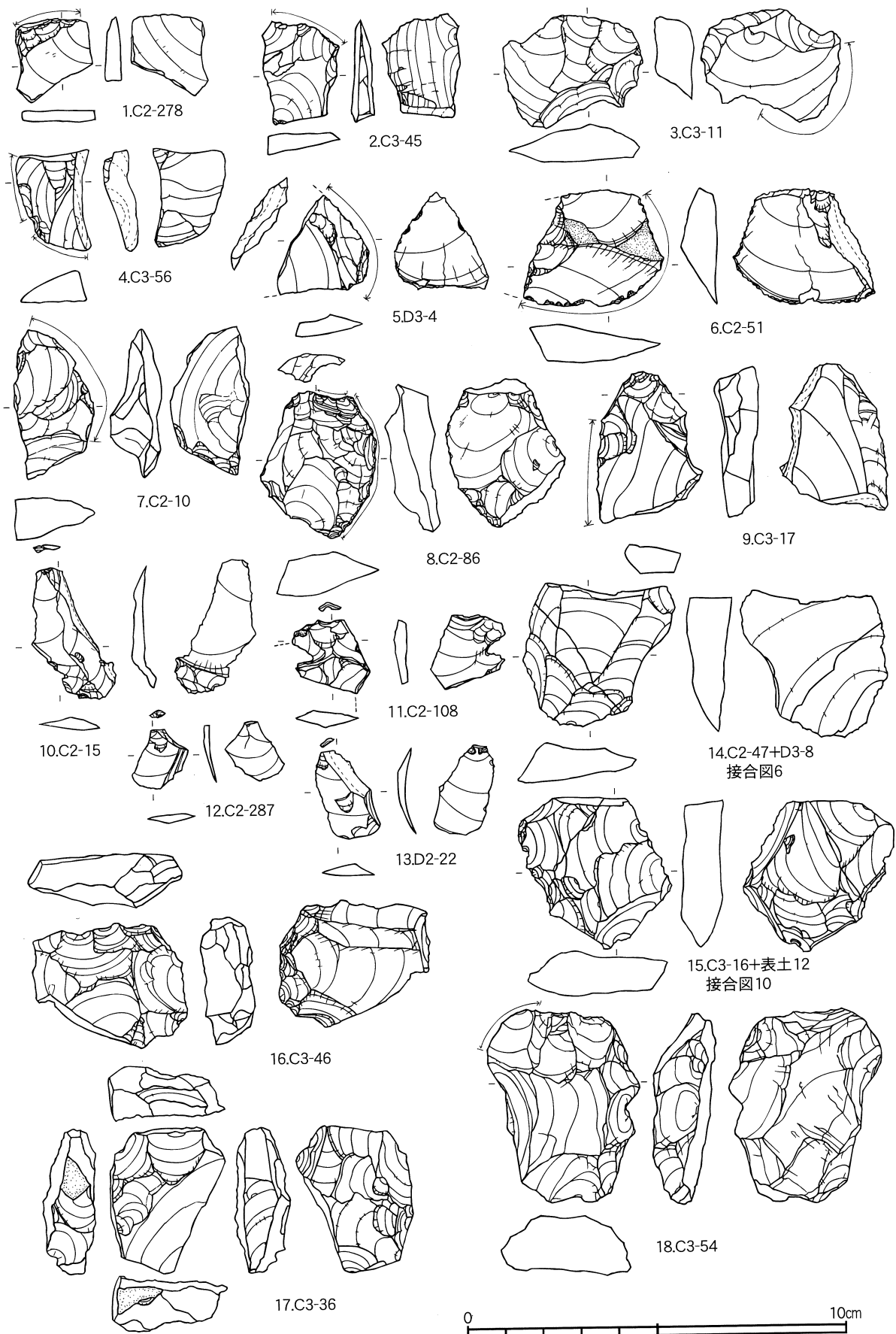
第34図 縄文時代早期石器実測図 1 (Fig34参照)



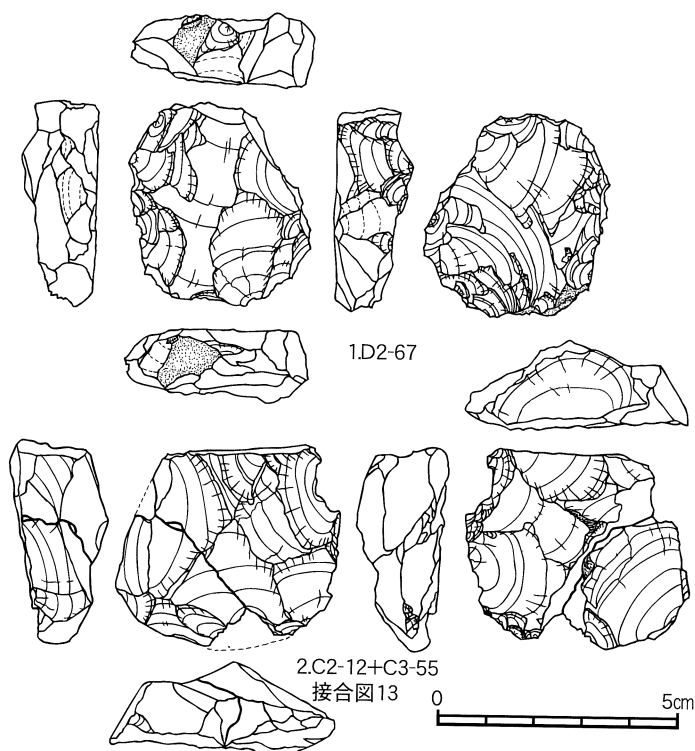
第35図 縄文時代早期石器実測図 2 (Fig35参照)



第36図 縄文時代早期石器実測図 3 (Fig36参照)



第37図 縄文時代早期石器実測図 4 (Fig37参照)



第38図 縄文時代早期石器実測図 5 (Fig38参照)

スクレイパー (第35図11~14、第36図1、2)

11はチャート製で、大まかな加工の後、細かい調整加工が見られる。上、左右共に折れている。12はチャート製で、下側縁に細かな調整加工を施し、刃部としている。また、使用痕が上下縁に認められる。13はチャート製で、横長剥片を素材とし、表の右側縁にブランディング加工を行った後、上側縁に細かい加工を施し、茎形の刃部を作り出している。14はチャート製で、正面の下縁からの大きな剥離の後に、裏側左側縁に細かい調整加工を施し、刃部を作り出している。上部は節理で折れている。第36図1はチャート製で、裏表ともに大まかな調整加工を施している。右側縁に使用痕が見られることから、抉入状のスクレイパーの可能性も考えられる。2はチャート製

で、表の下側縁と、裏の左側縁に細かい調整加工が見られる。

#### 2次加工ある剥片 (第36図3~15)

3はチャート製で、剥片素材の表面右側縁辺に細かい調整加工を施す。上、左が欠損している。削器の端部の可能性も考えられる。4は黒色黒曜石製で、縦長剥片を素材とし、表の上部、右側、裏側の上部に調整加工が見られる。石器の表面には、自然面を残す。5はチャート製で、縦長剥片を素材とし、表の左右に調整加工が見られる。上部が欠損している。6はチャート製で、縦長剥片を素材とし、表面右側に調整加工が見られる。上部に欠損している。7はチャート製で、横長剥片を素材とし、表側の上部と裏側の右側にそれぞれ調整加工が見られる。表は、石材の硬い節理面で止まっている。8はチャート製で、縦長剥片を素材とし、表側に大まかな調整加工が見られるのと、その左側の縁辺に細かい調整加工が見られる。また、右側は折れている。9はチャート製で、表に大きな調整加工が一つと、周りの縁辺に調整加工を施している。10はチャート製で、表裏ともに、大まかな調整加工を施している。11はチャート製で、縦長剥片を素材とし、表側の大きな調整加工の後、裏側の下部に左右からの細かい調整加工を施している。抉入状の石器の可能性も考えられる。右側の縁辺に使用痕が見られる。また、左側の縁辺は自然面を残す。12はチャート製で、縦長剥片を素材とし、表の上部右側に調整加工が見られる。また、裏側の上部には階段状の調整加工が見られる。自然面を残している。13はチャート製で、接合資料である。節理で折れている。幅広の剥片を素材とし、全体的に大まかな調整加工を施している。表の左側に細かい加工が見られる。14はチャート製で、接合資料である。縦長剥片を素材とし、表面の上部と右側の縁辺に調整加工が見られる。15はチャート製で、横長剥片を素材とし、表に細かい加工が見られ、右側の縁辺に使用痕が見られる。

#### 使用痕ある剥片 (第36図16、第37図1~9)

16はチャート製で、1:1の幅広の剥片を数回剥離した後、打面再生した横長剥片を素材とし、裏側に大きな加工が左右に見られる。また右下側に細かい剥離痕が見られる。下部の縁辺に使用痕が

見られる。第37図1はチャート製で、縦長剥片を素材とし、上部に調整加工が見られる。上部の縁辺に使用痕が見られる。2はチャート製で、横長剥片を素材とし、上部に使用痕が見られる。3はチャート製で、横長剥片を素材とし、裏面の右側の縁辺に使用痕が見られる。4はチャート製で、縦長剥片を素材とし、左側の縁辺に使用痕が見られる。上部と右側は折れている。5はチャート製で、幅広剥片を素材とし、表面の左側斜め上に調整加工が見られる。左側は折れており、右側縁辺に使用痕が見られる。6はチャート製で、幅広剥片を素材とし、表面の左側面と裏面の上部に調整加工を施す。表面の左側が折れており、右側から下側の縁辺にかけて使用痕が見られる。表面に自然面を残す。7はチャート製で、横長剥片を素材とし、正面右側の縁辺に使用痕が見られる。8はチャート製で、幅広剥片を素材とし、表面の上部に打面縁調整が施されている。右側縁辺に微細な使用痕が見られる。裏面は右側縁辺と左側下縁辺にそれぞれ調整加工が見られる。9はチャート製で、縦長剥片を素材とし、表面の左右の縁辺から平坦調整加工を行っている。表面の左側縁辺に使用痕が見られる。

#### 剥片（第37図10～13）

11、12は小打面を持つ幅広の剥片、10は1：2の縦長剥片と思われるヒンジを有する剥片。13は有しないもの。

#### 剥片（接合資料）（第37図14、15）

14はチャート製で、縦長剥片だが、打点はとんでいる。節理で折れている。15はチャート製で、周辺に大まかな調整加工が見られる。節理で折れている。

#### 石核（第37図16、17、18、第38図1、2）

16はチャート製で、両設打面から縦長剥片を数枚剥離し、作業面を石核の底面に移動し縁辺から求心的に長幅比1:1前後の剥片を剥離する。その際、打面調整を行い縁辺が交互剥離状になって、平面楕円形で扁平な形態を呈する石核である。17はチャート製で、角礫もしくは亜角礫から剥離した中形の幅広の剥片を素材とし、平坦な縁辺から求心的に表裏面ともに、長幅比1:1前後の剥片を剥離し、平面長方形から楕円形で扁平な形態を呈する石核である。18はチャート製で、打面再生をした剥片を素材とし周りの縁辺から1:1の幅広の剥片を剥離している。左上に使用痕が見られる。第38図1はチャート製で剥片を素材とし（打面再生剥片の可能性も考えられる）、剥離は素材剥片を両面加工するように実施される。打面は剥離面打面で無調整である。そのため剥離進行にしたがって打面転移を繰り返し、交互剥離状の剥離痕をとどめる。求心円状に幅広の剥片を剥離している。形態は扁平な長方形、楕円形をしている。2は接合資料である。チャート製で亜角礫もしくは角礫を素材とし、周辺の縁辺から求心円状に小さめの幅広の剥片を剥離している。交互剥離状の剥離痕をとどめる。形態は扁平に近い長方形である。

### 第3節 攪乱層出土石器

#### （1）遺物

攪乱層出土の石器の中で、流紋岩製の遺物に関しては、層位・個体識別等の検討の結果、旧石器時代に帰属すると思われる。また、縄文時代早期の遺物に関しても同様なことがいえるが、説明はここで行うことにする。

#### 石鏃（第39図1～6）

石鏃は先の分類から言えば、B類は1、2、A類は3～6と思われる。ただし1、2、3は挟りの部分がV字形をなしている。1はチャート製で脚部が欠損している。2は姫島産黒曜石製で裏は表面ほどの調整はなされていない。両脚部が欠損している。3は姫島産黒曜石製で脚部が欠損して

第12表 攪乱層石器器種組成表

	チャート	姫島産黒曜石	ガラス質安山岩	流紋岩	砂岩	黒色黒曜石	シルト岩	結晶片岩	計
総点数	87	44	4	3	1	1	1	1	142
総重量(g)	714.6	68.8	17.5	109.7	510	5.1	125.5	245.7	1796.9

石鏃	1 (0.8)	3 (3.8)	2 (2.9)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	6 (7.5)
尖頭状石器	2 (11.9)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	2 (11.9)
エンドスクレイパー	4 (78.0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	4 (78.0)
スクレイパー	2 (28.9)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	2 (28.9)
チョッパー	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (510)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (510)
RF	8 (99.1)	1 (1.6)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	9 (100.7)
UF	8 (49.6)	4 (21.8)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	12 (71.4)
小石刃	0 (0)	1 (1.0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (1.0)
ハンマーストーン	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (245.7)	1 (245.7)
剥片類	58 (244.2)	35 (40.6)	2 (14.6)	3 (109.7)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	98 (409.1)
石核	4 (202.1)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (5.1)	1 (125.5)	0 (0)	6 (332.7)

いる。4はガラス質安山岩製で脚部が欠損している。5はガラス質安山岩製で脚部が欠損している。6は姫島産黒曜石製で一部、調査時に欠損してしまったが、ほぼ完形である。扱いはU字をなす。尖頭状石器（第39図7、8）

7はチャート製で、裏面は全体的に左右から調整加工が施されているが、表面は右側縁辺にしか調整加工は施されていない。8はチャート製で、裏表ともに、亀甲状に周りの縁辺から調整加工が施されている。

#### 搔器（エンドスクレイパー）（第39図9、10、12、13）

9はチャート製で、幅広の剥片を素材とし、表裏ともに、大まかな調整加工を行った後、表面の下部に細かい調整加工を施し、刃部を作り出している。10はチャート製で、幅広の剥片を素材とし、表面の下部縁辺に細かい調整加工を施し、刃部を作り出している。上部と右側が欠損している。12はチャート製で、幅広の剥片を素材とし、裏面の左側縁辺と下部縁辺に調整加工を施し、下部に刃部を作り出している。13は接合資料で、幅広の剥片を素材としたチャート製である。表裏共に、粗い調整加工を行った後に、下部縁に階段状の細かい調整加工を行ったところを刃部としている。

#### スクレイパー（第39図11、16）

11はチャート製で、素材は不明だが、大まかな調整加工の後、下部と上部の縁辺に細かい調整加工を施し、刃部を作り出している。また、基部のほぼ真ん中に扱りが入っている可能性があることから、扱入削器の可能性も考えられる。16はチャート製で、裏側の左側縁辺に大きな調整加工を施し、刃部を作り出している。また、表面左側縁辺に使用痕が見られる。

#### 小石刃（第39図14）

14は姫島産黒曜石製で、縦長剥片を素材とし、裏右側縁に細かい加工が見られる。

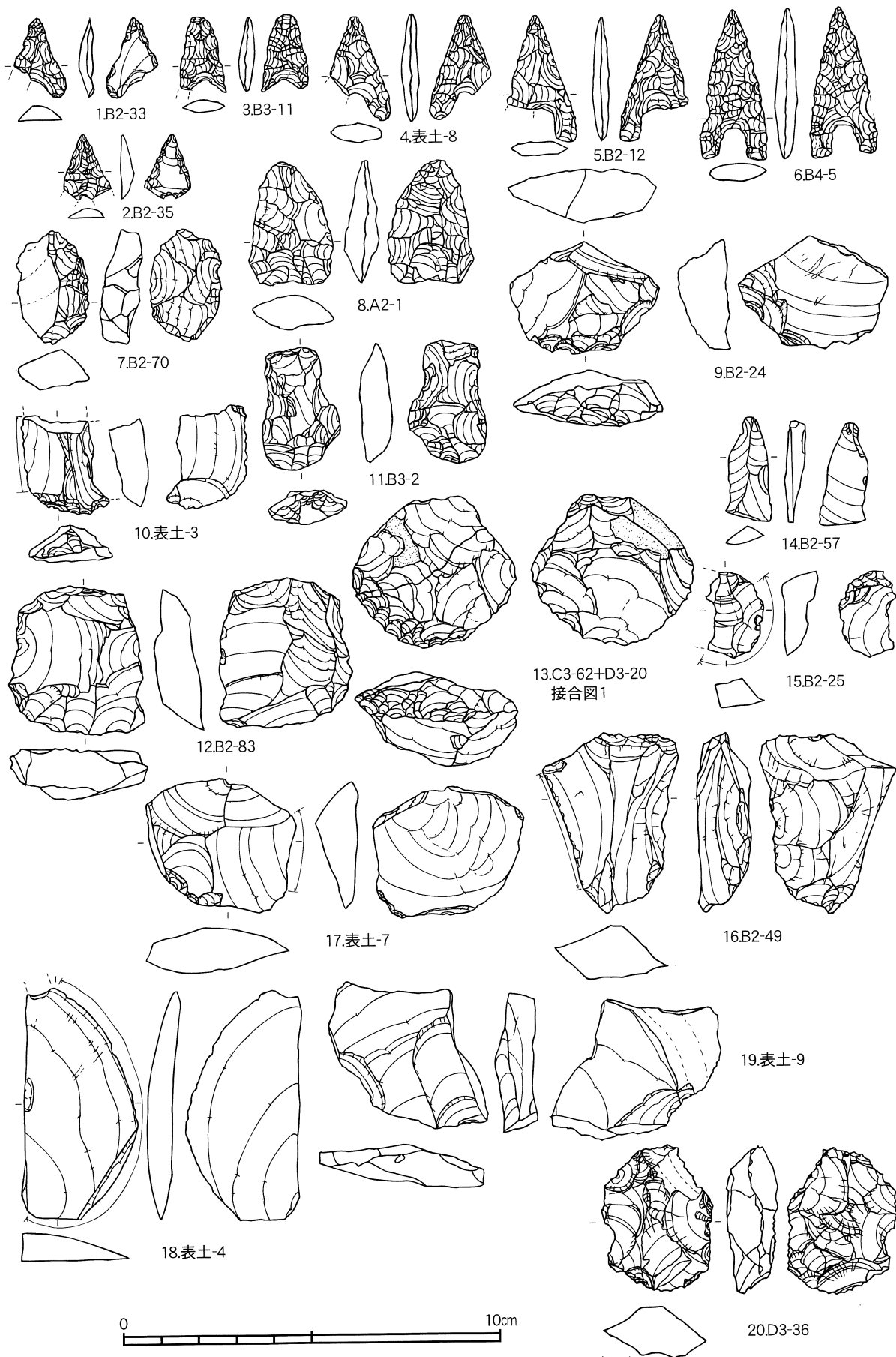
#### 2次加工ある剥片（第39図19、20）

19はチャート製で、幅広の剥片を素材とし、表裏面ともに、調整加工が見られる。また、表の右側の調整加工が見られる。20はチャート製で、剥片素材の周囲の縁辺から大まかに亀甲状に調整加工を施している。細かい加工は施していないので石鏃もしくは尖頭状石器の未成品の可能性も考えられる。

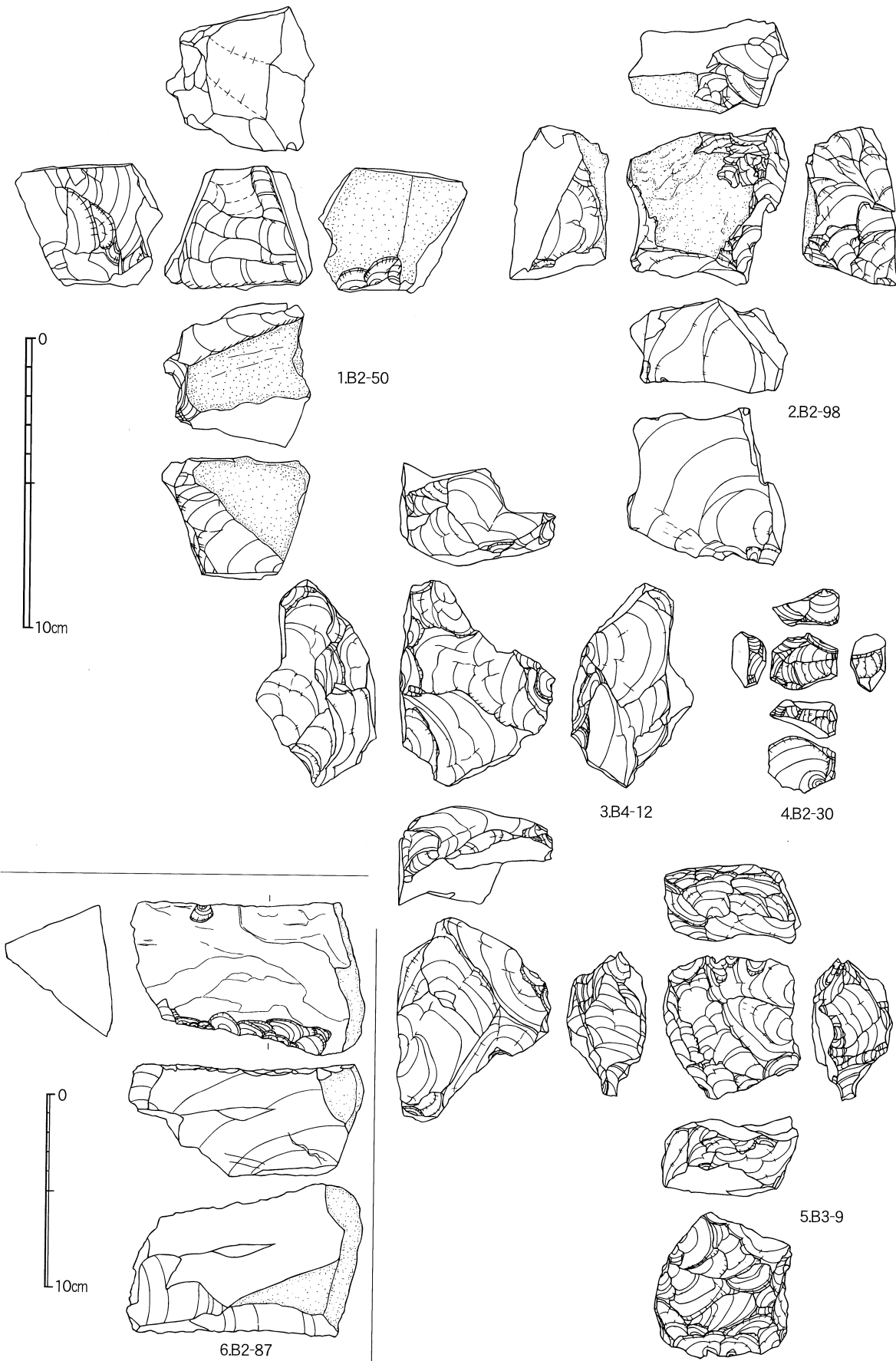
#### 使用痕ある剥片（第39図15、17、18）

15はチャート製で、幅広の剥片を素材とし、裏側の左上の縁辺に細かい調整加工が見られ、表面





第39图 搅乱层出土石器实测图 1 (Fig39参照)



第40図 攪乱層出土石器実測図 2 (1~5は1/2, 6は1/3) (Fig40参照)

の右側から下側の縁辺に微細な剥離痕と使用痕が見られる。左側は欠損している。17はチャート製で、幅広の剥片を素材とし、表面の右側縁辺に使用痕が見られる。18は姫島産黒曜石製で、横長剥片を素材とし、表面の上下・右側の縁辺全体にわたって使用痕がみられる。一部欠損している。

#### 礫器・チョッパー（第40図6）

第40図6は安山岩製で、角礫もしくは亜角礫を素材とし、分割し過熱した後、表面の右縁辺に調整加工が見られる。下部は調整加工の後に使用したとき、もしくは全体の長さを規制する為に調整したため、いずれのときかわからないが、欠損している。

#### 剥片（第40図2）

第40図2は流紋岩製で、亜角礫もしくは角礫を素材とし、正面右側上部に調整が見られる。最終的には打面調整再生が施されている。表面に自然面を残す。

#### 石核（第40図1、3、4）

第40図1はシルト岩製で、角礫もしくは亜角礫を素材とし、打面を固定し、作業面を回しながら長幅比2:1縦長の剥片を数回剥離している。特に目立った作業面調整は見られない。角柱状の形態を呈する石核である。3はチャート製で、角礫もしくは亜角礫から剥離した中形の幅広の剥片を素材とし、平坦な縁辺から求心的に表裏面ともに、長幅比1:1前後の剥片を剥離し、三角形で扁平な形態を呈する石核である。また、正面上部に調整加工が見られることから、その後に、スクレイパーに転用したものと思われる。4は黒色黒曜石製で、小打面から剥片を剥離した後、打面・作業面転移を行い、平坦面から小型の幅広剥片を剥離している。残核はやや扁平で平面長方形な形状をしている。5はチャート製で、角礫もしくは亜角礫を素材とし、求心的に表裏面ともに、長幅比1:1前後の剥片を剥離し、亀甲状の形態を呈する石核である。その後、スクレイパーに転用したものと思われる。

## （2）縄文時代早期の剥片剥離法

剥片剥離作業過程の途中や最終段階で廃棄された残核だけでは、作業全体を復元するのは困難である。しかし、出来得る限りの観察を行うことで一部分ではあるが作業過程の情報を得ることができると考えた。

石核と個体別番号を対比しながら縄文時代早期の剥片剥離法を見ていきたい。なお分類するにあたり、これらの類型にとらえられないものもあり、すべての石核を網羅したわけではないことを断っておく。石核を形態的に分類すると次の通りである。

A1：剥片を素材とし扁平な板状の長方形を呈し、大きさは5×3cmである。平坦な縁辺から打面転移を繰り返しながら、表裏共に求心円状に幅広の剥片を剥離している（第38図1）。

A2：剥片素材で、大きさも1類とほぼ変わらないが打面がさきの剥離作業の打撃方向に対してほぼ直交あるいはその裏側の位置に転移するもの（第37図16、17、18）。

B1：亜角礫もしくは角礫を素材とし、両面加工をするように、ほぼ直角に数回打面転移を繰り返し、交互剥離状の剥離痕をとどめる。求心円状に幅広の剥片を剥離している（第38図2）。

B2：亜角礫もしくは角礫を素材とし、両面加工をするように、打面転移を繰り返し、その方向は一定ではない交互剥離状の剥離痕をとどめる。求心円状に幅広の剥片を剥離している（第40図3、5）。

B3：同じ礫素材だが、ほぼ垂直に近い打角で、同一方向の打撃を加えて剥片を剥離し、打面がさきの剥離作業の打撃方向に対してほぼ直交あるいはその裏側の位置に数回転移するもの。形はサイコロ状になるもの（第40図1）。

この中でB3は、シルト岩で他はすべてチャート製である。これらに該当する石核の個体別番号は、A1は16、A2は11、21、B1は10である。その他は単体の個体として判断し、個体番号を省略した。A1は、福岡県の柏原遺跡で出土した石核分類のⅡc類に似ている可能性がある。

参考文献

山崎純男『柏原遺跡』I 福岡市教育委員会 1983

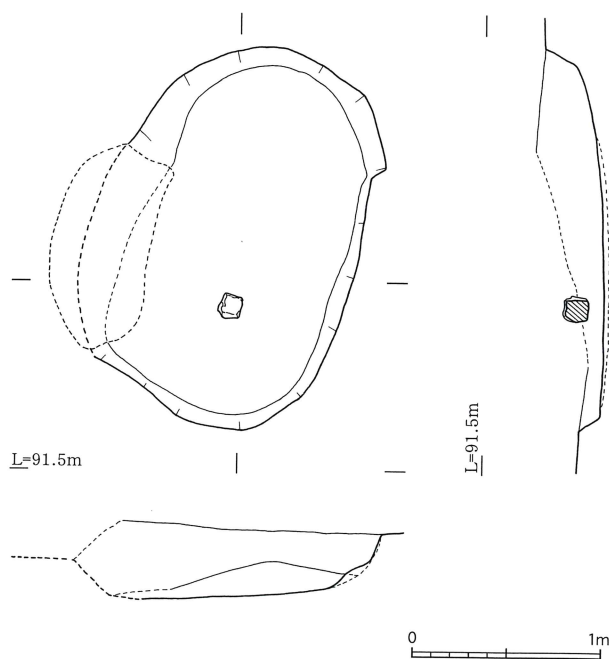
## 第4節 中世・近世の遺構と遺物

### (1) 遺構

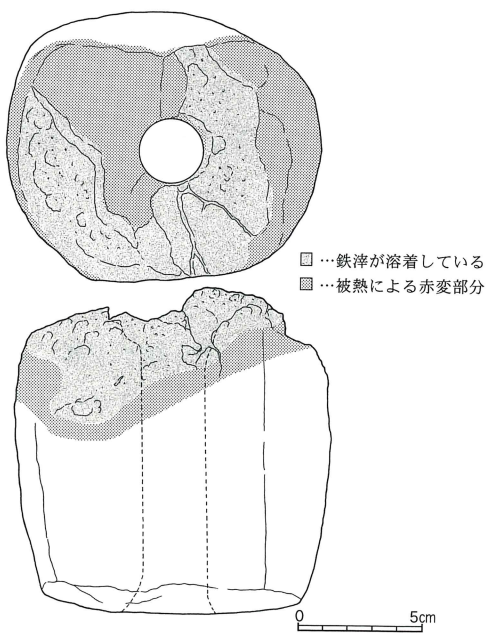
遺構は土坑が一基、調査区の東側のB4区～C4区にかけて検出された。大きさは2×1.62mで楕円形をなす。深さは約40cmを測り、一部、根の攪乱を受けている。埋土の中から親指大の炭が大量に出てきた(第41図)。遺物は鞆羽口が出土している。石材は凝灰岩製で大きさは縦11cm、横13cm、高さ13cmを測る。口の部分は鉄滓が溶着しているのと、被熱による赤変部分が見られる。時期は出土した遺物から近世と思われる(第42図)。

### (2) 遺物(第43図)

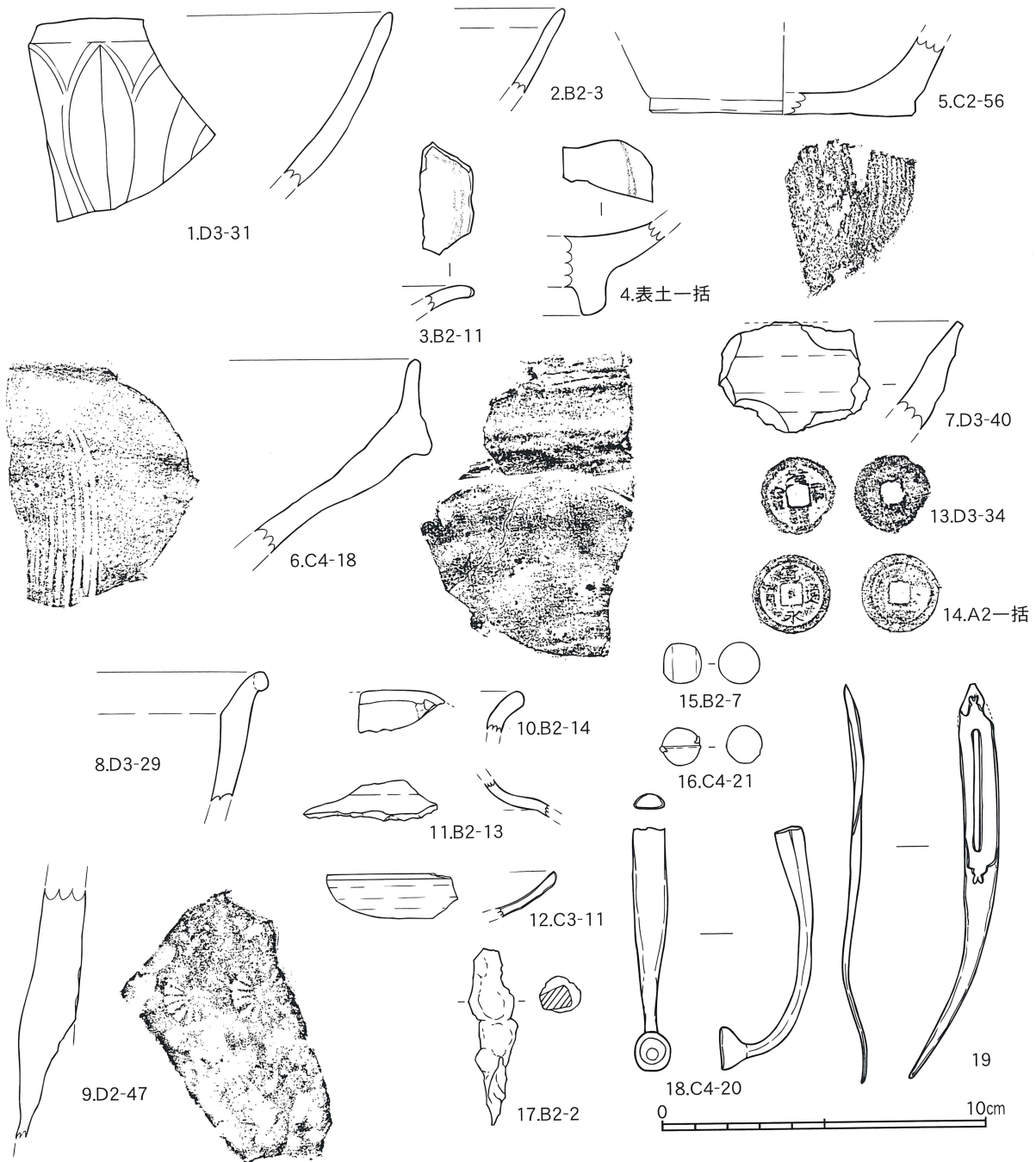
1は龍泉窯青磁椀口縁部片で11世紀後半から12世紀前半の太宰府分類のI-5-C類である。2は龍泉窯青磁椀口縁部片である。3は龍泉窯綾花皿口縁部片で口縁部が大きく外反し、端部には抉りが入る。4は龍泉窯青磁椀底部片で13世紀後半から15世紀のものと思われる。5は土師質土器で、回転糸切り。6は備前の摺鉢。7は土師質土器の口縁部。8は瓦質土器鍋の口縁部。9は瓦質の火鉢。10は須恵質の醤油瓶の口縁部。11は10と同一個体と思われる。12は産地不明の近世陶器で、外面に貫入の多く入った、透明釉をかけている。後期以降の製品と思われるが、詳細は不明。13は1086年初鑄の篆書体の元佑通寶である。14は寛永通寶で新寛永通寶である。15・16は鉛の鉄砲玉で直径は11.8mmであることから、弾丸の径と銃の口径との割合の玉割は二匁五分玉であると思われる。17は鉄製の角釘である。18は青銅製のキセルで雁首の脂返しの部分に使用痕が見られる。



第41図 1号土坑実測図(1/40)



第42図 1号土坑出土遺物実測図



第43図 中世・近世遺物出土実測図

古泉編年のI期に相当すると思われる。19は青銅製の笄で、上部から中部にかけて、金をメッキしていることから、髪のかきあげ道具として使用されたものが、装飾化して簪になったと思われる。

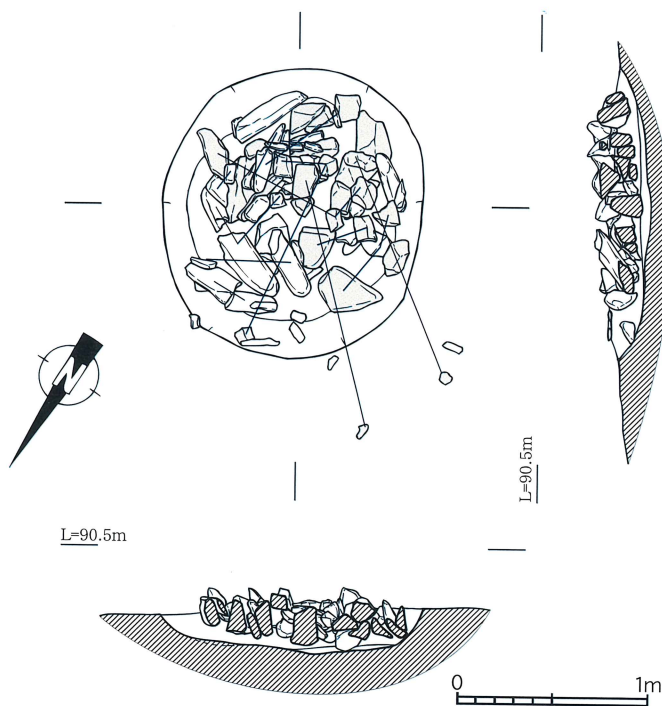
参考文献

- 横田賢次郎・森田 勉 「大宰府出土の輸入中国陶磁器について—型式分類と編年を中心にして」  
『九州歴史資料館研究論集』4 1978  
所 莊吉 『図解古銃事典』雄山閣 1998  
古泉 弘 「江戸の街の出土遺物」『季刊考古学』第13号 雄山閣 1985

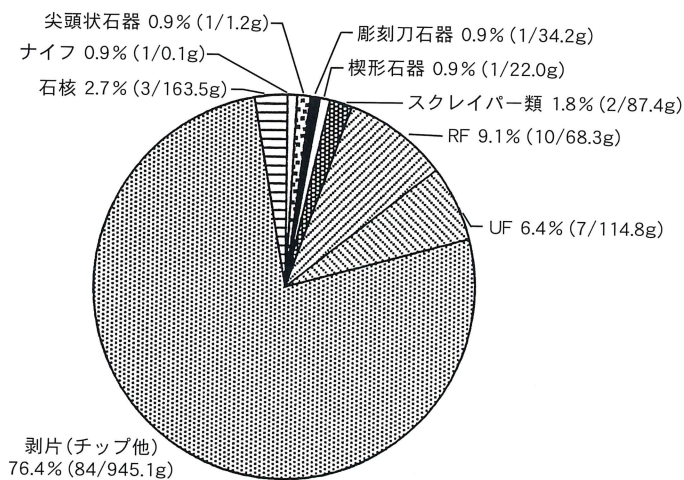
## 第5章 まとめ

下ノ山遺跡の第4層から第5層までが後期旧石器時代、第2層が縄文時代早期となり、それぞれ遺構・遺物が確認された。下ノ山遺跡では一部中・近世の遺構・遺物が確認されたものの、旧石器時代と縄文時代早期が主たるものであることがわかった。同様な時期の周辺で調査された遺跡は白杵市大字吉小野の東台遺跡があり、同遺跡出土の遺物を比較しながらまとめにかえたい。本遺跡で利用されている石材は、流紋岩類、阿蘇系黒曜石、チャート、姫島産黒曜石、姫島産ガラス質安山岩、その他の黒色黒曜石、結晶片岩類などがある。流紋岩は大野川流域から、ホルンフェルスは奥嶽川流域などから、チャートは白杵南東部方面から持ち込んできたものと推定される。結晶片岩は、佐賀関半島産のものを持ち込んできたものと考えられる。その他の砂岩、泥岩等は大野川層群のものと考えられ、この地域には普遍的なものである（註1）。大分県の縄文時代早期の利用石材の変遷

は早期前葉・中葉では姫島産石材及びチャートは原産地との「距離の差がそのまま遺跡での需要の差にあらわれるとみることができ」（註2）早期後葉・前期初頭では「姫島産黒曜石の全石材中で占める割合も高くなる」（同）とあるが、下ノ山遺跡についても、この考えは矛盾しないようである。



第44図 1号集石炉石材分布図(スミ部分は砂岩)



第45図 旧石器時代器種別百分率

### (1) 旧石器時代

#### 遺構について

本遺跡では集石炉が1基確認できた。その他、細かい礫が分布していたが、これといった集石遺構などは確認できなかった。AT下位から検出した集石炉は結晶片岩や千枚岩、砂岩を利用している。検出した付近には焼土などは見られず、炭化物が付着している。1点、1点礫を確認してみたが加工等は見られなかった（第44図）。第8図の垂直数量分布図から見た場合、集石炉の検出したレベルよりも約10~20cmのところに出土遺物のピークが見られる。

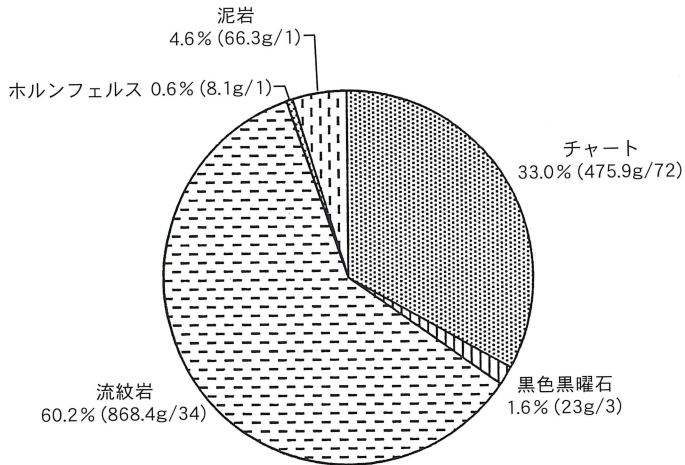
#### 石器について

下ノ山遺跡の後期旧石器時代の石器組成は、個体識別の結果、確実な攪乱層出土分も含めると、ナイフが1点、尖頭状石器1点、彫器様石器1点、楔形石器1点、スクレイパー類2点、RF（2次加工ある剥片）10点、UF（使用痕ある剥片）7点、剥片類84点、石核3点である（第45図）。全体的に成品が多いとはいえない。石材は、点数

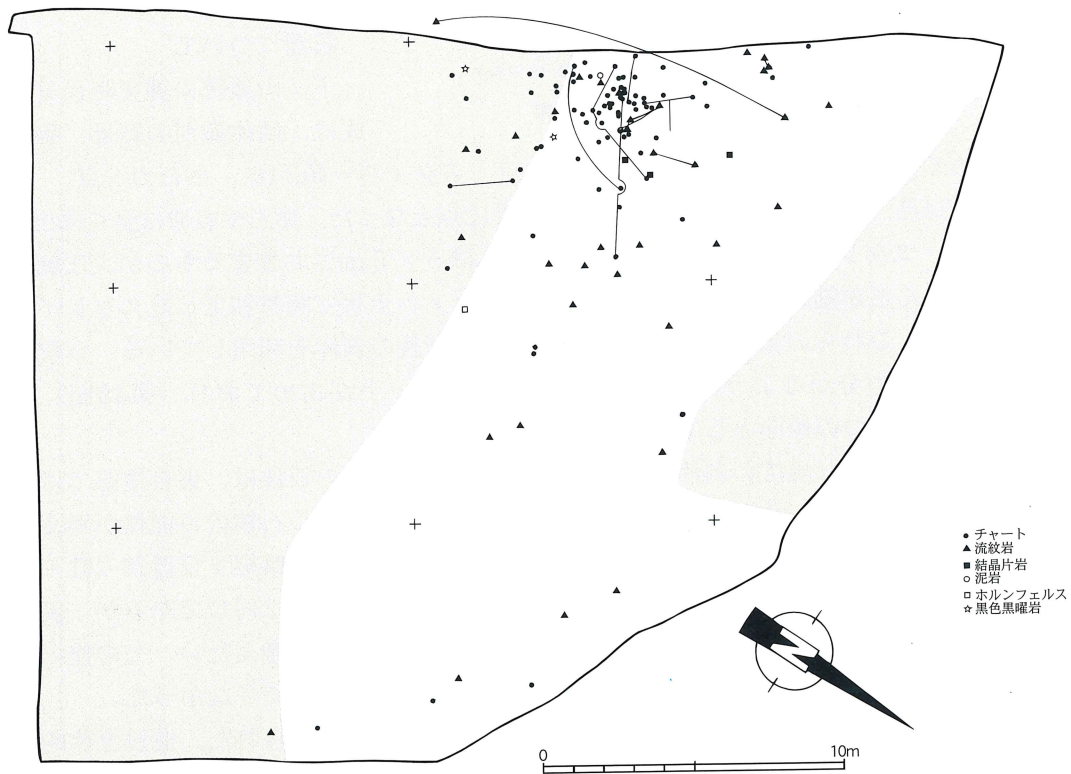
ではチャートが多く、重量で見ると流紋岩が多いことがわかる。チャートが量的に少ないのは、石材が摂理で割れやすく、細かいものが多いことが、その理由にあげられるであろう。チャート類の成品が多いとはいえないが、主に分割した横長剥片を素材剥片として利用している（第46図）。AT下位の流紋岩類は、34点と出土量が多いものではないが、百枝遺跡の第Ⅲ文化層（註3）駒形古屋遺跡第Ⅳ層（註4）、駒形津室迫遺跡（註5）の剥片剥離技術に対し、①打面調整が顕著ではないこと。②主要剥離とほぼ同方向と直行方向からなる剥離作業面をもつ不定形な横長・小さい幅広剥片が多い。すなわち大剥離面の剥離方向では一致するものとそうでないものとの二つの剥離方向があったと考えられること。③成品、使用痕のある剥片、2次加工のある剥片は素材剥片として

縦長・横長剥片を利用しているがばらつきがある。④瀬戸内技法は全く見られない。以上のことから駒方古屋遺跡から百枝遺跡第Ⅱ文化層の間に位置するのではないと思われる。

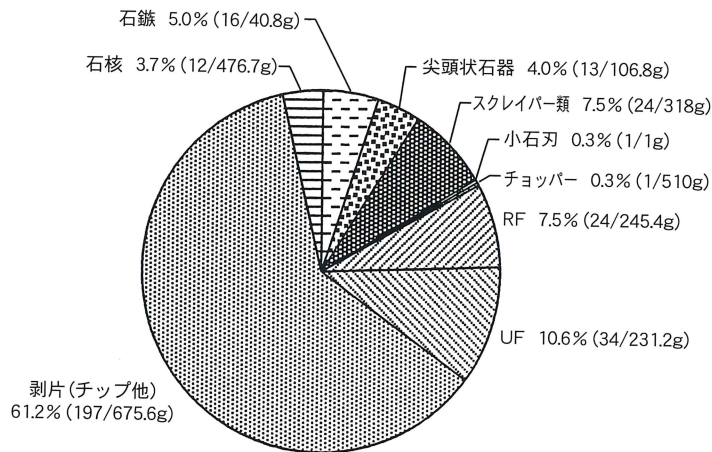
東台遺跡の旧石器時代の遺物は6点と量的に少ない（註6）。その内訳は、九州形ナイフ形石器1点、削器1点、石核1点、剥片3点で、削器のサヌカイト質安山岩以外はすべて、無斑晶流紋岩である。ナイフ形石器と、削器は縦長剥片を利用している。



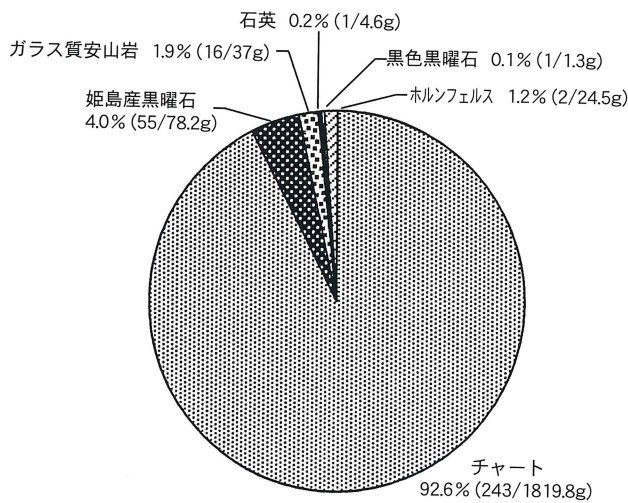
第46図 旧石器時代石材重量別百分率



第47図 旧石器時代石材別分布図



第48図 縄文時代早期石器器種別百分率



第49図 縄文時代早期石材重量百分率

出土分も含めると、石鏃が16点、尖頭状石器13点、スクレイパー類24点、小石刃1点、チョッパーが1点、RF 24点、UF 34点、剥片類197点、石核12点となった。磨石や石皿は全く検出できなかった(第48図)。スクレイパー類などの成品の大きさは5×5cmにおさまるものが、圧倒的に多い。その調整のほとんどが細かく施したものが多く、またノッチ状に調整加工したスクレイパー・RFなども見られる。これらの素材には不定形かつ幅広・縦長の剥片を利用している。石材は石材重量から見た百分率でも分かるように、9割弱の割合でチャートが占めており(第49図)、同時期における石材利用の一つの傾向としてとらえられる。

剥片を素材とし小さな幅広の剥片を剥離したと思われるA類の石核は、東台遺跡ではチャートの石核が確認されなかったため剥片剥離等の詳細は不明である。同じ石核の可能性が考えられる類例は他に福岡県柏原遺跡(註7)、熊本県無田原遺跡(註8)、奈良県桜ヶ丘遺跡(註9)などで、いずれも縄文時代早期に比定されている。当遺跡の場合は時期的には同じであるが、剥片剥離技法等はそれを証明できる接合資料が無いのであくまでも可能性として考えたい。その他の姫島産黒曜石・ガラス質安山岩などは、成品・剥片は見られたが、石核は確認できなかった。

被熱した石器は旧石器には若干見られたが縄文時代早期に多く見られた。遺跡全体的に分布している(第51図)。

## (2) 縄文時代早期

### 遺構について

本遺跡では集石炉が2基確認できた。使用された石材は旧石器時代のものとは違い、砂岩を主に利用した2号と、珪化泥岩の角礫を利用した3号が見られる。集石炉の検出したレベルよりも約20～30cmのところに出土遺物のピークが見られた。

### 土器について

本遺跡の縄文時代早期の土器は、山形文土器、楕円文土器の押形文土器が少なく、主体を無文の厚手、薄手の土器が88.8%と圧倒的に無文土器が使用されていた事が分かる。出土量が違うため比較するには多少の誤差を考慮しなければならないが、近辺で調査された東台遺跡では約90%以上(註6)見られることから、時期的には同遺跡と同時期と思われる。無文土器には東台遺跡のようなコブ状の突起は検出できなかった。

### 石器について

下ノ山遺跡の縄文時代早期の石器組成は、個体識別の結果、確実な攪乱層

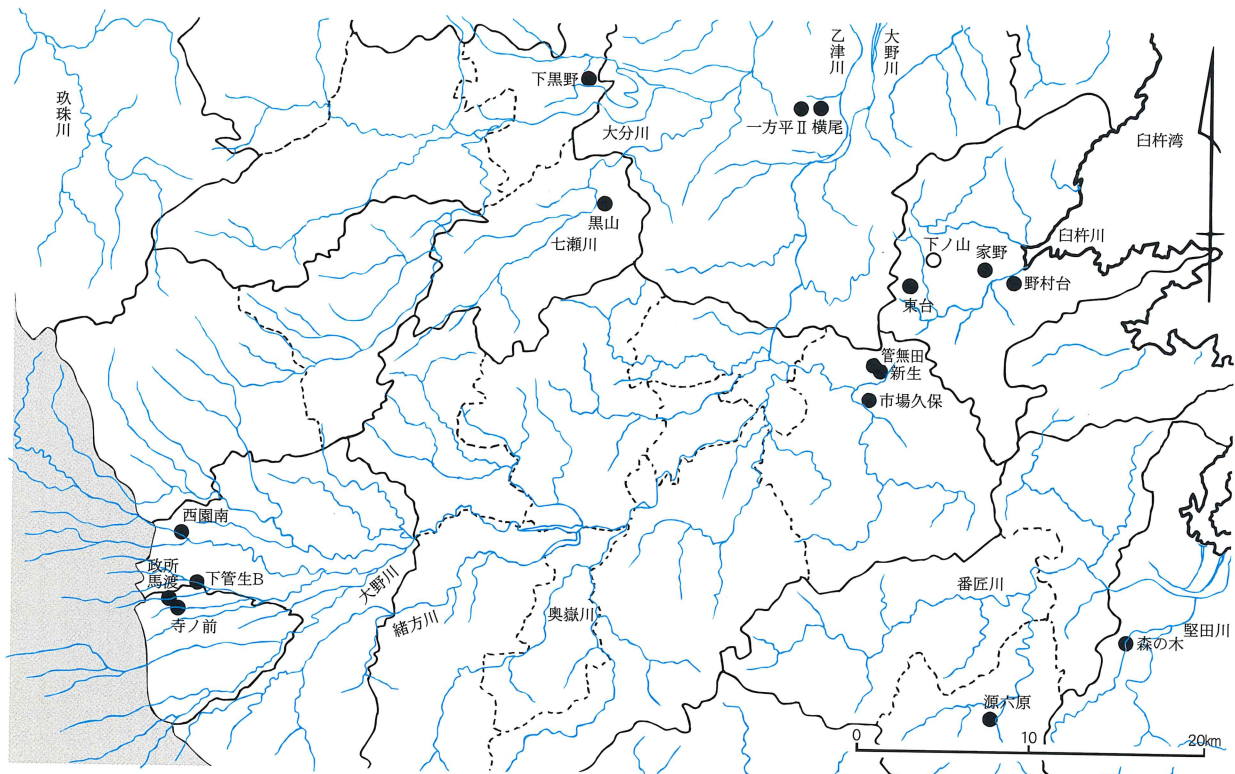




第50図 縄文時代早期石材別分布図



第51図 被熱石器分布図



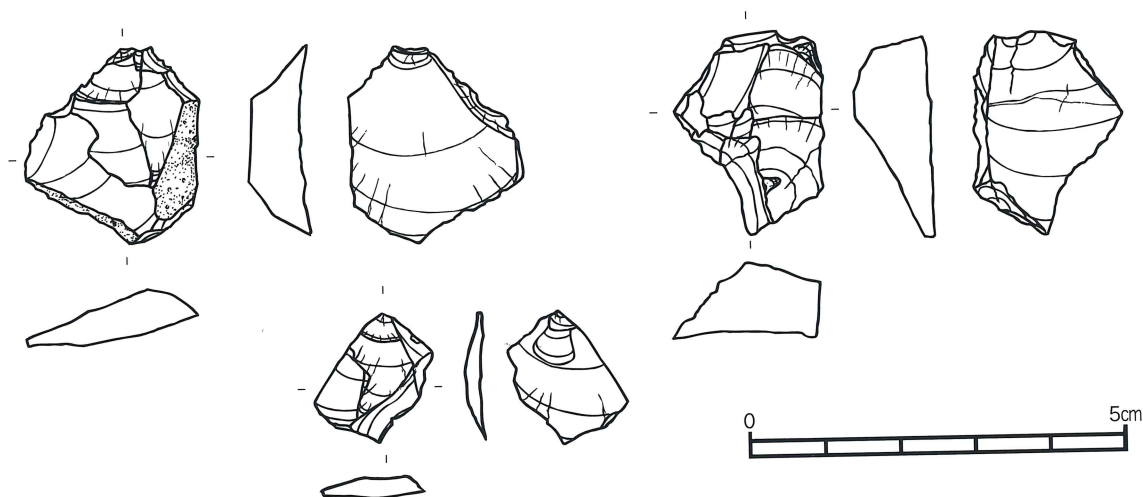
第52図 縄文時代早期県南遺跡分布図 実線は郡市境、破線は町村境(参考文献「大分県の地名」平凡社 1995年より一部改編)

東台遺跡に於ける縄文時代早期の石器組成は、石鏃3点、尖頭状石器7点、搔器・削器4点、RF15点、彫器2点、石核1点、凹石1点、磨石・敲石2点、礫器2点、剥片75点である。成品の素材はほとんどが横長(幅広)・不定形剥片で、大きさは本遺跡同様5×5cmにおさまるものが多い。また本遺跡でも見られる小型の石鏃が出土している。出土量の関係もあるので単純に比較はできないが、全遺物112点中、チャートの占める割合は86点、約77%である。石器に利用されたチャートは、報告書を見る限りでは節理のあまり多くないものを利用しているようである。下ノ山遺跡では旧石器の層から1点だが、阿蘇系のもと思われる、全体がかなり風化している黒曜石が見られた。東台遺跡では、縄文時代早期だが、実測掲載分の石核1点を含めて、他に剥片が3点(8g)ほど見られる(第53図)。石核の大きさは本遺跡とほとんど変わらない。

東台遺跡ではチャートが石器の素材、また単なる集石材として持ち込まれたかは不明であるが、ほとんどが節理が多いものと、本遺跡では見られなかった赤色チャートなどの礫が多い事に気が付いた(12点、1695.7g)。それは遺跡の西側に原礫層が存在することがその理由に挙げられるだろう。下ノ山遺跡のチャートの礫は節理が少なく、拳大で63.3gである。石英は下ノ山遺跡のものよりも4点、364.5gと重量的にも多く見られる。その他の礫は、砂岩、安山岩、結晶片岩、緑泥片岩、泥岩、珪化泥岩等で、これらの石材は、本遺跡と同様に見られる傾向にある。砂岩は被熱しているものも見られた。

### (3) 遺跡の性格

旧石器時代・縄文時代早期遺跡の性格を考える上で、遺跡の立地の環境等、石材の搬入、搬出も考慮に入れたうえで、遺跡の機能差の違いに注意する必要がある。下ノ山遺跡は、狭い阿蘇火砕流台地に位置し、東西方向は見晴らしが良く、南北は谷地形になっている。



第53図 参考資料・東台遺跡剥片実測図(未報告)

本遺跡は石材中継地遺跡で、遺跡外で加工した成品、または原石・石核・剥片剥離した素材剥片を他の地域から持ち込み、剥片剥離・石器製作を行っている(註10)。縄文時代早期の遺跡の性格には、オーバールックサイト、短期滞在型キャンプ、長期定住型キャンプ、原石産地遺跡があり、これらが複合した様々な形で出てくることが予想される(註11)。本遺跡周辺の地形が見晴らしが良いこと、集石炉の数があまり多くないことや、定住したと思われるような石皿や磨石などがでていないことから、オーバールックサイト、短期滞在型キャンプを兼ねていたのではないかと思われる。

最後に当遺跡の報告書を作成する当たり、多くの方々の御教示と助言をいただくことができました。末尾ではありますが、感謝を申し上げます。(野崎)

(註)

(註1) 野田雅之氏にご教示を賜った。

(註2) 清水宗昭「姫島産黒曜石とガラス質安山岩の分布について」『賀川光夫先生還暦記念論集』賀川光夫先生還暦記念会 1982

(註3) 清水宗昭・栗田勝弘編『百枝遺跡 C地区』三重町教育委員会 1985

(註4) 橘 昌信『駒方古屋遺跡』別府大学付属博物館 1983

(註5) 橘 昌信『駒方津室迫遺跡』別府大学付属博物館 1993

(註6) 清水宗昭ほか『東台遺跡』臼杵市教育委員会 1974

(註7) 山崎純男編『柏原遺跡』福岡市教育委員会 1983

(註8) 木崎康弘編『無田原遺跡』熊本県教育委員会 1995

(註9) 松藤和人編『二上山・桜ヶ丘遺跡』奈良県立橿原考古学研究所 1979

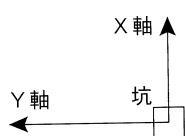
(註10) 安蒜政雄「岩宿時代石器群の時代と地域—石器群の特徴・編年・地域性と文化の動態」『岩宿時代を知る』笠懸町教育委員会 1995

(註11) 綿貫俊一編『古城山』大分県教育委員会 1995

第13表 全個体別一覧表

個体番号	遺物番号	重さ(g)
1	C2-11,14,23,28,67,75,77,80,84,94,102,104,105,106,109,120,133,138,139,147,153,158,173,217,219,222,257 C-3-105 D2-52	232.1
2	C2-74,78,100,103,110,121,129,131,137,140,141,150,151,152,154,157,159,160,161,162,164,165,166,168,183,216,220,229,236,246,248,249,250,251,252,253,255,256,259,260,261,263,264 C3-99 C4-13 D2-65	208.7
3	B2-98,C4-1	104.3
4	B4-19 C2-117,132,228	113.7
5	C2-119 C3-72 D2-57,72	30.1
6	C2-262,293 C3-101 C4-8 D2-25,28	206.1
7	C2-53,123,124,125,130,149,232,284,289 C3-68,69,74 C4-11 D2-1,2,34,36,63	320.3
8	A4-3 表土-11	12.5
9	C2-221,230,231	81.4
10	C2-7,12,20,41,72,95,280 C3-49,52,55,65,83 D2-18 表土-7	148.6
11	B2-6,83 C2-31,42,46 C3-46	79.4
12	A2-2 A3-3 B2-4,67,95 B4-6,10 C2-13,45,108,276,287 C3-20,24,84 D2-4,19,23,31,32 D3-9,10 不明-5	52.4
13	A2-7 B2-23,33 C2-50,70,290 C3-13,71 C4-2 D2-5,12,17,22,70,71 表土-3	84.2
14	A2-1 A3-2,5 B2-49,59,62 B3-1,13 B4-3 C2-4,18,27,37,44,47,49,57,113,277 C3-22,25,41,45,107 D2-10,11,20,73 D3-4,6,8 表土-1	241.8
15	B3-12 C3-11,64	21.5
16	B2-25,74 C2-15,38 C3-38,44,57,98 D2-67	55.5
17	C2-25,274	25.7
18	B2-79 B4-1,8	44.2
19	C2-92 D2-7,21,53	26.7
20	B3-3 D3-18,19,36	41.9
21	C3-36,66	27.5
22	C3-16,100 表土-12	29.5
23	C2-86 C3-40	18.7
24	B2-14 C3-10,28	24.8
25	C3-62 D3-20	34.4
26	C2-33,56 D2-8	19.3
27	B4-4,11,13	5.6
28	B2-11,18,32,48,54 B3-4 C2-24,29,39,48,51,62,90,279,283 C3-30,106	86
29	C2-43,288 C3-21 不明-6	25.3
30	B2-27,82,96 表土-10 不明-4	15.8
31	B2-10,58,69,90 C2-81,89,282 C3-5,17,19,29,47,56 D2-13 D3-5	72.2
32	A3-1,4 B2-20 B3-6 C2-10,32,36,54,65,85,127 C3-1,18,26,58,97 D2-68	169.5
33	A2-6 B2-16 C2-5,71,112,258,281 D2-35	37.7
34	B2-7,8	13.2
35	B3-5 C2-68 不明-3	8.5

○下ノ山遺跡石器観察表について



第54図 座標設定図

1. 遺物の計測については第19図に準じた。
2. 個別番号は旧石器から縄文早期の順に付けている。
3. 座標のX軸・Y軸の方向については、第54図に図示した。
4. 接合資料番号は縄文早期から旧石器時代の全ての遺物に時代に関係なく通し番号を付けた。
5. 遺物一覧表の石材の略記は次の通りである。  
 An : 安山岩 Andesite、GAn : ガラス質安山岩 Glassy Andsite、Da : 石英安山岩 Dacite、  
 Ch : チャート Chert、Hf : ホルンフェルス Hornfels、Rh : 流紋岩 Rhyllite、  
 BOB : 黒色黒曜石 Black Obsidian、HOb : 姫島産黒曜石 Himesima Obsidian、  
 Sa : 砂岩 Sandstone SSh : 珪質頁岩 : Silicified Shale、Tu : 凝灰岩 Tuff、Qu : 珪岩 Quartzite、  
 Qz : 石英 Quartz Rc : 水晶 Rock crystal Gr : 花崗岩 Granite、Sh : 頁岩 Shale、  
 Si : シルト岩 Siltstone、SSi : 珪化シルト岩 Silicified Siltstone、Mu : 泥岩 Mudstone、  
 SMu : 珪化泥岩 Silicified Mudstone、Bs : 黒色片岩 Black schist、Ms : 雲母片岩 Mica schist、  
 Ph : 千枚岩 Phyllite Gs : 緑色片岩 Green schist Cs : 緑泥片岩 Chlorite schist、  
 Crs : 結晶片岩 Crystal schist、Co : 礫岩 Conglomerate
6. 遺物一覧表の石器器種、土器の略記は次の通りである。  
 Ah : 石鏃 Stone arrowhead、Bl : 石刃 Blade、Br : 彫器様石器 Burin、Ch : 碎片 Chip、Cr : 石核 Core、  
 Cho : 礫器 (チョッパー) Chopper Crf : 打面再生剥片 Core rejuvenation flake、  
 DM : 粗割礫 Roughly divided stone material、ES : エンドスクレイパー End scraper、  
 Fl : 剥片 Flake、HS : 敲石 Hammerstone、Kn : ナイフ形石器 Knife-shaped tool、  
 PE : 楔形石器 Pi ce esquille、Po : 土器 Pottery、Pe : 礫 Pebbles、  
 Pt : 尖頭状石器 Pointed tool、Rd : 作業面再生剥片 Rejuvenation debited surface flake、  
 RF : 2次加工ある剥片 Retouched flake、RM : 石器原石 Raw material of lithic artifacts、  
 S : スクレイパー : Scraper、SS : サイドスクレイパー Side scraper、  
 UF : 使用痕ある剥片 Utilized flake、UPt : 尖頭状石器未成品 Unfinished pointed tool
7. Figの項目は遺物の挿図番号を意味する。



















第22表 石器観察表(9)

D3	8	9.7	6.4	90.587	Ch	Fl	3.2	4	1.2	11.9	2層	×	○	14	6		
D3	9	9.04	6.94	90.542	Ch	Fl	(1.25)	1.7	0.4	0.9	2層	×	×	12			
D3	10	9.51	7.35	90.652	Ch	Fl	(1.9)	2.3	0.6	2.4	2層	×	×	12			
D3	11	7.23	6.51	90.317	SMu	Pe	×	×	×	8.6	17層	×	○				
D3	12	6.72	6.56	90.487	HOOb	UF	(3)	2.3	0.7	4.3	17層	×	×				
D3	13	9.7	7.21	90.602	Ch	Ch	1.4	1	0.2	0.1	17層						
D3	14	6.65	5.28	90.007	Ch	Ch	1.65	1.2	0.3	0.4	17層						
D3	15	8.49	6.38	90.407	SMu	Pe	×	×	×	18	17層	×	○				
D3	16	7.19	4.38	90.397	HOOb	RF	2.15	1.75	0.4	1.6	17層	×	×				
D3	17	—	—	—	Ch	Ch	1.7	1	0.3	0.5	17層						
D3	18	9.02	7.53	90.547	Ch	RF	(3)	(2.3)	0.7	5.6	2層	×	×	20	9		
D3	19	6.4	7.27	90.137	Ch	Fl	(3.3)	(2)	0.8	6.2	2層	×	×	20	9		
D3	20	9.54	1.11	90.09	Ch	Fl	(3.85)	(2.2)	1	7.8	17層	×	×	25	1		
D3	21	9.22	0.61	90.055	Mu	Pe	×	×	×	3.1	17層	×	×				
D3	22	4.41	6.06	89.301	X	Po	—	—	—	—	17層						
D3	23	6.3	4.09	89.327	Gr	Pe	×	×	×	3.8	17層	×	×				
D3	24	6.49	3.54	89.51	Mu	Pe	×	×	×	2.8	17層	×	×				
D3	25	7.18	3.86	89.545	Sa	Pe	×	×	×	218.9	17層	○	×				
D3	26	7.56	3.65	89.505	Gr	Pe	×	×	×	5.3	17層	×	×				
D3	27	7.95	3.68	89.426	Sa	Pe	×	×	×	13.4	17層	×	×				
D3	28	6.82	2.65	89.59	X	Po	—	—	—	—	17層						
D3	29	7.8	2.6	89.601	Sa	Pe	×	×	×	70.2	17層	×	×				
D3	30	7.71	1.96	89.439	Sa	Pe	×	×	×	20.2	17層	×	×				
D3	31	8.32	1.97	89.774	Mu	Pe	×	×	×	7.5	17層	×	×				
D3	32	8.86	1.87	89.715	Sa	Pe	×	×	×	76.4	17層	×	×				
D3	33	8.01	0.71	89.58	Mu	Pe	×	×	×	10.2	17層	×	×				
D3	34	7.08	0.95	89.358	Mu	Pe	×	×	×	3.6	17層	×	×				
D3	35	5.19	6.87	89.395	An	UF	5.5	(4.95)	1.2	41	17層	×	×				
D3	36	—	—	—	Ch	RF	3.75	2.9	1.4	13.9	17層	×	×	20		39-20	
D3	37	—	—	—	X	X	×	×	×	×	×						
D3	38	—	—	—	Sa	Pe	×	×	×	13.1	17層	×	×				
表土	1	—	—	—	Ch	Fl	1.6	(2.5)	1.1	3.9	—	×	×	14			
表土	2	—	—	—	HOOb	Fl	(1.35)	1.65	0.4	0.7	—	×	×				
表土	3	—	—	—	Ch	ES	2.65	2.25	0.95	5.2	—	×	○	13		39-10	
表土	4	—	—	—	HOOb	UF	(6.1)	3	0.75	12.8	—	×	×			39-18	
表土	5	—	—	—	Ch	Fl	(2.1)	1.7	0.7	2.2	—	×	×				
表土	6	—	—	—	Ch	Fl	(2.5)	(3.3)	0.5	5.7	—	×	×				
表土	7	—	—	—	Ch	UF	3.5	(4)	1.2	14.8	—	○	×	10		39-17	
表土	8	—	—	—	Gan	Ah	(2.75)	(1.65)	0.5	1.2	—	×	×			39-4	
表土	9	—	—	—	Ch	RF	(4.7)	(4.3)	1	16	—	×	×			39-19	
表土	10	—	—	—	Ch	Fl	(2.1)	(2.1)	0.9	4.1	—	×	○	30			
表土	11	—	—	—	Rh	Fl	(2.8)	2.15	0.73	2.8	—	×	×	8			
表土	12	—	—	—	Ch	Fl	(3.6)	(2.9)	1.2	16.2	—	×	○	22	10		
不明	1	—	—	—	Ch	Fl	(1.7)	1.2	0.3	0.6	—	○	×				
不明	2	—	—	—	HOOb	Fl	1.75	(2.55)	0.6	1.6	—	×	×				
不明	3	—	—	—	Ch	Fl	(1.15)	2.2	0.6	1.4	—	×	×	35			
不明	4	—	—	—	Ch	Fl	(1)	(2.1)	0.9	2.1	—	×	○	30			
不明	5	—	—	—	Ch	Fl	1.35	1.8	0.4	0.9	—	○	×	12			
不明	6	—	—	—	Crs	Pe	×	×	×	113.4	—	×	×				
不明	7	—	—	—	Ch	RF	(3.6)	2.8	1.4	12.6	—	×	×	29			

第23表 接合資料石器観察表

接合資料	番号	機種	石材	長さ	幅	厚さ	重さ(g)	Fig
C3-62+D3-20	1	ES	Ch	4	4.4	2.1	34.4	39-13
C2-37+C3-41	2	ES	Ch	4.7	4.2	1.3	27.2	35-2
C2-293+D2-25	3	Fl	Rh	5.55	3.7	2	20.2	18-6
C2-117+C2-228	4	Fl	Rh	3.6	2.65	2.2	24.1	18-7
C2-221+C2-230+C2-231	5	Cr	Rh	7.8	5.1	25.2	81.5	18-5
C2-47+D3-8	6	Fl	Ch	3.8	3.9	1.15	17.8	37-14
D2-2+D2-36	7	SS	Rh	7.65	5.6	2.01	83.5	15-12
B4-6+D2-32	8	RF	Ch	2.55	3.45	1.2	9.4	36-13
D3-18+D3-19	9	RF	Ch	3.55	3.7	0.8	11.9	36-14
C3-16+表土-12	10	Fl	Ch	4	4	1.2	20.9	37-15
A3-1+A3-4	11	Fl	Ch	3.1	2.1	1.7	10.7	
B2-7+B2-8	12	UF	Ch	3.65	2.3	1.2	13.2	
C2-12+C3-55	13	Cr	Ch	4.25	4.8	1.82	29.6	38-2
C2-145+C2-254	14	HS	Ph	12.5	4.1	2.2	160	18-8
C2-147+C2-219	15	Fl	Ch	2.6	3.65	0.85	8	
C2-216+C2-220	16	UF	Ch	4.1	3.3	1.8	18.6	
C2-150+C2-151	17	Fl	Ch	3.2	2	1.1	7	
C2-75+C2-67+C2-104	18	Fl	Ch	5	3.3	2	20.8	23-2
C2-74+C2-253	19	Fl	Ch	2.6	1.65	0.95	3.1	
C2-121+C2-248+C2-250+C2-256	20	Fl	Ch	3.6	5.95	1.9	22.7	23-1

# 写 真 图 版



下ノ山遺跡遠景(南東から北西、遠方の山は九六位山)



下ノ山遺跡全景(北西から南東)



図版 2



作業風景



1号集石炉検出状況



1号集石炉完掘状況



2号集石炉检出状况



3号集石炉检出状况



3号集石炉断面状况

图版 4



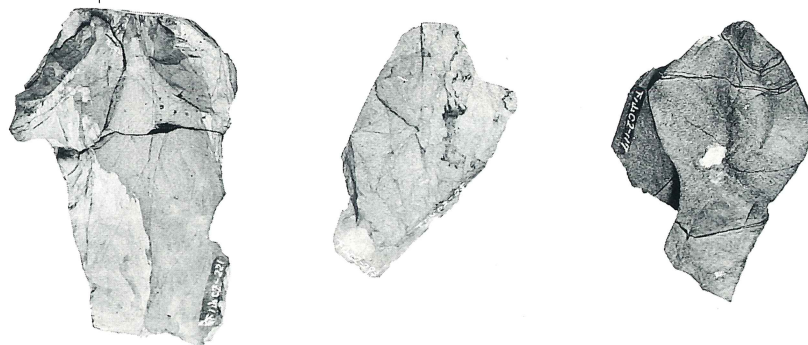
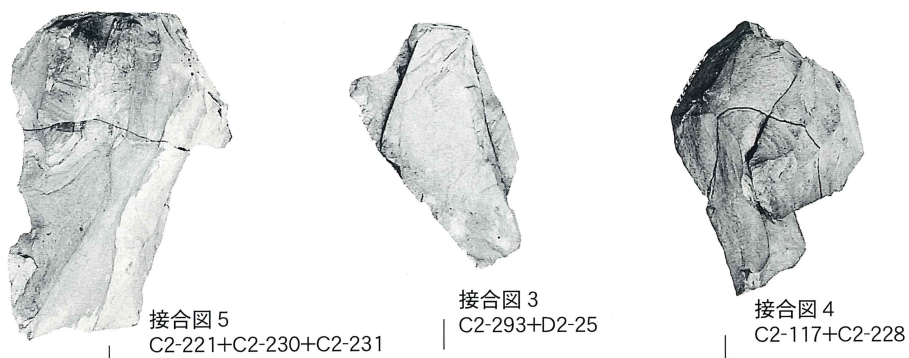
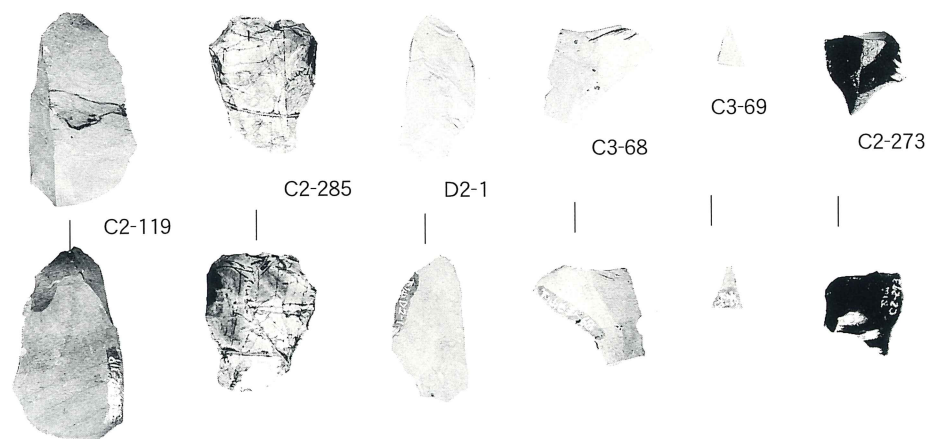
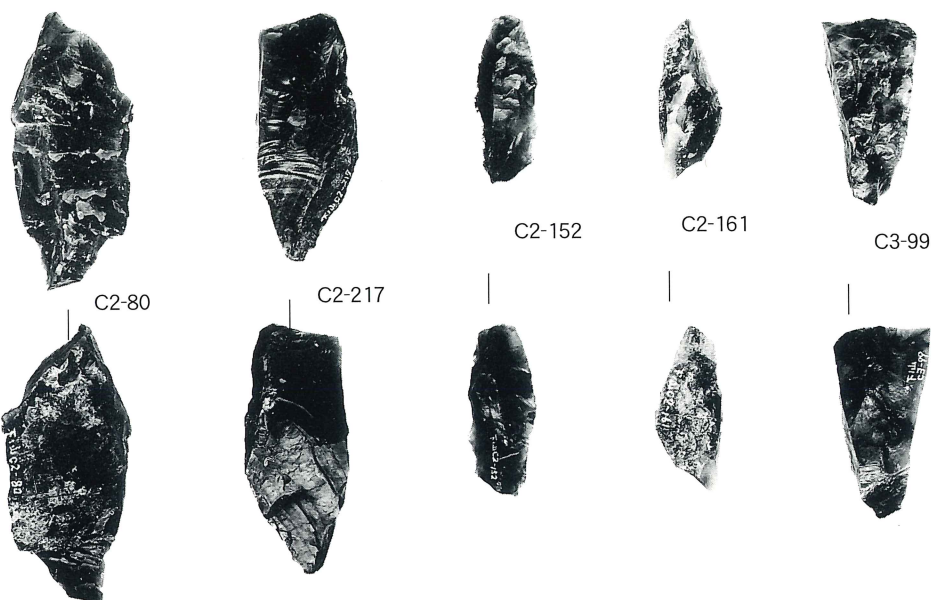
1号土坑検出状況



1号土坑完掘状況



基本土層



旧石器時代 彫器様石器、楔形石器、UF、RF、スクレイパー、石核、剥片

図版 6



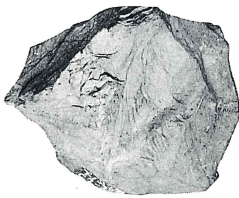
C2-284



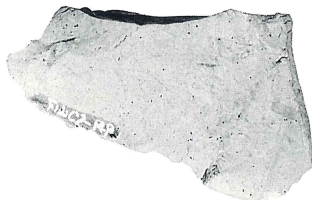
接合図 7  
D2-2+D2-36



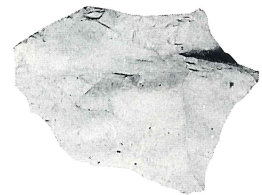
C4-8



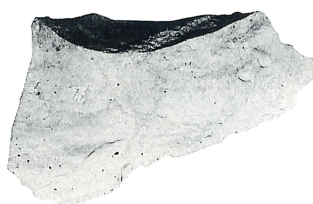
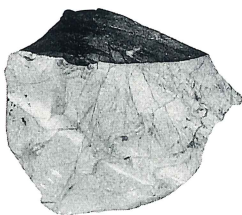
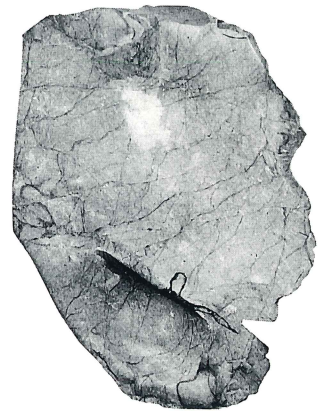
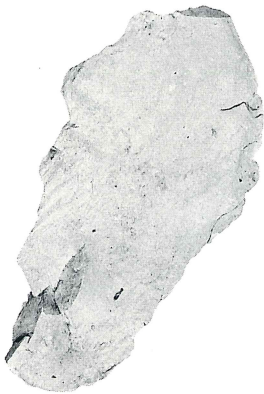
C2-262



C2-149



C2-232



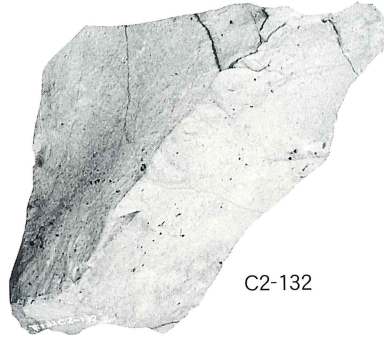
旧石器時代 UF、スクレイパー、剥片



C3-77



C2-107



C2-132



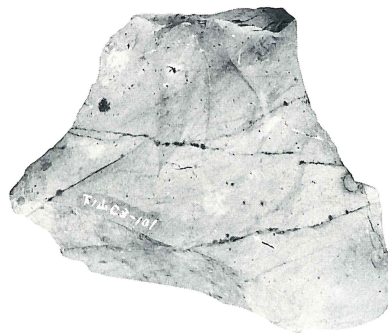
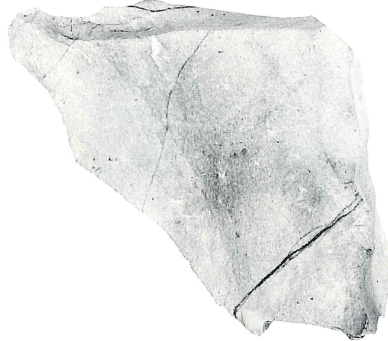
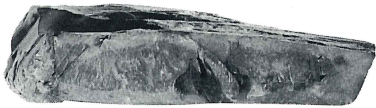
接合図14  
C2-254+C2-145



C2-130



C3-101



旧石器時代 剥片、石核、敲石

図版 8



C2-4



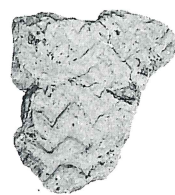
C2-34



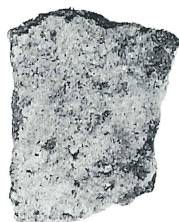
C2-62



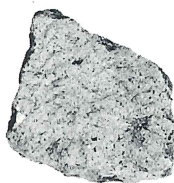
C2-175



C3-51



D2-44



D2-12



D3-34



D2-42



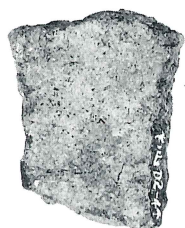
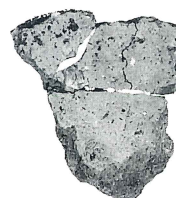
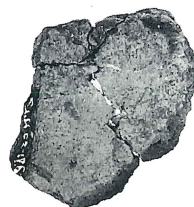
D2-57



D3-51



C4-17



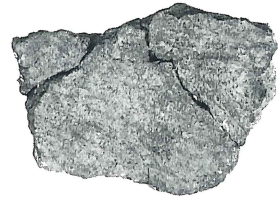
縄文時代早期 押型文土器



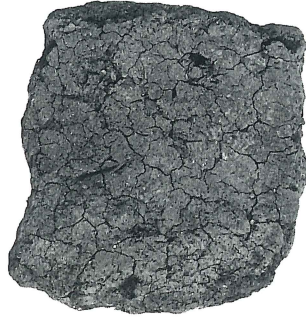
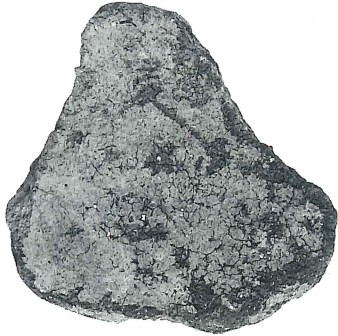
D2-29



C2-151



C2-55



縄文時代早期 条痕文土器、無文土器



C2-22



C2-61



C3-102



C2-60



C3-63



B3-11



C3-14



B2-33



B2-35



C2-52



C3-9



B4-5



B2-12



C2-56



D2-8



A2-括1



D2-16



C3-5



C2-32



C3-8



C2-43



D2-20

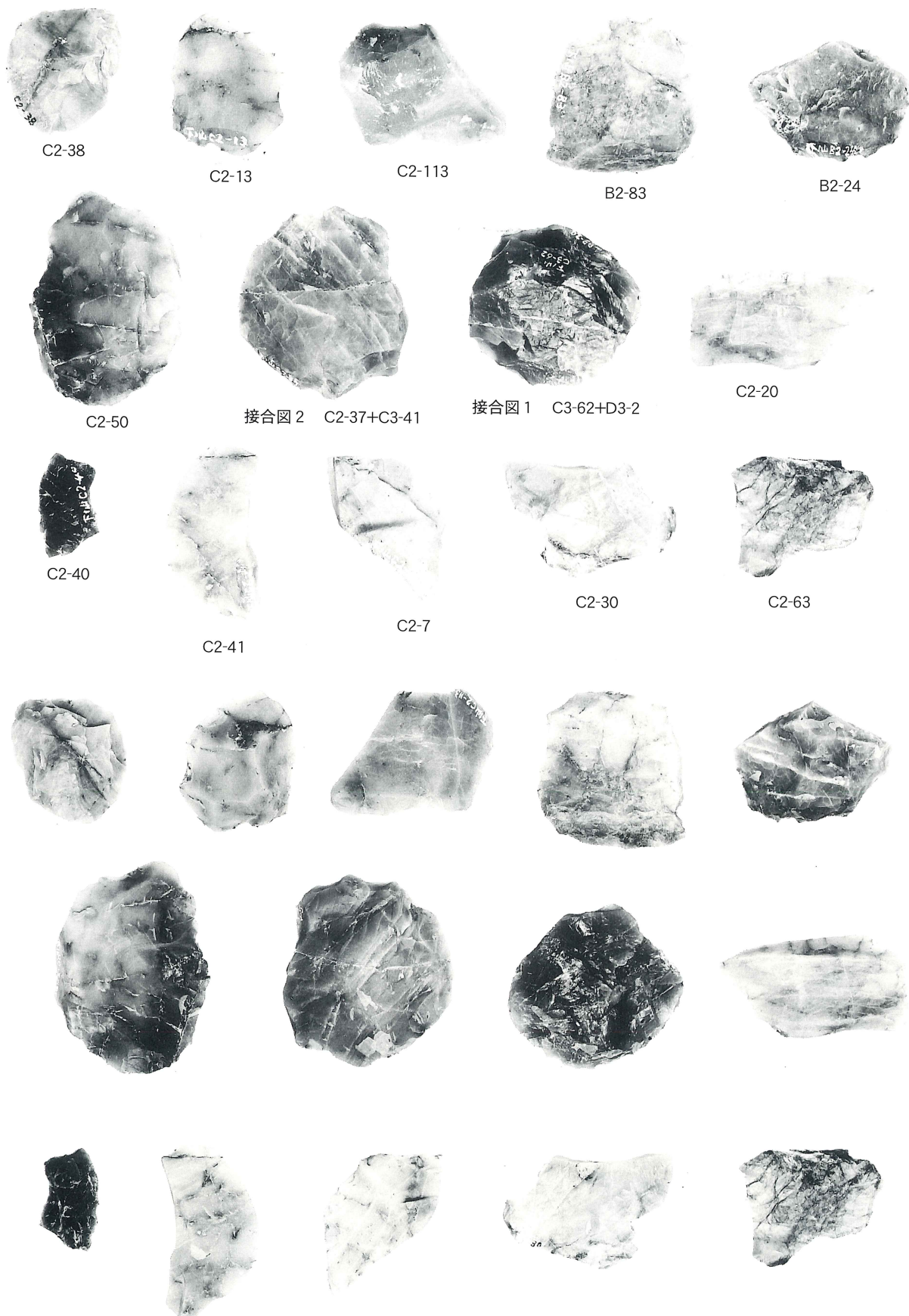


D2-53

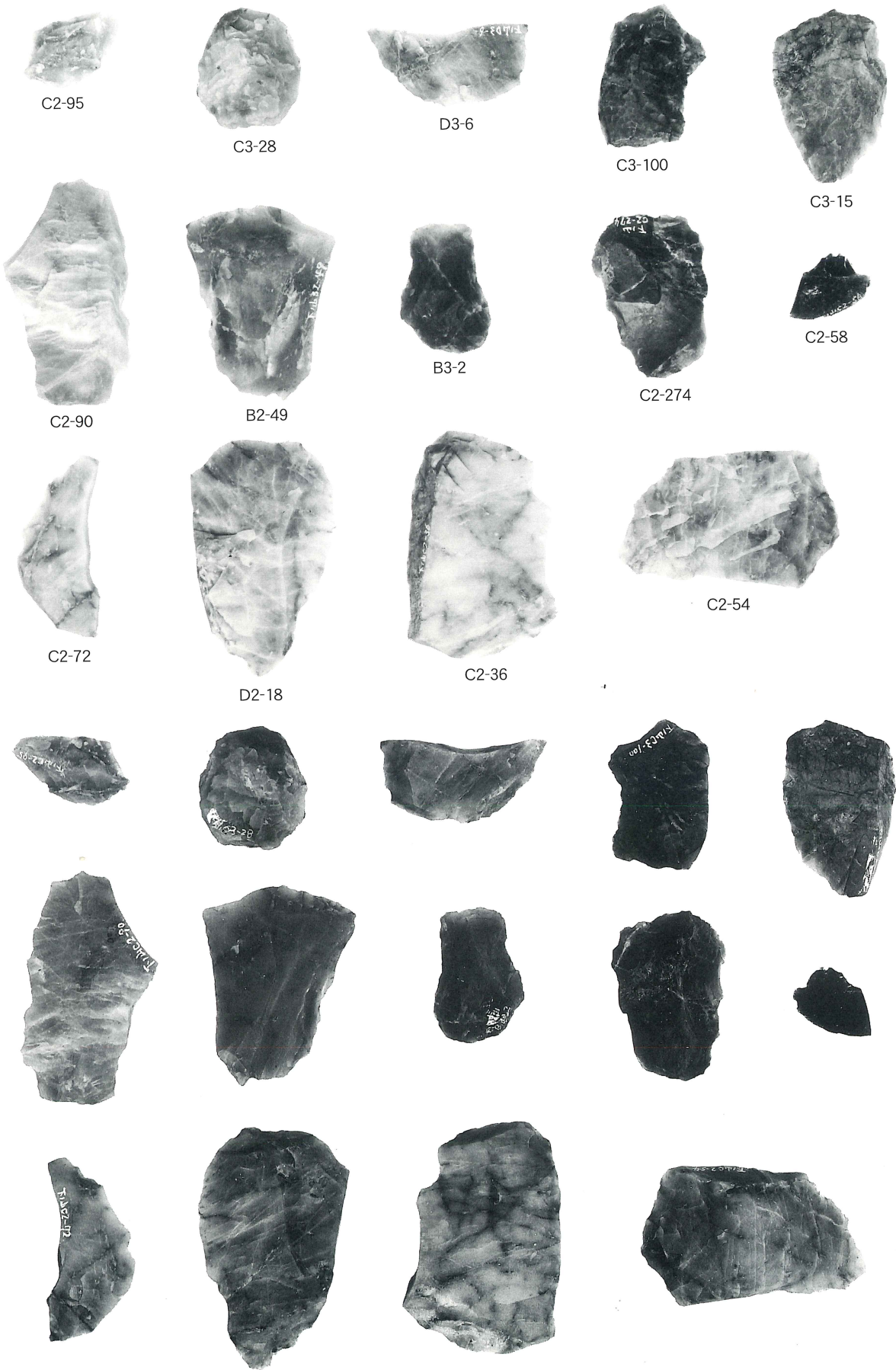
縄文時代早期 石鏃、尖頭状石器



図版10

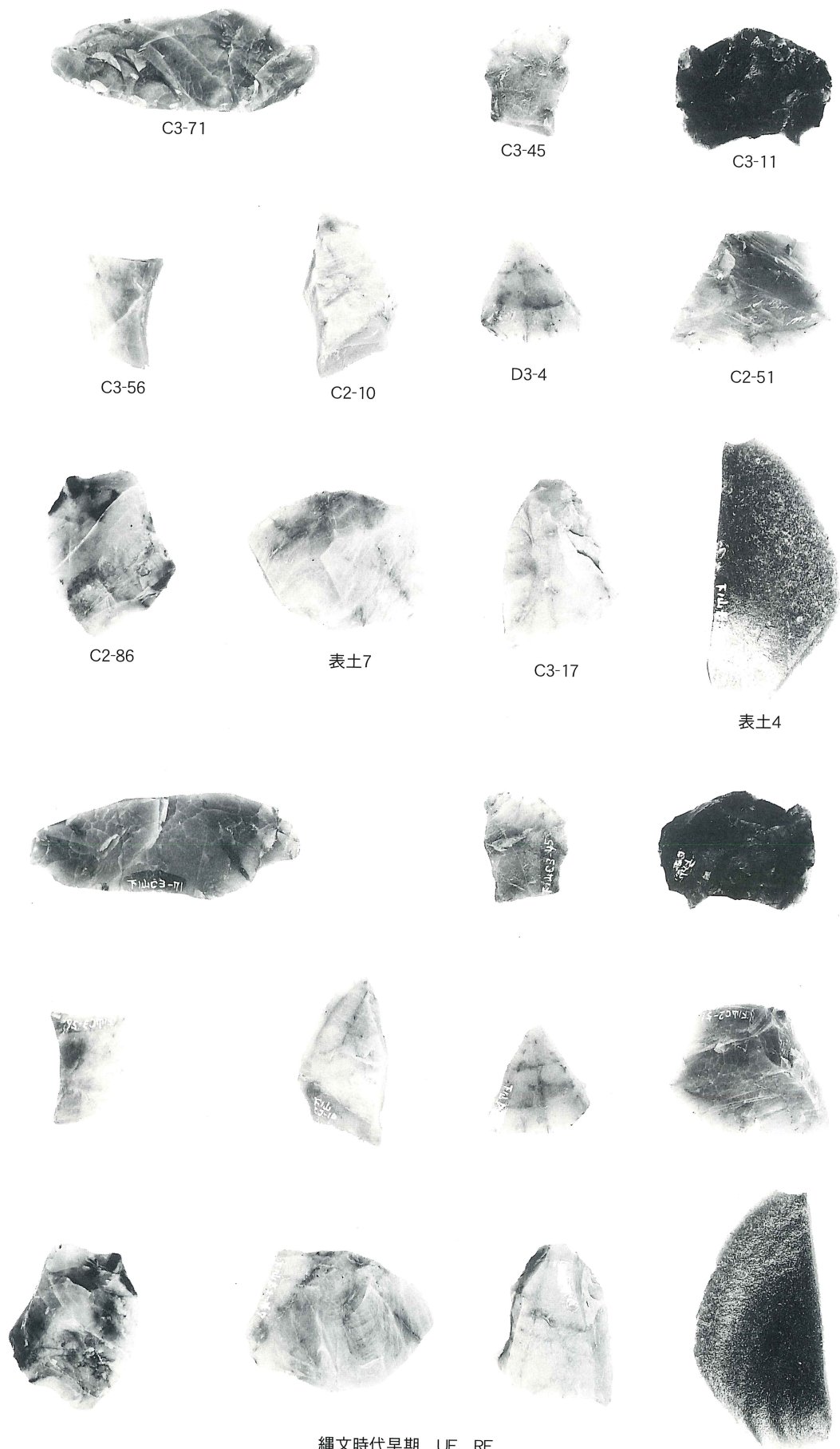


縄文時代早期 搔器、削器

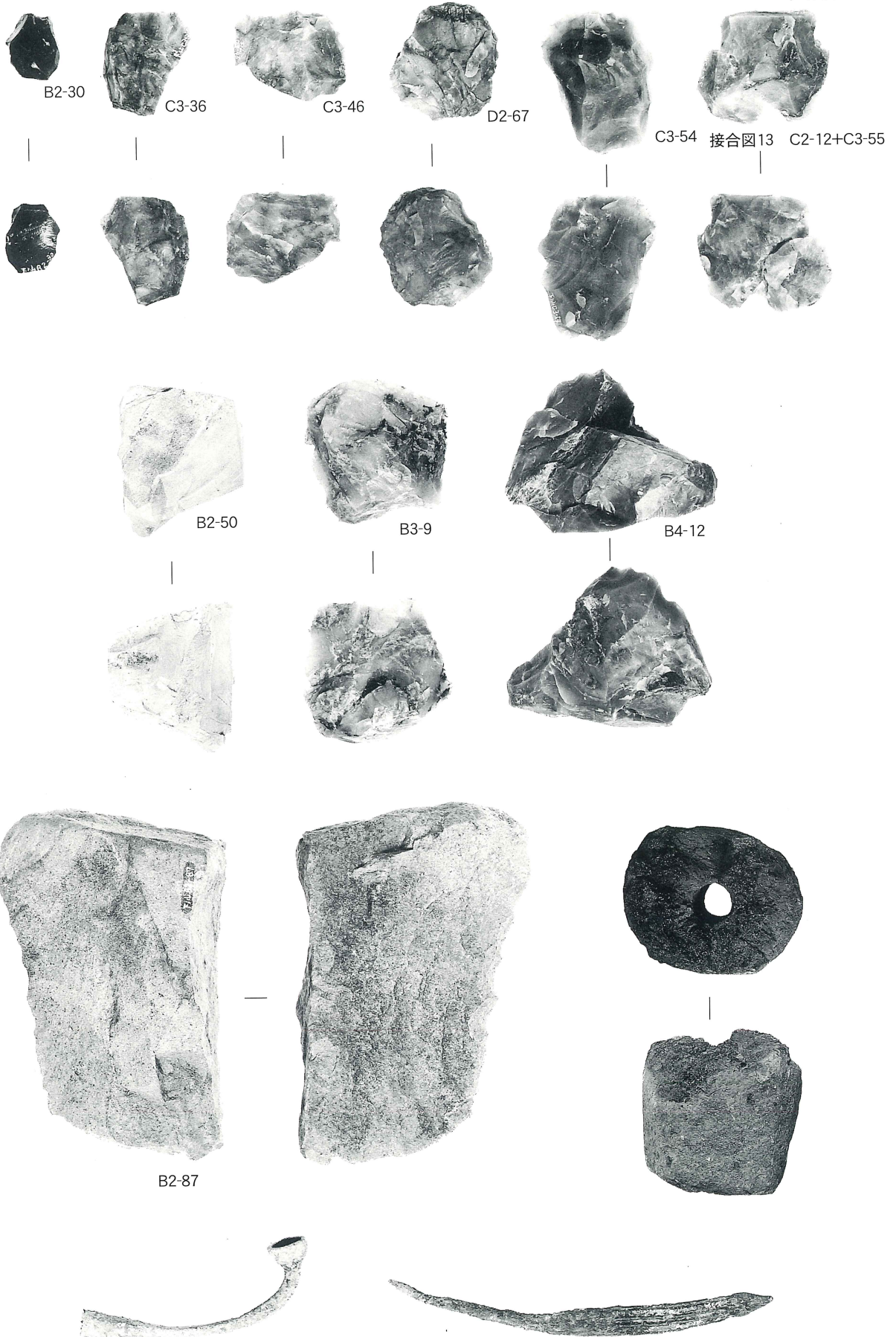


縄文時代早期 スクレイパー、RF

図版12



縄文時代早期 UF、RF



縄文時代早期 石核、チョッパー 中・近世 キセル、簪、鞆羽口

フリガナ	シモノヤマイセキ
書名	下ノ山遺跡
副書名	東九州自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(1)
巻次	—————
シリーズ名	大分県文化財調査報告書第114輯
シリーズ番号	(1)
編著者	清水宗昭 栗田勝弘 野崎哲司
編集機関	大分県教育委員会
所在地	〒870-0021 大分県大分市府内町3-10-1
発行年月日	2001年3月30日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
シモノヤマイセキ 下ノ山遺跡	オオイタケンウスキシ 大分県臼杵市  オオアザヨシオノ 大字吉小野	442046	新発見	33°07'06"	131°44'09"	19980715 ~ 19990226	1000m <sup>2</sup>	東九州自動車道建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
下ノ山遺跡	包含層	旧石器時代 縄文時代 中・近世	集石炉 土坑、柱穴等	石器 縄文早期石器・土器 輸入陶磁器・鞆羽口	

大分県文化財調査報告書第114輯

—東九州自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(1)—

下ノ山遺跡

平成13年3月30日

編 集 大分県教育庁文化課（文化財資料室）  
〒870-1113  
大分市中判田1977-1  
TEL(097)597-5675

発 行 大分県教育委員会  
〒870-0021  
大分市府内町3丁目10番1号  
TEL(097)536-1111

印 刷 日の丸印刷株式会社